

---

# 恋姫†先史 光武帝紀

家康像

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫十先史 光武帝紀

### 【Nコード】

N0036U

### 【作者名】

家康像

### 【あらすじ】

三国志の物語が始まる二百年前。  
荊州南陽の地において、一人の英雄と、その仲間たちとの物語が幕を開ける。

(\*)この物語は作者の妄想です。絶対に史実と混同しないでください。

## 序章 二人のシュウ（前書き）

前回の読み切りから性懲りもなく、とんだ妄想を連載することになりました。

これはただの妄想ですので、絶対に鵜呑みにしないでください。

願わくば、これを機に本物の光武帝・劉秀のことに興味を持っていただける方が増えることを……。

## 序章 二人のシュウ

人間という名の生物には、不可能はないと、どこかの誰かさんが言っていたと思う。

確かにその通りだ。どんなに苦手なことでも、何度も練習をすればできるはずだ。

失敗を恐れずに挑戦すればいい。物事をやらなくて後悔するくらいなら、やってから後悔した方がいい。たいていはそれでいいのだ。

だが、さすがに自分の命に関わることとなれば、話は別だ。

そういうことに関して、あまりやりなれていないことには手を出さない方がいい。

俺はずっとそう思ってたし、これまでずっとそうしてきた。今日の夜までは。

もし、この俺……。柳修やなぎしゅうがもっと自炊が得意だったら。

もし、今晚、手元の小遣いが、あと百円でも残っていたら。

もし、俺が「今晚はカツ丼が食いたい」と考えなければ。

もし、冷蔵庫の中の材料の消費期限をきちんと確かめていたら。

もし、あと十分くらい、具をしっかりと煮込んでおけば。

おそらく結果はもつと違ったものになったことだろう。

慣れない料理に手を出し、しかもそれを自分ひとりで全部食った結果がこのザマだ。

端的に言おう。俺は現在、自分の通う私立高校の寮の狭い一人部屋の中で、椅子ごと床に倒れている。

たぶん、卵が、いやあるいは豚肉かなんかがあたったんだろう。宝くじや福引ではハズレばかりなのに、なんでこういうのは当たるのか……。

まあ、いいか。考えても無駄だ。腹は死ぬほど痛いし、頭は熱い。そして、まぶたがだんだん、重くなっていく。俺、死んじゃうのかな……。この世にはやり残したことがいっぱいあるのに……。

レッドクリフ  
赤壁はまだ見ていないし、友人から数日前に借りたばかりのPCゲーム「なんとか無双」は未プレイだ。実は俺はまだ十六歳だけど……。おもしろそうだったのに……。

ああ、もう眠い……。せめて来世で生まれ変わるなら、メシの旨いところがいいな……。

最後に一言……。もう……。二度と……。自分で料理は……。

\*

「……………」

明るい日差しを感じて、少年、柳修やなぎしゅうは目を覚ました。

「もっ……………、朝か……………」

そう思った彼は、ゆっくりと身を起こすと、ぐっと背伸びをした。

「ああ、眠い……………。ん？」

ふとあくびをしながら周囲を見回した時、彼は異変に気付いた。

「ここ、どこだ？」

あわてて周囲を、きよろきよろと見回す。彼の眼に映ったのは、木でできた扉に、独特の模様の入った壁や柱。少なくとも、修の住んでいる周辺の建物には見られないものだった。異変に気付いた彼は、咄嗟に昨日の事を思い出した。

「えっと、たしかだな。俺は昨日の夜に食ったカツ丼を食って、それがあたって、そして倒れたんだ。だとしたら……………」

そうだとしたら、彼の行き着く場所は二つしかない。病院のベッド。そうでなければ天国。その時の彼には、そうとしか考えられなかった。

「や、やっぱり俺は死んだのか!？」

そう思った彼は、慌てて自分の頬をつねった。それも思い切り。めっちゃくちゃ痛かった。

「いただだ！？」

自分でやって、自分で痛がる。相当な間抜けである。だが、そのおかげで一っだけわかったことがある。ここは天国ではないということだ。

「ああよかった。俺、生きてる……」

そう言って安心した時だった。彼の寝ていた部屋の、昔漫画で見たような、まるで古代中国の雰囲気을 匂わせる模様のついた戸が開いたのは。

「ん？」

修は思わず、開いた戸の方に目を向けた。

「あ、目が覚めたんだね。おはよう」

何気ない声が聞こえた。修は咄嗟に声の主の方へと目を向けた。

そこに立っていたのは、自身の蒼い髪を、頭の後ろで一括りに結んでいる、同年齢くらいの少女……、じゃなくて、少年だった……。

「あ、ああ……、えっと……」

わけのわからないまま、修はコク、コクと頷いた。

「ああ、まだ起きたばかりでしょ？ 無理しなくていいよ」

一括りに結んだお団子髪を、白い絹で纏めた少年は、優しげな表情で、修に言った。声変わりはいしていないのか、なんとなく中性的な感じのする声だった。

「う、うん。ところで、ここは？」

混乱しながらも、修はなんとか質問しようとした。ここはどこかと。

「ここ？ ああ、ここはね、僕の兄上のお屋敷なんだ。一応ね」

ニコリと笑いながら、少年は修のすぐ隣まで来た。そして修の寝ている布団の横に座る。

「うーん、お屋敷だった？ どの？」

修はわからないという表情で、再度質問する。

「ここは、けいしゅうなんやうぐんさいやうりょうしんりやう荊州南陽郡蔡陽県春陵郷だよ？ 君、どこから来たのかな？」

めちやくちゃ長ったらしい地名をいう少年。彼は極めて親切であった。だが、悲しいことに、修は余計に混乱するだけだった。

「荊州？ 春陵郷？ なんか、『三国志』に出てきた地名に似ているよつな……」



「サンゴクシ？」

「あ、いや。悪い。こっちのお話だ」

慌てて修正する修。ちなみに、一応彼は、「三国志」のファンである。ただし、歴史が得意なわけではないが……。

「あ、それより先に、君の名前教えてくれないか？ 俺は、柳修やなぎしゅうつていうんだ」

何を思ったのか、修は咄嗟に話をすり替えたのである。

「ヤナギシユウ？ 変わった名前だね」

「あ、ちなみに『柳』が姓で、『修』が名前な」

一言付け加える修。すると、少年は何故かパアッと、顔を輝かせた。

「へー、シユウ君っていうんだ。僕と同じ名前だね」

そう言うと、少年は自分の名前を口にした。

「僕の姓は劉。名は秀。字は文叔ぶんしやく。よろしくね！」

\*

世祖光武皇帝、諱は秀、字は文叔、南陽蔡陽の人、高祖の九世の孫なり。景帝の生みし長沙定王発に出自す。発は春陵節侯の買を生み、買は鬱林太守の外を生み、外は鉅鹿都尉の回を生み、回は南頓令の欽を生み、欽は光武を生む。〔後漢書本紀一上光武帝紀第一上 冒頭より〕

\*

三国志の物語を遡ること二百年前。

。 荊州南陽郡春陵郷において、一つの物語が始まるうとしていた。

## 序章 二人のシュウ（後書き）

主人公紹介

・柳修やなぎしゅう

高校二年生の少年。初登場時、16歳。この物語の主人公。青春真っ只中のはずなのだが、中学時代のつらい思い出ゆえに、女の子と話すのが苦手で、すぐに上がってしまう。また、女の子に対して鈍感なところがある。いわゆる唐変木。ある日、自分で調理したカツ丼を食ったら、使用した卵がいたんでいたせいで、倒れてしまう。そして目が覚めると、見知らぬ世界に……。一人称は「俺」。

初登場人物

・劉秀

字は文叔。荊州南陽郡蔡陽県春陵郷の人。一人称は僕。景帝の子、長沙定王・劉発の末裔。初登場時、16歳。

これはまだ序章です。  
次に本編を載せます。

## 第一章 春陵郷の劉兄弟（前書き）

本編開始です！

どうぞ！

## 第一章 春陵郷の劉兄弟

「僕の姓は劉。名は秀。字は文叔ぶんしやく。よろしくね！」

「……劉……秀……？」

蒼い髪の少年の名前を聞いて、柳修やなぎしゅうは、それを自分の頭の中で何度も反芻した。

（名前の雰囲気からすると、なんだか中国っぽい感じがするな。しかし……）

何度も考えた。しかし、余計に分からなくなるばかりだった。

無理もない。ただでさえここがどこなのかわからない上に、目の前の少年は、麻製の服を着ているし、髪型も今どきの若い男のそれとは随分と違うのだ。少年のような髪型や服装の人間を、かつて見たことがあるであろうか。いや、強いて言えば、修には見たことが何度かあった。ただし、現実で見たことはない。そう、昔読んだマンガの「三国志」とか、それをモチーフにしたアクションゲームとかに登場するキャラクターとかの恰好だ。

修は知る由もないが、日本のとある電気街のイベントなどにおいては、わざとそう言う恰好をする人は大勢いる。

しかし、未だにそう言う恰好で毎日生活する人はいるであろうか。もしいたとしたら、その人はよっぽどの変わり者と言わねばならない。

考えれば考えるほど、頭がこんがらがってくる。

(ああ、もう！ 考えてもキリがない！)

そう思った時だった。

「あ、そうそうー！」

先ほど「劉秀」と名乗った少年が、何かを思い出したように言った。

「シユウ君、でいいかな。君はこの莊園近くの林の中で倒れてたんだけどね。いやー、ビックリしたよ。僕が薪採りに行ったときにたまたま見つけたからよかったけど……」

「はっ、林の中？」

残念ながら、劉秀少年の言葉は、修を余計に混乱させただけだった。

「それ、本当！？」

「そうだよ？ 僕が見つけて、家の皆に急いで知らせて、そしてここに運んだんだからね」

どつやら本当のようだった。

(なんでだー！？)

修は正直、泣きたかった。いったい、どこの国に、自分で調理したカツ丼があたって倒れて、目が覚めたら、わけのわからない、全然違うところに来ていているという経験をしたことのある人間がいるのであろうか。

「なあ、劉秀……」

修は低い声で呼びかけた。

「はい？」

「いや、文叔の方がいいかな……？」

「ううん。『秀』で大丈夫だよ」

「ああ、わかった……って、そうじゃない！」

突然、修は布団を押しつけて立ち上がった。

「わっ!？」

思わず劉秀少年は尻もちをつく。

「あのよ、劉秀さん」

「はい？」

「さっき、二二はどいだって言ったかな？」

「え。だからここは、荊州南陽郡蔡陽県の春陵郷だよ？」

「ああ、そうだったな」

そうして一息つくと、修は再び聞きたいことを聞く。

「で、ここはなんとという国だ？ 首都は、都はどこだ？ いったい、誰が治めている？」

彼はそう言ったのである。彼にしてみれば、賢明な判断であったであろう。

「国……？ ああ、もしかして国号のこと？」

劉秀少年は、ポンと両手を打つと、一つ一つ丁寧に答えてくれた。

「国号は『大新』だよ。そして都は長安……、いや今は『常安』、の方が正しいのかな。あと、皇帝陛下の事を言っているんだったら、王巨君さまのことだけど。もしかして知らないの？」

心配する劉秀。だが、修は本当にわからないようだった。

「ああ、全然、知らないんだ。それじゃ、聞くが……」

今にも泣きそうな表情で、今度は修の方から言った。

「劉秀。君は、『日本』って知っているか？ あと、『東京』は？ それから……！」

「わ、ちょっと待ってよ！ そんなにいっぱい言われても！」



修の迫るような剣幕に押されて、劉秀が「待った」をかけた。それに思わず、修は我を取り戻した。

「あ、ああスマン……」

そしてもう一回、聞いた。

「で、知っているか？」

はたして劉秀からは、一番返ってきてほしくない返答が届いたのであった。

「ううん、全然知らないよ？」

キョトンとした表情である。それを聞いた瞬間、修はその場に崩れた。目からは涙が流れだし、口元は全然楽しくもないのに、笑っている。

「は、ははは……」

誰がどっから見ても、普通の状態ではない。劉秀は心配になった。

「ね、ねえ。だいじょうぶ？」

気になったので、一声かけようとした瞬間だった。修が狂ったように笑い出したのは。

「はーはっはっはっはー!!」

「わあ!??」

本日二度目の尻もちをつく劉秀。そんな彼を余所に、修は狂ったように声をあげて笑い続けた。

「はーはっはっはっは！　なんだよ、チキショー！！」

もう、やけっぱちだった。すべてがどうでもよかった。

「なんだよ、コレ！？　昨日の夜、俺はカツ丼食っただけだったのに、なんでこんなわけのわからない所に行かねばならないんだ！！　荊州？　春陵郷？　知るか！　『三国志』だろうが、『水滸伝』だろうが、知らないが、俺の日常を返せ！！」

発狂もいいところである。目からは涙を垂れ流し、口からはかつて叫んだことがないほどの大声を発し、手足をバタつかせ、もはや駄々っ子よりも厄介な存在である。

「わ、わー！？」

劉秀少年には、この赤ん坊よりも厄介な存在を静止させることはできない。それでもなんとかしようと、必死になって呼び掛けた。

「落ち着いて、落ち着いてっばー！！」

「うるしゃいー！！」

残念ながら、修の耳には一言も入らなかった。それどころか、火に油を注いだかのようにだった。

「落ち着いていられるか！！　そりゃ僕だって、ガキの時に考えた

ことはあるさ！ テレビゲームの世界に住みたいって。だけどよお、そんなの叶わないって知っているからこそ言えたんだな！ まさか実際に、「国無双」の世界に行くなんて！！ どうすりゃいいんだよ！！ お父さん、お母さん！！ あのね、僕ね、僕……！！」

もはや精神崩壊寸前の修。手のつけられないとは、こういうことであろうか。

だが、修は思わぬところで、助けられることになるのである。

「じゃあああかましいわあああ！！」

突然、修の大声をも遙かに上回る怒声が鳴り響いた。それはもう、雷なんか怖くないくらいにである。

「ぐわあ！？」

ついさっきまで発狂状態に等しかった修は、この一撃で我に返った。と、同時に、頭が何かに撃たれたがごとく、ガーンとなって、そのまま敷いてある布団の上に倒れ伏した。それだけ、凄まじい怒鳴り声だったのである。

「朝っぱらから、なーにを騒いでいるかああ！？」

第二撃が来た。それと同時に、先ほど劉秀少年が入って来た戸の方から、一人の男が入って来た。どうやら、その男が先ほどの声の主だったようだ。修の目の前にいる、華奢な少年とは正反対の、見るからに筋肉質な、その三十代前後くらいの、やくざの親分みたいな男は、のっしのっしと、まるで獲物を見つけた虎のごとく風貌で、

二人のいる部屋の中に入って来た。

「？兄様！？」<sup>えん</sup>

「ひ、ひい！？」

先ほどとは打って変わって、修は脅えてしまった。そして、次の行動は早かった。

「申し訳ございませんでした！」

そう言うやいなや、彼は布団の上で、そのまま土下座したのである。

それを見たたん、劉秀から「？兄様」とよばれた男は、不意をつかれたのか、呆けた表情で、子猫のようにうずまっている修を見下ろした。しばらくの間、気まずい沈黙が流れた。

だが、それも束の間だった。

「だーはっはっはっは！！　なんだ、コイツぁ！？」

修の姿を見て、男は豪快に笑い始めたのである。

「まったく、どこの馬の骨だ。ヒョロヒョロした腕をしおって。おまけに朝っぱらから泣きわめきやがって！　おまけに……」

そこまで修のことを言いたてた後、突然、苦笑しながら黙りこむ。

「え？　なに……？」

思わず身構える修。だが、次に男が口にしたのは、まったく予想もしていなかった一言であった。

「腕はヒヨロヒヨロのくせに、『そつち』には、たいそうご立派なものぶら下げ寄つてよオ。たいしたモンじゃねえか！」

「は？」

意味がわからずに、戸惑う修。ふと、劉秀少年の方を見ると、彼は何故か、頬を赤くして、自分の右手で口元を押さえながら、苦笑していたのである。

「ん？」

その時修は、ふと違和感に気付いた。

「なんだか、体がスーッスーする……？」

そうである。やけに体全体が、肌寒く感じたのだ。

と、その時、苦笑いの表情を浮かべていた男が、口を開いた。

「秀児。お前……」

「あっ」

劉秀が、何かを思い出したかのように、両手を撃った。そして、顔を真っ赤にしながら、申し訳なさそうに謝り始めた

「ごめんね、修くん。実は昨日、君の体にケガがないか診ようとしたんだよ。ホント。幸い、どこにもケガは無かったからね。だけど、そのまま安心して、つい忘れちゃった」

テへつと、わざとらしく開き直る劉秀。少年ながら、可愛いものだったが、今はそれどころではない。

「ま、まさか……」

嫌な気分になった修は、恐る恐る、自分の体、胸より下に目を向けようとした。と、同時に、劉秀が、近くの何かを指差した。

「あ、安心して。修くんが着ていた、その……、変わった服は、そこに全部畳んで置いてあるからね」

言われた方を見てみると、その通りだった。全部、見事きれいに折り畳まれて、新品同然に置かれている。学校の制服の上着に、ズボン。そして下着のシャツに……、パン　まで。それはもう、きれいに。

それを確かめた修は、すぐに自分の体を見た。

そして、彼の眼に映ったのは。

「ノオオオオオオオオ!!」

むき出しになった、はるか南の暑い土地に生息する、とある巨大な草食動物のお鼻であった……。

\*

「だーはっはっはっはー!!」

その日二度目の、豪快な笑い声が、屋敷周辺に響き渡った。

「うう、お終いだオレ……」

急いで服を着直したものの、落ち込む修。

「ごめんね。あまりに心配だったもので……」

そんな修に向かって、劉秀少年がぺこぺここと謝った。なぜか、未だに頬がほんのりと赤かったが。

「いや、いいんだ。俺のことが心配だったのなら、仕方ないだろ……」

無理やり作り笑いをする修。すると、先ほどから豪快に笑っている男が、口を挟んだ。

「まあ、この『秀児』は、すっごく真面目で、馬鹿なほど他人想いな奴だからな。時々抜けているときもあるが!」

そう言ってまたまた大笑いすると、男は自己紹介に移った。

「そう言えば、言い忘れておったわ。俺の姓は劉。名は？。字は伯升。<sup>しょう</sup>この屋敷の主だ！」

「僕のお兄様なんだ」

さりげなく、劉秀が補足する。

「まあ、気軽に伯升とでも呼べ！」

「は、はい！」

修は思わず声が上がってしまふ。だが、そんなことはおかまいなしと言わんばかりに、劉？こと、劉伯升は続けた。

「それで、貴様の名は？」

「はい！ 姓は柳。名は修です！」

「ヤナギシユウ？」

「あ、はい」

「どんな風に書く？」

そう言われて、修は困った。書くものがないからである。

「ああ、それなら、僕が筆と硯を持ってくるよ」

そう言うと、劉秀が奥の方の部屋へと入って行った。実に機転の



きく子である。やがて彼は、筆と硯を持って来たのである。だが、肝心の紙を持ってきていない。一瞬、修はそう思った。だが、間もなく違うことに気がついた。

「はい、これに書いてね」

言われて渡されたのは、木の皮だった。それを見て、修はまた溜め息をついだ。

(本当に、俺の知らない世界に来てしまったんだな……)

なにはともあれ、渡された筆で、自分の名前を書いたのである。もちろん漢字で。

「これは……」

劉伯升はしばらく、修の名前の字を見つめていた。そして言った。

「字の形は異なるが、姓の方は『柳』の字のようだな。そして、名の方は、『修』の字に似ている」

それにつられて、まじまじと修の名前を見つめる劉秀。興味深そうに眺めていたが、その時、ふと口を開いた。

「なるほど。『柳修』か。僕と同じだね」

「は？」

一瞬、呆気にとられる修と伯升。だが、そんなことはお構いなしと言わんばかりに、劉秀は続けた。

「だって、『柳修』でしょ？　そして僕が『劉秀』。ほとんど同じじゃない」

しばらく沈黙が流れた。要は、ダジャレだったのである。

だが、そんな沈黙も、伯升によって撃ち破られた。

「だーはっはっはっは！！　お前、何を言い出すかと思いきや、うまい事を言いやがって！！」

そう言って笑いながら、二回、三回と、劉秀の背中を叩いたのである。言った張本人である、劉秀自身も、自分で笑っていた。もっとも、修はついていけてなかったが。

「さて、洒落で笑うのはこの辺までだ」

やがて落ち着きを取り戻した伯升が、そう言った。そして今度は真剣な表情になって尋ねたのである。

「さて、『ヤナギシユウ』とやら。いろいろと質問に答えて貰おうか」

「は、はい」

たじろぎながらも、しつかり返事はする修。こうして彼は、伯升たちの質問に答える運びになったのである。

むろん彼が、どこから来たかから、好きな食べ物のことに至るまで、全てを正直に話したことは、言うまでもない。

\*

「なるほど……」

全てを聞いた伯升は何度か頷いた。隣では劉秀が同じように目をつぶって頷いている。

正直、修には信じて貰える自身がなかった。当たり前である。いきなり全然知らない国の名前とかを言われたら、信じて貰えるわけがない。普通はそうである。

だが、そんな不安は、いい形で裏切られることになった。

「はっはっは!!」

またしても伯升が大声で笑い始めた。だが、今度の笑い声は、何かが違う。さっきのような、よく言えば豪快。悪く言えば人を見下したような笑い方ではなかった。それは、なんとなく、暖かい笑い声であった。

「貴様は本当に、おもしろいことをいうわ!」

伯升はそう言ったのである。修はまだ不安を隠せないながらも、

恐る恐る聞いた。

「あの、俺の話、信じてくれるんですか？」

「ああ？ 信じる？ 信じられるか、そんな話」

尊大な態度で、それなのにそれを思わせない口調で、伯升は言い続けた。

「信じるも何も、おもしろすぎるわ！ この劉伯升を、ここまでおもしろがらせるヤツは、初めてじゃ！ それにな」

一呼吸置いてから、伯升は修の眼を見て話した。

「貴様の目を見れば、とうてい嘘をついているようには見えんわ。ま、不安はあるようだがな」

それを聞いた修は、びくびくして冷や汗をかきながらも、なんとか安心した。

(まさか、俺の話も信じてもらえるなんて……)

だが、今度は劉秀が口を開いた。

「ところで、？ 兄様」

「なんだ、秀児？」

「修くんが嘘をついていないとしまして、彼はこの後、どうするのですか？」

「あ!？」

修は悲鳴をあげそうになった。なにしろ、彼は拾われの身である。この見知らぬ世界で、どう生きればいいのかなど、わかるわけがないのだ。

「どうするかだつて? 決まっているだろ」

そう言つと、劉伯升はわざとらしく、一度咳をした後、修に向かつて言つた。

「『ヤナギシユウ』。貴様、今日からここで働け」

「はい……、はい?」

咄嗟に聞き返す修。彼は慌てた。

「あの、伯升さま。ど、どついついことでしょうか?」

「ああ? 言葉の通りだろうが。俺はお前の事が気に入った。そんなお前を、野に放して、むざむざ盗賊どもの餌食にさせるのはもつたいねえだろうが」

「そつだよ」

劉秀が言葉を繋いだ。

「最近、この辺りでは、盗賊が頻繁に出没していて危ないんだ。ついこの間には、討伐に来た二万人の官軍が、呆気なく蹴散らされた

ほどだよ」

修は絶句した。この世界は、彼の予想以上に危険だったのである。

「だから、この莊園にいる方が安全だよ」

「秀児の言うとおりだ！ それに、働いた分、しっかり飯も食わしてやる！ その代り、しっかりと働いてもらうぞ！ ああ、それと……」

伯升は最後に一言付け加えた。

「そのヒヨロヒヨロした腕が気に入らねえ。よし、この劉伯升が直々に、貴様を鍛え直してやろう！ 有りがたく思え！ あと、貴様はそのわけのわからない国から来たということは、他人には言うな！ それから、今日からお前の名前は、『柳修』だ！ 字はまた今度、直々につけてやろう！」

「わあ、『柳修』か！ 改めてよろしくね」

もはや、修には拒否権はなかった。

「そんなああああ！！！」

その日、またしても春陵郷に、少年の叫び声が響き渡ったのであった。

都・常安（長安）のとある屋敷

「おい、？仲華。聞いたか？」

「なに？」

「陛下が西南夷の句町国くつていこく討伐に送り込んだ二十万の軍が、壊滅したらしいぞ」

「ああ、俺も聞いた。なんでも、十に八、九人が餓死。そうでなければ、病に倒れたって話だ」

「うわー、まったく、イヤな話ね」

「それと、匈奴の奴ら、また国境を犯したらしいぞ。大勢殺されたらしい」

「また？『匈奴单于璽』から『新匈奴单于章』に変えられてから、ずっとじゃない」

「ああ。連中が野蛮なのは認めるが、あれでは『攻めてくれ』と言ってるようなものだよ」

「まあ、私でも怒るわね。『降奴服于』だとか、『下句麗』だとか言われたら」

「そのことだが、群臣たちは慌てて、『恭奴善于』に改名するよう  
に進言しているそうだ」

「なにそれ？ 他にやることあるでしょうに。何年か前に河が氾濫  
したでしょう？ それを先に、早くなんとかするべきじゃない」

「まったくだな」

皇帝・王莽の治世。広大な中原には、徐々に怪しい暗雲が立ち込  
めつつあった。



## 第一章 春陵郷の劉兄弟（後書き）

初登場人物

・劉？  
じゆくえん

字は伯升。しやくせい 荊州南陽郡蔡陽県春陵郷の人。劉秀の長兄。歳は三十前後。劉秀と違つて、任侠の風があり、勇猛果敢な人物。先祖である高祖・劉邦を思わせるほどの自信家。南陽劉氏、春陵侯家の分家の現当主。

・？禹  
う

字は仲華。ちゆうか

荊州南陽郡新野県の人。現在、長安（常安）にて留学中。

## 第二章 劉孝孫と来君叔（前書き）

さて、第二話です！

ちなみに、本日、岩波の「後漢書」翻訳の第二冊と第三冊を買いました。

おかげで小遣いが（汗）

でも、皆さまのためなら、なんだってやります！

それでは、ご覧ください！

## 第二章 劉孝孫と来君叔

紆余曲折の末、劉兄弟のもとで働くことになった修。

しかし、機械文明で育った凡々である彼にとって、この世界での手作業中心での仕事は、慣れないものばかりであった。

都会育ちの彼は、当然農業なんかしたことはない。だから、慣れない作業ばかりなのである。

薪の割り方、鋤の振るい方、斧の使い方などなど、とにかくわからないことばかりである。

そのため、彼は何度も失敗を重ねる羽目になった。

例えば、薪を割る際には、薪割り用の斧を上手く扱えず、思い切り振りあげた反動で体勢を崩し、その結果、後ろに置いてあった水瓶に頭から突っ込んで溺れそうになり、辛うじて劉秀に助けられたのである。

また、畑で鋤を振るおうとした際には、とにかく大きく振るえばいいと勘違いした揚句、この時も姿勢を崩して倒れ込み、運悪く、近くに山と積んであった落ち葉の中に上半身を突っ込んでしまったのである。牛糞や馬糞の山ではないだけ、はるかにマシだったと言わねばならない。

とにかく、最初の数日間は、苦難の連続であった。

だが、修はついに失敗しなくなったのである。と、言うのも、彼の失敗する様を見ていられなかったのか、劉秀が付きつきりで教えてくれたからである。

劉秀が親切かつ、丁寧に教えてくれたおかげで、なんとかひどい失敗はしないようになっていったのである。

さらに三日後には、劉伯升が直々に、修に「字」を名付けてくれたのである。

「決めた！ 今日から貴様の字は伯昇だ！」

「は、はい？」

慌てる修を余所に、伯升は話を勝手に進めたのである。

「貴様は、元々いた場所では、一人息子だったそうだな！ つまり、『長男』ということだから、『伯』だ。そして姓名が秀児のそれと被るのなら、この劉伯升と被らせてもよいだろうが！」

そういうわけで、最終的には修の「この世界」での名前は、「姓は柳、名は修、字は伯昇」に決まったのであった。

それにしても、名前全体の発音が、劉兄弟のそれを合わせたようなものになるとは、本当に駄洒落以外のなにものであろうか。なにはともあれ、修は伯升が三日間考えて思いついた「字」を受領したのであった。

そんなこんなで、一週間ほどが過ぎたある日、修は伯升に使いを頼まれた。その用事というのは、

「この近くに住んでいる親戚に、この書簡を届けてこい」というものだった。だが、修にはその親戚の家がどこにあるのかわからぬ、全然わからないのである。

結局、劉秀が道案内をつとめることとなり、二人は出発した。

\*

「とじろで……」

道中、修はふと思った疑問を口にした。

「なんだい？」

「うん。君の名は、秀で、字は文叔だろ？」

「そつだよ」

「だけど、伯升さんが君のことを呼ぶ時、なんか違うような気がするんだけど。あれってあだ名か？」

「ああ、それか！」

わかったぞと言う表情で、劉秀が答えた。

「それって、？兄様が僕のことを、『秀児』しゅうじって呼ぶ時のこと？」

「そう、それ！」

「そういえば言っていなかったね」

そう前置きした後、劉秀は説明する。

「あれは、『真名』だよ」

「『真名』？」

訝しがる修を見て微笑んだ後、劉秀は説明した。

「真名というのはね、名前の通り、『本当の名前』みたいなものなんだ」

「本当の名前？」

「そうだよ。赤ちゃんが生まれた時、親は諱しみなと字あかな以外に、真名を名づけるの。その真名は神聖なものだとされていて、親兄弟や心を許した親友だけが、それで呼ぶことが許されるんだよ」

「へえ〜」

修は黙って聞いていたが、ふと、一つの疑問が頭をよぎった。

「それじゃ、もし、家族や友達以外の人間が、勝手に、その真名を呼んだりしたら、なんかマズイの？」

「そりゃ、そうだよ。マズイなんてものじゃないよ」

そう言っで一息入れた後、劉秀少年は、最も重要なことを口にした。

「もし許されていない人が、勝手に他人の真名を呼んだら、大変な無礼に当たるんだよ。その場で斬り殺されても文句は言えないんだからね」

「なっ」

修は思わず息を呑んだ。まさかそこまで重大なことだとは思っていなかったからだ。そんな修を見た劉秀は、さわやかな笑みを浮かべながらこう言った。

「ははは。僕なら別に大丈夫だよ。だいたい、名前も真名も、『秀』という文字が被るからね。あ、そうだ！」

そのまま優しげな表情で、何かを決心したかのように言う。

「修くんもこれからは、僕のことを『秀児』って呼びなよ。そっちの方が呼びやすいでしょ？」

それを聞いた修は、戸惑った。

「え、いいのか？」

「うん、いいよ」

「だけど、さっきそれは、神聖なものだって……」

「あはは。そう固くならないの。だいたい、僕も君も、とっくに家族みたいなものじゃない。違うかな？」

「ま、家族と言うよりは、友達、の方が正しいような……」

「ま、僕は間違っても、修くんに怪我させるようなことはしないからね。安心して呼んでよ」

「あ、うん」

こうして一拍間を置いた後、修は初めて、劉秀の真名を呼んだ。

「とりあえず、これからもよろしくな。『秀児』」

「うん、ありがとう。修くん！」

こうして、修と「秀児」のお互いの距離が、また縮まったのであった。

\*



そうこうしているうちに、目的地である屋敷が見えてきた。

「うわあ」

修は感嘆の息を漏らした。目の前の屋敷は、劉秀こと秀児や伯升が住んでいる屋敷よりも、ずっと大きい。劉伯升の屋敷も、その辺の農家と比べると大きくて頑丈で、なおかつ威厳もある造りだったが、目の前の屋敷は、まるで城門のような頑丈な門をもち、四方を高い塀で囲い、その内側から櫓や高樓がそびえ立っているなど、まるで小さなお城が砦のような造りであった。

その作りといい、趣といい、流石は、古代中国と言ったところである。

「たのもう!」

門の前にたどり着いたところで、秀児が声をあげた。それを見た修が、

(インターホンはないのか、やっぱり……)

と、密かにカルチャーショックを改めて痛感していたのは別の話である。

やがて扉が開くと、門番らしい、一人の男が出てきた。

「あ、これは、これは文叔さま」

「いやー、御苦労だね。孝孫義姉さまに用があるんだ。通してもら

えるかな？」

「はい、どうぞ」

と、そんなやり取りの後、二人は門をくぐって、屋敷の中へと入ったのである。

屋敷の中を進む際、修はかつて見たことのないものへと、目が釘付けになった。

塀の内側のあちこちに建っている、おそらくは穀物などで満たされているであろう倉庫。日本の家屋とそれとは違う、いかにも中国風の模様が入った屋根瓦。そして、屋敷の中での荷物運びや雑用のために慌ただしく動いている人たち。修には全てが新鮮に見えたのである。

だが、とある使用人らしき女性とすれ違った時、修はふと違和感を覚えた。

「なあ、秀兎」

「なーに？」

「あの人は？」

修が指したのは、屋敷内を掃除している女性であった。それは別に、なんということはない。

「あの人は、ただの掃除人だよ？」

訝しげに思いつつ、普通に応える秀児。だが、修は何故か納得していなかった。

「いや、それはわかるんだけど……」

「どうしたの？」

「うん。あの人の着てる服のことなんだけど……」

「ああ、あれのこと？」

わかったと言わんばかりの表情で、秀児が手をポンと打ちながら答えた。

「あの服は、屋敷で働く召使めしつかいの女性むすめが着る服だよ」

「ああ、それは、まあ、うん……」

「どうかしたの？」

気になったのか、秀児が聞いてくる。

「いや、なんでもない」

修はそう言って言葉を濁した。

「ふうん。変な修くん」

秀児にそう言われてしまったが、彼の頭の中には入ってきてなかったからだ。なぜなら、屋敷内の召使の女性たちが着ている服装に

目を奪われてしまっていたからである。

(あれって、どこからどう見ても……)

そう。屋敷内で働く女性たちは、皆、白黒の衣装に身を包み、頭には白い布きれみたいなのをつけている。若干、中国風の衣装っぽく作られているが、それはどこからどう見ても、エプロンドレスとヘッドドレスである。それはつまり……。

(なんで……、なんでこんなところに、『メイド服』があるんだあ  
あああ!!?)

声にこそ出さなかったものの、内心、おもいつきりツツコまずにはいられなかった修であった。

\*

そうこうしているうちに、二人は客間にたどり着いた。

「こんにちは、春萌義姉さま！」

戸の前に着くやいなや、秀児が元気よく挨拶した。

「あら？」

部屋の奥から、優しそうな女性の声がした。秀児に「春萌はるも」と呼ばれた人の声のようだ。

「いらつしゃい、秀ちゃん。入っていいですよ」

それを聞いた秀児は、本当に嬉しそうだった。

「修くんは、僕の後から着いてきてね」

そう言い含めて、秀児は先入室した。続いて、修も入る。そして見た。

客間の奥には、秀児と同じ蒼い髪の女性と、若い男とが卓を囲んでいた。どうやら、直前まで何やら話し合っていたようだ。

「あ、来歎らいたん。君も来ていたんだ」

ますます嬉しそうな秀児。その結果、修はそっちのけにされてしまった。

「お、久しぶりだな、秀児。伯升とは上手くやっているか？」

「うん。でも、いろいろ大変だよ。？兄様、ちっとも仕事手伝ってくれないんだよ」

「ははは！ そりゃ、無理だなー」

「んもー、笑い事じゃないよう。大変なんだから」

まるで本物の兄弟であるかのように、熱く語り合う二人。と、そこへ蒼い髪を、一本の三つ編みにした、女性が割り込む。

「伯升さんは、相変わらずですね。ところで、秀ちゃん。今日は何の用ですか？」

「ああ、そうだった」

用件を思いだした秀児はひとまず、兄から渡されていた、一枚の書簡を「春萌」と呼ばれた女性に手渡したのである。

女性は受け取ったそれを、しげしげと眺めていたが、読み終わると、それを卓の上に、そつと置いた。（その際、なんとなく顔をしかめていたように見えたのは別の話である）

「伯升さんからの伝言は、確かに受け取りました。『考えておきます』って、伝えてくれますか？」

「はい。いつもすみません。春萌義姉さん」

ぺこぺこ頭を下げる秀児。そんな秀児をよそに、後ろにいる修の眼は、正面の卓前に腰かけている二人の男女に釘づけだった。

（いかにも、優しそうなお姉さんって感じだな）

彼はそう思った。たしかにそうである。三つ編みの女性は、まだ少女らしいあどけなさを、その顔に残していたし、見たところ、体つきもすつきりとしているようだ。修に限らず、誰が見ても美人だと思っであらう。

一方の若い男の方は、さっきの秀児との会話からわかるとおり、付き合いやすそうな印象の人間であった。

そんなことを修が考えていた時だった。

「ところで、秀児」

男の方が口を開いた。

「お前の後ろのソイツは誰だ？　また伯升の、賓客か？」

そう言われて、修が返答に困ったときだった。

「ああ、修くんのことを言うの、忘れてたよ」

秀児がそう言って助け船を出してくれたのである。

「彼はね、一週間くらい前に、？兄様が家に招いたんだよ。なんでも、『そのヒョロヒョロとした腕が気に入らないから、一から叩き直してやる！』とか言ってるね。ま、お手伝いとかしてもらってるんだ」

「まあ、あの伯升さんが！」

意外だと言わんばかりの表情で、女性が言った。

「珍しいこともあるもんだな。あの伯升が、そんなガキンチョを招くなんてな」

男も言った。それにしても、ヒョロヒョロだの、ガキンチョだの、

修は言われ放題である。

「ほら、修くん。二人に挨拶しなよ」

秀児が促したので、修は前に進み出て、頭を下げた。

「は、初めまして！」

緊張のせいか、声が上がらず。彼は初対面の人には緊張しやすい。おまけに、女性相手なら、ますますそうなるのである。

「姓は柳。名は修。字は伯昇です！ 何卒、よろしくお願いします」

上がりながらも、なんとか言いきることのできた修。言った後、彼は思った。

（なんだか、つつこまれそうだな）

案の定、彼の予想は的中した。

「おもしろい名前だな！ まるで伯升と秀児とを足して割ったような名前だ」

男の方が言った。

「そうなんだよ。おもしろいでしょう？」

笑顔で秀児が言う。やはり彼はおもしろがっているようだった。



「ふふ。誰かがとってつけたような名前ですね」

すると今度は、三つ編みの女性が痛いところをついたのである。だいたいあっているのだ。修と秀児は、思わずギクツとなった。

「まあまあ、別に不思議がることはないだろ」

笑いながら男が言った。

「皇帝陛下の『二名の禁』のおかげで、今や同姓同名の人間で溢れ返っているんだ。読み方が一緒くらいで、不思議がることはないだろ。まあ、それなりにおもしろいが」

そう言った後、彼は自己紹介した。

「俺の姓は来、名は歙、字は君叔だ。よろしく頼むぞ」

「それじゃ、私も名乗りますね」

男が「来歙」と名乗ると、次に三つ編み美女が名乗った。

「私は、姓は劉、名は嘉、字は孝孫。この屋敷と周りの土地の主です。伯昇さん。よろしく願いしますね」

「は、はい。よろしく願います」

修はしどろもどろに答えながら、来歙と劉嘉に向かって頭を下げた。

それを見て、秀児が笑いながら補足説明した。

「来歎は僕の従兄なんだよ。そして、春萌義姉様、おっと、劉嘉義姉様は僕の親戚で、来歎の義妹さんなんだ」

「な、なるほど……」

正直、修は頭がこんがらがって、よくわからなかった。とりあえずは、秀児にとっては二人とも家族同然の関係だということだけは理解したのである。

「まあ、そんなに緊張するな。秀児の友達なら、仲良くしてやんな」

「そうですよ。またいつでも来てくださいね」

こんがらがっている修に、二人が声をかける。本当に人がいいみたいである。

その後、用事は済ましたということと、その日はお開きということになったのであった。

\*

さて、その日の帰り道のことである。

「秀児」

修が口を開いた。

「なにかな？」

「あのさ、この辺は莊園なんだよな」

修は何気なく質問した。

「そうだよ？」

首をひねる秀児。しかし、修は続けた。

「この辺一帯の土地は、さっきの劉孝孫さんのものなんだろう？　そして、秀児や伯升さんは、その親戚。それなのに、孝孫さんは人を雇って耕させてるのに、家はなんで秀児が直接耕しているんだ？」

彼は、近くで劉嘉所有の粟畑あわを耕している小作人を指して言った。修は別に中国史が得意なわけではないし、この南陽の劉氏が、いったいどうしてここにたくさん土地を持っているかは知ったことではないが、あれだけの屋敷に住んでいる以上、劉嘉はもちろん、伯升や秀児も地主たる「豪族」の身分であることくらいは、容易に想像がついたのである。だから、こういう質問をしたのだ。

「それはね」

不意に、秀児が表情を曇らせていった。気のせいか、うすら笑いさえ浮かべている。

「家にはお金がないんだ。今日、春萌義姉さま（\*劉嘉の真名）のところに言ったのも、そのためだよ」

「どうして、そんなにお金がないんだ？」

「それはね……」

一旦間を置いた後、秀児は言った。

「今夜になればわかるよ」

「は？」

修には意味がわからなかった。だが、間もなく彼は、その答えを知るのである。

\*

その日の夜である。

伯升の屋敷には、大勢のお客さんが来ていた。そして何をしているのかと言えば、それはどんちゃん騒ぎである。

そして修自身はと言うと、おそろおそろ、客の接待をしていたの

だ。

(な、なんだ。これは。聞いてねえよ！)

彼は内心びくびくしていた。と、言うのも、集まって来た連中は、まるでやくざみたいなの、ゴロツキどもだったのである。

「おい、兄ちゃん！」

一人の男が大声で呼びつけた。

「は、はいい！？」

修が慌てて飛んでいく。

「な、なんでございますでしょうか！？」

言葉になっていない声で、相手に尋ねる修。

「おまえ、見ねえ顔だな。どれ、せつかくの宴だ。一緒に飲もうじやねえか！」

ガラスの悪そうな男が、修に向かって酒を勧める。だが、修は酒など飲んだことがない。

「いえ、俺、酔っ払いやすいんでして」

下手ないいわけで逃れようとするが、そうは問屋がとおさない。

「何だあ？ 俺様の酒が飲めねえってのか！？」

そう言われて、次の瞬間にはがちりと抑えつけられた上で、盃一杯の酒を、無理やりぐいと押し込まれたのである。

「う、ゲホツ!?」

思わずせき込む修。そして、次の瞬間には、もう酒がまわったのである。へべれけになり、自分で動けなくなってしまったのだ。

「おい、修!」

さすがに心配した伯升が、修を揺り動かしたが、まったくダメだった。

「おいおい、劉稷りゅうじ! いくらなんでも、やりすぎはよくねえだろ!」

「すまねえ、兄者。だが、ついからかってみたかつたんでい」

「とにかく、こんな所で寝かすわけにもいかねえしなあ。おい、秀児! こいつを寢床まで連れて行け!」

「はい、? 兄様」

こうして、その日の夜は更けていったのであった。

## 第二章 劉孝孫と来君叔（後書き）

初登場人物

・劉嘉<sup>りゅうけい</sup>

字は孝孫<sup>こうそん</sup>。真名は春萌<sup>はるも</sup>。二十代前半の女性で、三つ編み美女。王莽によつて爵位を剥奪された、春陵康侯・劉敞の姪。劉伯升・劉秀兄弟とは親戚の關係に当たり、また、来歙の弟と婚姻關係にあるため、来歙とは義兄妹の關係にある。いまだにあどけない表情を残しているが、頭はよく、仁慈に篤い。女ながら春陵郷の莊園をよくまとめあげている。伯升とは、昔、長安で一緒に遊学した關係である。幼くして父を失つたため、秀兒とは兄弟同然に育つた。

・来歙<sup>らいせき</sup>

字は君叔<sup>くんしゅく</sup>。荊州南陽郡新野県の豪族。二十代前半の男で、劉秀こと秀兒とは、従兄弟の關係（史実では劉秀の祖母が義理の母親だったらしい）。弟が劉嘉（春萌）と婚姻關係のため、春萌とは義兄妹の關係である。来氏は先祖代々、前漢王朝に官僚を輩出してきた家系である。幼いころから秀兒と過ごすことが多かったため、実の兄弟みたいな仲である。

・劉稷<sup>りゅうしつ</sup>

劉伯升の親戚で、春陵侯家の宗族。気が荒い性格だが、伯升のことを大変慕っている。（三国志でたとえるなら、劉備を慕う張飛のよくな位置であろうか）

### 第三章 部曲と盗賊（前書き）

今回はちよつと、説明の多い話です。

読みにくいかもしれませんが、それでもよいという方は、ぜひぞぞ！



### 第三章 部曲と盜賊

ここは徐州琅邪国の海曲県。

修たちが春陵郷でのうのうとしていた頃、東の海に面した、この田舎の県の役所にて騒ぎが起こっていた。

なんと、海賊集団が県の役所を襲撃していたのである。

当時の海賊たちは、海上の小さい島々を拠点にしている、船で素早く海上を移動し、陸地に近い町や村を襲っては、食料金品の類から婦女に至るまでを略奪して、官憲が来る前に急いで海上に逃れるという方法で稼業するのが普通であった。

それなのに、どうしてこの海賊たちは、別に襲っても大した金品もない、片田舎の県の役所などを襲っているのだろうか。

それは、この海賊集団を率いている、一人の老女のためであった。

海賊たちから「將軍」と呼ばれているこの老女は、もともとは海曲県の呂家という豪族に嫁いでいた女性であった。夫に先立たれた後、彼女が一人で家を切り盛りしていたため、地元の人々は、彼女のことを「呂母りぼ（呂家のおっかさん）」と呼んでいたのである。

ところが今を遡ること数年前のある日、県の下級役人をして彼女の息子が、些細な罪を理由に県宰けんざい（\*注）の杜先とせんによって処刑されてしまったのである。

女だてら、家の当主をしている呂母はたくましい女性であったが、自分の一人息子を甘やかしていたようである。息子可愛さのあまり、彼女は息子がちょっとした罪を犯しても、その度に役人たちに賄賂を渡し、息子の罪をもみ消しにして貰っていたのである。そのため、今回もそれで許してもらえればかり思っていたのだ。

だが、今度ばかりは運が悪かった。その息子とやらが犯した罪は、どうやら女が絡むことだったらしく、しかも県宰・杜先がその女を我が物にしようと考えていた最中に問題が起こったようである。

また、聖人氣取りの皇帝・王莽が、自身の「仁政」ぶりを示すために、しきりに恩赦令ばかり出していたため、役人たちがちょっとした罪を犯した人間をいくら逮捕しても、またすぐ恩赦で釈放という形で逃げられる、という現象が起きていたこともあって、役人たちの苛立ちは頂点に達していたようだった。

そのため、呂母の息子は、県宰たちの私的な鬱憤晴らしも同然に、斬られてしまったのである。

一人息子を殺された呂母は、嘆き悲しんだ挙句、県宰への復讐を思い立った。そして、密かに協力者を募ったのである。

まずは、県内の悪少年（まともな職に就いていない若者）たちを家に招待し、ただで酒を飲ませ、衣服や金品など、様々な贈り物をして、彼らを手懐けた。数年経って、財産がほぼ尽きたところで、呂母は悪少年たちに、「復讐計画」を告げたのである。

悪少年たちは呂母にお世話になった礼を返したいこともあって、ただちに仲間を集め始めた。だが、危うく県宰側にことが漏れかけたため、呂母は残っていた全財産を担いで、悪少年たちの知り合い

であつた海賊集団に従い、海に逃れたのである。

数年経ち、いつの間にか一万人にまで膨れ上がっていた海賊集団の「將軍」となっていた呂母は、ついに念願の、息子の仇打ち作戦を実行に移したのであつた。

田舎の小さい役所など、一万人超の海賊に襲われれば、もはやどうしようもない。

海賊たちは役所を攻め落とし、ついに県宰の杜先を生け捕りにし、呂母はこれを斬つた。

そして彼女は、殺した県宰の首を、我が子の墓前に供えたのである。

これによつて、老女・呂母は息子の仇打ちを果たしたのである。その三カ月後、彼女は自分の役目は果たしたと言わんばかりに、この世を去つた。

この一連の騒動を、後世の歴史家たちは、「呂母の乱」と呼んでいる。

だが、政治的意識も何も持っていない、この老いたる老女が単なる私怨で起こした事件が、事件当事者たる呂母本人の意向とは関係なく、彼女の死後に中原全土を覆い尽くす大乱の引き金になるなど、予想する人間は誰もいなかった。

\*

こちらは打って変わって、春陵郷。

修は現在、秀児や伯升とともに、劉嘉の館の近くにいた。

そこで何をしているのかと言うと、鍛練である。それも、大勢の土まみれの男たちと一緒に。

「ウオラア！！ もっと声出せ、声！！ 貴様ら、もっとでかい声出さんか！！」

先頭に立つ伯升が怒声を張り上げる。それに応えるべく、男たちが、

「ウオオ！」

と、鬨こきの声を上げた。彼らは矛代わりの長い棒を手に、「突き」の練習をしていた。そんな男たちと一緒に、修と秀児も訓練に励んでいたのである。

どうして伯升が、劉嘉こと春萌の館の傍で、練兵まがいなことをしているのだろうか。

それは、数日前に修たちが春萌の元に届けた書簡に由来するものであった。

先日 of 書簡の内容は、伯升が親戚である春萌に対し、金を工面してほしいという要請だったのである。先日に修が経験した通り、伯升は任侠気取りで、その辺のゴロツキ連中を困っては、しょっちゅう自宅で宴会などを開いていたのである。そのため、仮にも「漢王朝の皇帝の末裔」出身の豪族の身分でありながら、他の豪族たちのように、奴婢を買ったり、あるいは小作人に貸すための土地や鉄器、牛馬などを買うためのお金もないほど貧乏だったのである。だから、秀児自ら畑を耕して、なんとか生計を立てようとしていたのだが、肝心の伯升は、ちっとも働かなかったのである。

そればかりか、つい先日に農作業中だったときには、自分を漢の高祖・劉邦に例え、懸命に働く秀児を見て、

「お前は仲（劉邦の兄）みたいなヤツだ」

とそして、笑ったのである。その場では、修にはよくわからなかったが、あとで秀児が教えてくれた。

「僕たちのご先祖様こと、高祖・劉邦さまは、若い時は札付きの怠け者で、酒もタダ飲み、酔っ払っては裸踊りという有り様だったんだよ。金持ちの呂家（呂后の実家）の宴会に来た時なんか、一銭も持っていないくせに、「賀銭万（一万千納める）」って書いて堂々と上座に座ったほどだよ。そんな男だったのに、最後は西楚霸王・項羽を倒して、天下を取ったんだ。逆に兄の劉仲は、若い時は真面目で働き者だったけど、結局ただそれだけの人物で終わったんだ」

こんな訳なので、秀児が懸命に働いても、伯升が飲みつぶしてしまっているのである。秀児は本当に苦勞人である。

そのため、劉伯升兄弟は、春萌の援助を頼んだのだが、春萌にし

てみれば、いくら血のつながった親戚であるとはいえ、ただで銭を貸すわけにはいかない。

いつの世も、「働かざるは食うべからず」である。

そこで春萌は、銭を貸す条件として、しばらくの間、彼女の家の部曲<sup>かきへ</sup>を伯升直々に鍛練してほしいと、言ったのである。

部曲というのは、豪族たちが荘園や自分の屋敷を流賊から守るためにたくわえている私兵集団のことである。兵というのは名ばかりで、その実質は、頼るべき土地を持たなかったり、借金が返せないなどの理由で、豪族たちのもとで居候せざるをえないような人間たちである。

土地に頼って生きていける良民（庶民）と違い、彼らは豪族の庇護無くして生きることができない。むろん、ただ飯を食うわけにはいかないのです、主たる豪族たちや、その荘園を外敵から守る仕事に就かざるを得ないのだ。

そういうわけで、豪族の私兵というのは、奴婢に毛が生えた程度のものであった。だから、日々の鍛練が必要なのである。

「よーし、しばらく休憩だ！」

何時間ものぶっ通しでの訓練で、皆がへとへとになりかけていたところで、頃合いを見た伯升が休憩を入れた。

これを聞いた春萌の家の部曲たちが、皆一斉に安堵の表情を浮かべる。全員、汗だくだくで、本当にしんどそうである。

だが、どんなに疲れて倒れそうであっても、一人の少年のそれに及んだ者はいなかった。

「もうダメだ……！」

真つ先に、地べたに大の字になって倒れたのは、やはり修であった。彼は都会つ子で、しかも根っからの帰宅部であった。修は現在、今まで運動系の部活に入っていなかったことを後悔した。

「畜生……」

立ち上がるうにも、足腰に力が入らない。どうすることもできない。そう思った時だ。

「修くん！」

慌てて秀児が助けに入った。彼も修同様、汗だくであったが、日頃から鍛えられているのか、疲れている様子はなく、そのまま修の方へと駆け寄った。

「ほら、水だよ」

そう言っつて、水の入った竹筒の水筒をよこした。修はそれを掴むと、寝転がったまま飲んだ。冷たい水が、喉を通って、それが体中に広がるような感じがした。だが、おかげで生き返ったのである。

「あ、ありがとう……」

よつやく、修は己の上体を起こすことができた。

「生き返ったよ」

「あはは。修くんは大げさだね」

秀児は笑っているが、修には笑えないことである。なにしろ、本当に死ぬかと思っただからだ。

「おい、秀児は平気なのか？」

彼は聞いた。見たところ、秀児も汗だくである。おまけに、風で舞った土埃が、顔にもかかっているのが見えた。

「大丈夫だよ、これくらい」

秀児は笑いながら答えたが、修はつい気になってしまった。

「お前、汗と土でひどい顔じゃねえか」

そう言って修は、自分の肩にかけていた手ぬぐいをとると、それで秀児の顔を拭き始めたのである。

「ほらよ、拭いてやるよ」

彼にしてみれば、お礼返しのもりであった。

だが、秀児は慌てて身を放したのである。

「わ!？」

そう言って、彼は何故か恥ずかしそうに、手をモジモジとさせた。



気のせいか、頬が赤らんでいるように見えた。

「どうした？」

「ううん。そんなの、僕が自分でやるからいいよ。子どもじゃないし……」

やはり、何かがおかしい。修にはそう思えてならなかったが、それが何かは、彼にはわからなかった。

「そ、それより！」

不意に、秀児が話をはぐらかした。

「大変でしょ？ この訓練は」

「これを大変と言わないで、何を大変と言うんだ？」

修の言つとおりである。それだけ、しんどい特訓だったのだ。

「あはは、それはそうだね」

苦笑いしながら、秀児が言った。

「でもね、これを皆できちんとやっておかないと、いつ何が起ころかわからないからね」

「何かって、例えば、盗賊とかのことか？」

修は聞いた。そう言えば以前、この近くに群盗が出没していると

いうことは聞いている。

「うん。そうだよ。特に、ここからそう遠くない所にある、『緑林山』の盗賊は恐ろしいからね。前も言ったけど、ついこの間には荊州牧が率いる二万人の討伐軍が、雲杜うんとというところで、わずか数千人の『緑林軍』に大敗して、何千人も殺されたばかりか、携えていた兵糧、輜重車から武器までもことごとく奪われたほどだよ」

「なんだよ、それ。だつらしねえな」

修は憤った。国を乱す盗賊を討伐できないばかりか、逆に盗賊に餌を与えたに等しいのである。これでは、何のための朝廷であろうか。

(なんか、三国志の『黄巾の乱』みたいだな)

修はふと、昔やった「三国志」系のゲームの記憶を掘り起こして、そう思った。

「それにしても、なんで盗賊なんているんだ？ 普通に畑耕して暮らせばいいじゃねえか」

憤りが収まらない修は、そう口走った。すると、途端に秀児が表情を曇らせた。

「ん、どうした。秀児？」

訝しく思った修は聞いた。すると、秀児は声を潜めながら答えた。

「あのね、修くん。どうして盗賊なんかが出ると思う？」

「えっ？」

修は戸惑った。何故なら、わからないからだ。彼は一応、「三国志」のファンではあったが、ゲームや漫画で見ただけであり、しかもそこに登場する英雄豪傑たちの勇姿ばかりを見ていたため、一般人の暮らしぶりなどが描かれているのをよく見ていなかったのである。まして、「三国志」の時代でもないこの世界のことなど、知る由もないのだ。

「それはね……」

悩んでいる修を見て、秀児が説明し始めた。気のせいか、彼の表情は悲しそうに見えた。

「皆、貧しいからだよ」

「え？」

「貧しすぎて、生活が成り立たないからなんだ。皆、もともとはただの平和な農民で、自分の畑を持っていて、それを自分で耕して、作物を育てて、そして収穫して、それを食べて、家族と団欒して。そんな風に暮らしている、普通の人たちだったんだ。けどね……」

一旦息を継いだ後、秀児は続けた。

「数年前、この辺り一帯でも飢饉が起こったんだ。日照りが続き、作物は枯れ、わずかに残ったモノも、秋に発生した蝗こらに食べつくされる。だから飢えて死んだ人も多かったんだよ」

「しかも、そんな状況なのに、お上はバカのように税金を取り立てたんだ。『古の聖代いにしえはこうだった』とか、わけのわからないことを言つて。そのくせ、飢饉に対する対策は、『恩赦令を出して天に己の徳を見せつける』以外には、何もしないんだ。そうなると皆、自分の土地を売つて、どこかに行くしかなくなるんだよ」

「その人たちつて、まさか」

修が口を挟もうとしたが、なぜか秀児は静止させた。

「おっと、早とちりはよくないよ。土地を売った人がどこへ行くかは、二つだけなんだ」

そう前置きしたうえで、秀児は「その二つ」について語った。

「一つは、僕たちのような、『豪族』の元で働く。ここにいる、小作人の人たちや、部曲の人たちみたいだね。そして、それがイヤなら……」

「盗賊になって、ほかの人間を襲う、か……」

理解した修が、答えを言った。

「そう、その通りだよ……。おかしい話だね。元はと言えば、皆同じ人間だというのに……」

そう言う秀児の姿は、なんとなく悲しげに浸っているかに見えた。

「秀児……」

「あ、ゴメンね。こんな悲しい話しちゃって……」

修が声をかけると、秀児は悪戯っぽく舌を出して作り笑いをした。

「いや、いいんだ。おかげで、俺、全然知らないことを知ることができたし。ありがとな」

修はそう言って、最後に感謝の一言を言った。

「さてと」

やがて秀児は、立ち上がると、棒を手にして用意を始めた。

「そろそろ『後半』が始まるから、用意しないとダメだよ？」

そう言って自分の位置に戻っていく秀児。

「ああ……、つて、後半!？」

修は声を荒げた。聞いていないと言わんばかりである。

「そ、そんなの聞いてね……!？」

「オラア! 休憩は終わりだ!!」

突然、伯升の大声が一带に響き渡った。それを聞いた部曲たちが、慌てて元の配置に着く。

「ちよっ、まっ……うわ!？」

慌てて立ち上がろうとした修は、その場で転倒してしまった。当然、伯升にそれを見られていた。

「貴様！ 何をしてるかア！？ 早く立たんかア！！」

「は、はい！？」

こうして、訓練の第二部が幕を開けたのである。

むろん、訓練が終了したとき、修が半死半生だったことは、言うまでもないことであった。

(\*注)

・県宰

県の統治を担当する長官のこと。一般的には「県令」の名称の方が有名だが、「改名マニア」の王莽は、前漢時代からの官職などの名称を改め、「県令」を「県宰」に改名した。

### 第三章 部曲と盗賊（後書き）

#### 人物紹介

・呂母りよぼ

本名は不明。徐州琅邪国の海曲かいきょくの人。山東の豪族兼酒造業者の呂家のおかみさんで、呂母というのは「呂家のおっかさん」という意味のニックネームである。息子は県の下役人だったが、皇帝・王莽による恩赦乱発の影響もあって、些細な罪を理由に、県宰（県令）の杜先とせんによって処刑されたため、その復讐のために悪少年や海賊集団をかこつて、ついに息子の仇を討った。その三ヶ月後に彼女は世を去ったが、彼女が引き起こしたこの事件、「呂母の乱」が、後に中国大陆全土を揺るがす大事件に発展するなど、知る由もない。

いかがでしたでしょうか。今回は、この世界の最下層ともいえる人々の境遇を説明するために入れたようなものです。

今回はギャグ中心でまいります！

#### 第四章 武闘にて（前書き）

さて、今回はお色気とギャグでできています。

くだらないですが、お好きな方は、どうぞ！



## 第四章 武関にて

ここは劉嘉邸。現在、この屋敷の客間には、屋敷の主である春萌以外に、伯升、秀児、来歙らいしやく、そして修といった面々が集まっていた。皆一様に、深刻そうな表情をしている。

「つまり、なんだ」

いの一番に、伯升が口を開いた。

「社のヤツ、またいらんことに巻き込まれやがったのか」

やれやれだと言わんばかりの表情で、彼はそう言った。

「そういうことです。伯升さん」

春萌が頷いた。

いったい何があったのかと言うと、それは今朝、春萌の家に届けられた、一通の書簡に由来するものであった。

その書簡の送り主は、春萌の従兄にして、元・春陵侯本家の現当主である劉社りゅうしゃだった。

その書簡によると、劉社は大変な苦境に陥っているもようであった。

ことは年貢の問題で、劉社本人は毎年同様、定められた年貢をき

ちんと払ったつもりだったのであるが、役人は払ってないと行って、毎日のように、劉祉の館に取り立てに来るのだというのだ。当然、劉祉は黙っていられず、蔡陽県の県宰や、南陽郡の前隊大夫（\*）に訴え、果てには荊州の州都・宛えんに行き、そこにいる荊州牧にまで訴えたのだが、まったく相手にしてくれないのだという。

困り果てた劉祉は、従妹である春萌に書簡を出して、なんとかしてほしい。この惨状を、お上に訴えてほしい、と相談してきたのだ。

豪族というものは、昔から同族意識が強く、血の繋がりを重視する。だからこそ、このような相談を持ち込んできたのである。

「まったく、あいつも舐められてやがるなあ」

伯升が溜め息をついた。劉祉は父親の劉敞リウシヤウの代の時に、王莽によって春陵侯の爵位を剥奪され、さらには官職にも就くことができずにいるのである。その上、新の役人たちにいちやもんをつけられる有り様だった。

「まあ、それはともかくとしてだ」

来歙が口を挟んだ。

「こうなった上は、俺たち、春陵侯家の人間の誰かが、都に行つて、この窮状をお上に訴えるしかないだろ」

彼はそう提案した。県でもだめ。郡でもだめ。州でもだめとなれば、朝廷に訴えるしかない。

「まあ、そういうことになるな。さて……」

来歙の意見に賛成した伯升が、一旦口をつぐんだ。そして言った。

「問題は誰が行くかだ」

「そうですね。行くのなら、都の地に明るく、なおかつ、しっかりと訴えることができる人じゃないといけませんね」

春萌がそう言って悩んだ。問題は、南陽劉氏の人間の中から、誰を行かすかである。

都・常安（長安）に行くには、その地理に明るい人間でなくてはならない。さらには、そこで上の人に訴える時に、無礼な振る舞いはしてはならないので、きちんと礼節に適っていなければならぬ。もう一つ付け加えるならば、家の主として、莊園を預かっている人間が、この春陵郷の地を離れるわけにはいかないのだ。

そうなると、伯升は論外である。そして劉嘉こと春萌も、莊園主である以上、ここを離れるわけにはいかない。

どうしようかと悩んだ時であった。

「それなら、僕が行くよ」

手を挙げたのは、ほかならぬ秀児であった。

「秀ちゃん!？」

春萌が驚いて言った。

「本気なのですか？」

「僕は本気だよ。春萌義姉さん」

そう前置きすると、秀児はどうして自分が行くかについて、説明した。

「僕はついこの間まで、都の太学で学んでいたんだから、地理には明るいつもりだよ。それに、太学の中で、礼節のことも徹底的に叩きあげられているからね」

「なるほど。それあ、お似合いだな！」

伯升が秀児の背中を叩いて言った。

「そし、それで決まりだ。春萌。社のヤツにきちんと伝えておけ。それから来歙！」

「なんだ？」

「お前、都の地に詳しいだろう？ 一緒に行つてやれ。その方が、秀児も喜ぶだろうからな」

「わかった、伯升。そうさせてもらおう」

伯升の提案に、来歙も頷いた。これで話は決まりである。

(なんか、大変なことになったなあ)

傍らで話を聞いていた修は、背伸びをしながらそう思った。する

と、そんな修を見て、伯升が話しかけた。

「おい、修」

「え、なんですか。伯升さん？」

すると、伯升は修が思ってもいなかったことを口にしたのである。

「修。貴様も秀児と来歎と一緒に、都に行つて来い」

「は、ええ！？」

修は仰天した。当たり前である。

「な、なんで俺までですか！？」

「付き人として、秀児たちに付いて行つてやれって言つてんだ！」

強引に話を進める伯升。修は納得がいかなかった。

「なんでまた、そんな急に！」

「じゃあかましい！俺が行けって言つてんだから、黙つて行きやがれ」

「なっ……！！？」

呆然とする修。だが伯升は、そんな修を置いて、笑いながら帰つてしまった。

「また、？兄様の悪い癖だよ」

しばらくして、秀児が口を開いた。

「は？」

いまいち話が飲み込めない修。すると、今度は春萌が言った。

「修くん、でしたね。あなた、本当に伯升さんに可愛がられていますね」

「ああ、そうだな」

来歎も続けざまに言った。

「たしか、柳修だっけ。お前、別に深く考える必要はないぞ」

「そうそう」

秀児が相槌を打った。

「ようするに？兄様は、『都まで旅行して楽しんで来い』って言ったんだよ。修くんは、この春陵郷から出たことがないからね」

「あ、なんだ。そういうことだったのか」

これでようやく、修は理解することができた。

「まったく。伯升さんったら。それならそうと、『貴様も旅行して来い』って、素直に言ってくればいいのに」

「あはは。それが？兄様だよ」

秀児が苦笑した。

こうしてその場はお開きとなり、修は秀児や来歙と共に、都への旅行のための準備に入る運びとなった。

\*

さて、二日後。

修は都・常安（長安）に向けて、秀児、来歙たちと共に、馬車で春陵郷を出発した。

春陵郷を出て、新野しんやけん県の来歙の館に立ち寄った後、州都・宛を通り、そこから街道に沿って西北に行き、武関ぶかんを通って司隸しれい・弘農こうのう郡に入り、そして都・長安という道のりである。

片道、およそ十日前後の旅である。

（そう言えば……）

馬車に揺られながら、修はふと思った。

(新野って、どこかで聞いたことがあるような……)

もちろん、彼は聞いたことがあった。昔、彼が読んだ「三国志」のマンガで、劉備が立ち寄った場所にほかならないのである。しかし、うる覚えである修は、結局そのことに気付かなかったのだ。

「ところで、来歙」

秀児が来歙に尋ねた。

「なんだ？」

「都での用が済んだら、帰りに新野を素通りせずに、立ち寄らせてもらってもいいかな」

彼はそうお願いをしたのである。

「なんでまた、どうした？」

「いや、ほら。新野にいる？とうしん農義兄様や、げん元姉様や？とうほう奉、それから、れい麗ちゃんにも久しぶりに会いたいんだ」

それを聞いた来歙は、納得したようだった。

「ほう、なるほど。そう言うことか。よし、帰りには少しのんびりするか」

それを聞いた秀児は、本当に嬉しそうだった。それを見た修が、思わず口を挟んだ。



「秀児。誰がいるって？」

「ああ、修くんには話してなかったね」

そう言つと、秀児は説明した。

「新野にはね、僕の姉の、元姉様げんがいるんだ。そこの豪族、とっけ家の  
？農つて人に嫁いでいるんだよ」

「あれ？」

修は疑問に思った。

「秀児。お前、お姉さんがいたのか？」

「あ、言うの忘れてたよ」

舌を出して笑つ秀児。それから、彼は自分の家族のことについて語つた。

「僕には、？兄様のほかに、黄姉様こっ、元姉様ちゅう、仲兄様と、妹の伯姫はくき  
がいるんだ。もつとも、黄姉様はちよつと遠いところに嫁いでしま  
つて、しばらく会つてないけどね。そして、元姉様は新野の？家に  
いるんだよ」

「あれ？」

修は疑問に思った。

「それじゃ、もう一人のお兄さんと、妹さんはどこなんだ？」

「ああ、仲兄様と伯姫はね、母様と一緒に、劉良叔父様りゅうりょうしゅうふのところにいるんだよ。ほら、家があだから……」

そこまで聞いて、修は納得した。年老いているであろう母親や、秀児よりも幼い女の子を、あんなところに置いておくわけにはいかないからである。

「ま、そういうわけで」

秀児が苦笑しながら、話を続けた。

「都での用事が済んだら、修くんも一緒に、皆に会いに行こうよ。僕が紹介するよ」

「ああ、その時は頼むぞ」

「うんー」

こうして、馬車は走り続けるのであった。

\*

さて、すでに五日が経過した。

その後、馬車は新野を通過し、宛を通り、そこから西北の道を通ったのである。

そして西に夕日が落ちる中、一行がたどり着いたのは、その夕日の前に立ちふさがる関門、武関であった。

ここは約二百年前、漢の高祖・劉邦が秦の都・咸陽を攻める際に通過した場所として有名である。

関の名の通り、この武関は都・長安のある関中の入口である。洛陽と長安の真ん中にある函谷関と同様、関中に行くには避けては通れない要所で、その城壁は高く、巨大な城門は分厚く頑丈に造られていた。

「さて、今夜はここの旅籠はたしに泊まろう」

来歙が言った。すでに武関の城門は閉ざされており、これが次に開くのは、翌日の朝になるのを待たなければならない。一行は、武関付近にある宿場町の旅籠で一泊することにした。

「つつぶ……」

修が苦しそうな表情で、馬車から降りた。彼は乗りなれない馬車に、長時間乗っていたものだから、酔ってしまったのである。

「大丈夫？」

心配そうに秀児が聞いた。

「だ、大丈夫……ぶ!？」

言いかけたところで、修は近くの草むらの前に屈みこんだ。かなりの重症である。

「全然大丈夫じゃないよ!」

今度こそ心配になった秀児が慌てて駆け寄った。そして、苦しもうにうずくまっている修の背中をさすったのである。

「うつぶ、あ、ありがと……」

背をさすってもらって、少しは落ち着いた修。だが、落ち着くに從って、彼は不思議な違和感を感じていた。

(あれ?)

彼は思った。

(なんだろう。この違和感……)

秀児にさすられれば、さすられるほど、彼はそう思わずにはいられなかったのである。

「どうしたの?」

秀児が聞いた。

「い、いや。なんでもないんだ」

修はそう言って、言葉を濁した。

「ありがとよ。おかげでだいぶ、楽になった。ほら、来歎さんも待っているし、早く入ろう」

ようやく機嫌を取り戻した修は、そう言って、秀児の手を引いて、来歎が待っている旅籠の方へと駆けて行った。

だが、彼はついに気付かなかった。その時、彼に手をひかれていた秀児が、なぜか緊張して、頬を赤らめていたことに。

\*

それから時間が流れ、夜も更けた頃である。

「あれ？ あの、来歎さん」

「ん、どうした？」

「秀児はどこに行ったのです？」

晩御飯を食べ終わり、寝床を用意していた時、秀児の姿が見えないことに気付いた修が、来歎に聞いた。

「ああ、アイツか」

頷いた後、来歙は言った。

「秀児は今、風呂に行ってる。あいつ、けっこう好きだからな」

「あ、そうですか」

修はそう言って言葉をつぐんだ。

(あれ?)

その時、彼の頭に、ふと疑問が浮かんだ。念のために言うておくが、それは、どうしてこの時代の中国大陸に風呂があるのかというものではない。

(そう言えば、秀児のやつ。伯升さんの家でも、いつも一人で風呂に入ってたな)

彼が思い出したのは、そういうことであった。修が伯升の家で生活し始めて、すでに半月以上も経つ。それなのに、秀児が、修自身はおるか、実の兄である伯升とも風呂に入っているのを見たことはなかった。

(男と言ったら、互いに背を流しあって、友誼を深めるものだって、伯升さんも言ってたのに)

考えてみれば、考えてみるほど、わからなくなるものである。

(うーん。あ、そっだ!?)

その時、修はとあることを思い立った。

(せっかくの夜だ。秀児のヤツを、驚かせてやるっ!)

修は悪戯を思い立ったのである。そうと決まるやいなや、彼は風呂場へと直行した。

彼が思い至った悪戯と言うのは、現在、秀児がいるという風呂場に乱入し、秀児を驚かした上で、彼の背を流してあげるといふ、実にくだらないものであった。

(待ってるよ。うしし。しかし、驚くだろうな、秀児のヤツ)

脱衣所で、自分の着てる服を脱ぎながら、修は、いかにも悪役らしい笑みを浮かべた。

そして、服を脱ぎ終わると、彼は抜き足差し脚で、風呂場の扉に近づいた。そして、息を潜めたかと思つた次の瞬間、彼はガラツと風呂場の戸を開けた。

「秀児、背中を流してやるぞ!」

開けると同時に、彼は叫んだ。

「え!?!」

直後、秀児の驚愕する声が漏れた。どうやら、ちょうど木の椅子に腰かけて、体を洗っていたところだったようだ。

「しゅ、修くん!?!」

秀児はかなり慌てていた。咄嗟に、持っていた手ぬぐいで自分の体の前を隠したのである。

「ど、どうしてここに!?!」

「なにやってやがんだ?」

わけがわからない、という顔で、修が言った。

「なんでそんなに、恥ずかしがってるんだ? みずくさいぞ」

そう言って、修は一步、また一步と詰め寄ったのである。

「ダ、ダメ。修くん、来ちゃダメだよ」

そう言って、手ぬぐいで懸命に自分の体を隠しながら、後ずさる秀児。

「なんだよ。男同士だぞ」

からかわれているのかと思ったらしく、修はまた一步詰め寄ったのである。なお、現在の修には、立ち込める湯気のせいで、秀児の顔の表情などが、よく見えていないのである。

「え、あつ。そ、その」

後ずさるうちに、とうとう壁際まで追いつめられた秀児。もはや、



逃げることはできない。

「なんだよ。女みたいな声出しやがって」

そう言っつて、修がもう一步踏み出したときだった。

「うおわ!?!」

彼は前のめりに転倒した。床に転がっていた、桶に躓いたのである。湯気でよく見えてなかったことと、秀児をからかうのに夢中になっていたことが原因であった。

そのまま彼は、目の前の秀児の方へと前のめりに倒れてしまった。

「え、ちよつと……!?! ひゃう!?!」

修が倒れた瞬間、秀児が悲鳴をあげた。それはもう、甲高く。

「あいてて……」

転んだ際の痛みにうめきながら、ようやく身を起こす修。彼は、真っ先に秀児のことを心配した。

「ごめん。大丈夫か、秀児?」

「あ、うん。でも、それより……」

秀児が無事だと聞いて安心したのも束の間、修は、今までで最大規模の違和感に気付いた。

「あれ？」

身を起こすやいなや、彼は自分の状況をかめた。修は現在、秀児と真正面から抱き合う形で、転倒していたのである。そのため、おもいきり秀児の背中に手を回していたのだ。

問題は、そこである。

「なんだ？ 柔らかい？」

修が気付いた違和感と言うのは、秀児の体つきが、男のそれと違って、異様に柔らかいことであった。咄嗟に、彼は秀児の顔を見た。

彼の瞳に映ったのは、いつもと違って、髪を下ろした、ものすごく可愛い顔の秀児であった。

「え!？」

わけがわからなくなった拳句、修は慌てて後ろに後ずさった。そして、見た。

もう、疑うことはない。彼のすぐ目の前にいたのは、一糸まとわぬ、生まれたままの姿の、一人の女の子であった。もっとも、年齢の割には、出るところは出ていなかったが……。

直後、修はその場で倒れた。彼は大量の鼻血を垂れ流しながら、意識を失ったのである。

それに遅れる形で、この旅籠の一室に、少女の悲鳴が響き渡った。

これを聞いて来歙が駆けつけたことで、さらなる混乱が起こったことは、別の話である。

\* (注)

・前隊大夫

郡の長官のこと。前漢時代は「太守」であったが、「改名マニア」王莽は、これを前隊大夫に改めた。

## 第四章 武関にて（後書き）

人物紹介

・劉祉

字は巨伯。王莽によって爵位を剥奪された、春陵侯・劉敞の子。春萌の従兄。本来なら春陵侯の当主なのだが、爵位ばかりか、ろくな職にありつけていない様子。さらには、新王朝の役人に舐められまくりである。

いかがでしたでしょうか？

今回はふざけました。

ちなみに、冒頭の税金云々のことは、さすがに誇張ですので、くれぐれも鵜呑みにしないよう、お願いします。

## 第五章 官になるなら執金吾（前書き）

今回の前半は、ほのぼの話です。

そして、後半は、歴史的なお話です。

## 第五章 官になるなら執金吾

「申し訳ございませんでした!!」

旅籠の一室において、修は土下座していた。布団の上に跪き、深く、そのまま頭を床にまで着けていた。

そんな修のすぐ前には、一人の蒼い髪の少女と、その横で、必死に笑いをこらえている来歎とがいた。

蒼い髪の少女は、まだ乾ききっていない髪の毛を下ろしたまま、かつてない以上に顔を真っ赤にして、うつぶんでいた。

この少女こそ、修が今までずっと男の子だと思っていた友人、劉秀こと、秀児だと言われれば、はたして何人の人間が信じてくれるであろうか。

いずれにせよ、風呂場での騒動の一件については、修の方に非があるのは明らかである。

だから、修はひたすら頭を下げているのだ。

「まったく」

しばらくして、来歎が口を開いた。

「いくら秀児の正体に気付いていなかったとはいえ、普通、確認するだろ。置いてある着替えとか」

そう言う来歎は、今にも笑いだしそうだった。

「すみません。ごめんなさい。からかってやろうと夢中だったので、気付かなかったんです」

頭を床に着けたまま、修が言った。

「ごめん、秀児！」

とにかく謝ることしかできない修。だが、しばらくして、ようやく秀児本人が、固く閉ざしていた口を開いた。

「うづん。こっちこそ、ごめんね。修くん」

修は咄嗟に顔を上げた。秀児からの一言が、彼にとっては意外だったからである。

「え、なんでお前が謝るんだよ？」

「だって……」

恥ずかしそうにうつむいたまま、秀児が続けた。

「修くん。僕が女の子だったこと、気付いてなかったのだよね？僕、てつきり修くんが気付いてくれているとばかり思っていたの。聞いてこなかったし。それに……」

何かを言い含めているのか、少し間を置いた上で、彼女は言った。

それにしても、正体が女の子であることがわかったせいか、風呂上がりの彼女の肌は、いつもより火照っているように見えた。

「その……、この間のこともあったし……、これでお互い様だよね……？」

この間のこと、と言われて、修はギクツときた。修が初めて秀児と会った時、気が付いたら、すっぽんぽんにひん剥かれていたことを言われたからだ。

「い、いや。別にあの時のことはいいんだ」

思い出すだけで恥ずかしい修は、慌てて話を遮った。

「まあ、要するにだ」

傍らで話を聞いていた来歎が口を挟んだ。

「今回のことは、どっちもどっちだ。修。お前は相手の了解も得ないのに、勝手に人の風呂に入るようなことはするな」

「はい。反省してます」

「それから秀児。お前もお前で、聞かれなくても、一つ下の屋根で暮らす人間には、あらかじめ言わなきゃダメだぞ」

「はい。すみません」

しょぼんとする修と秀児。



それにしても、この件を喧嘩両成敗で裁いて見せた来歎は、なかなかお手の物である。だが、そんな彼も、とうとう冷静さを保つことができなくなった。

「しかし、思い出すだけで、これはもう……、ククツ……だ、ダメだ……だーっはっはっは！」

風呂場での光景がつぼにはまったのか、とうとう笑い始める来歎。こうなったら、もうだれにも止められないものである。

彼はその場で腹を抱えて、あごが外れるほど爆笑し、右手の拳で布団を叩きまくったのである。

「あれは、もう、傑作だぜ！ 伯升が見たら、なんと云うか……！」

結局、来歎は一晩中笑い続けたのである。

そんな彼の姿を見て、修と秀児は苦笑しながら、お互いの顔を合わせた。

だが、恥ずかしさのあまり、すぐに互いの目をそらした。

こうして、その日の夜は更けていったのである。

\*

次の日の朝。

武関の城門が開くと同時に、一行を乗せた馬車は、城門をくぐった。いよいよ関中である。

都・常安（長安）に向けて進む馬車の中では、修と秀児の二人が、いつも以上によそよそしい態度で座っていた。

とにかく落ち着かないらしく、特に女の子である秀児の方が、ソワソワしているのである。

今の彼女は、いつもと同様に、自分の髪を後頭部で一括りに纏めていたが、いつものような「男の子らしさ」は、あまり感じられない。

そんな秀児を見て、修はなんとかしようと思ひ、思い切って話しかけた。

「あのさ、秀児」

「ひゃ、ひゃい!？」

返事をしようとして、舌を噛んでしまう秀児。もはや、威厳も何も、あったものではない。

「落ち着けよ。こっちが驚くじゃないか」

見かねた修が、そう言って、落ち着かせようとした。

「う、うん。そだね。ごめん」

相変わらず両手をモジモジさせながら頷く秀児。かわいいとは、こういうものをいうのであるうか。それはともかく、修は気になった事を質問するため、再度話しかけた。

「いや、謝る必要はねえ。俺は聞きたいことがあるだけだ。まあ、秀児が話したくないなら別にいいが。お前、どうして、その辺の男みてえに、髪を後ろで纏めてるんだ？ 下ろした方が、可愛いと思うぞ」

何気なく、そう言った。すると、秀児はますます顔を真っ赤にして、うつむいてしまった。が、やがて勇気を振り絞って、言った。

「あのね……」

恥ずかしそうに口を開いた秀児は、言い出したからにはと言わんばかりに、その先を言い切った。

「あのね、僕……。カッコよくなりたいんだ……」

「は？」

どういう意味か、修にはわからなかった。

「なんだって？」

「だから、カッコよくなりたいんだよ……。変かな？」

恥ずかしがりながら、目をウルウルさせながら聞いてくる秀児。さすがの修も、これを「可愛い」と思わずにはいらなかった。

「いや。カッコよくなりたい、と言うこと自体は変なことじゃないだろ」

そう言って安心させてやると同時に、修はその理由を聞くことにした。

「しかし、なんでお前は、カッコよくなりたいんだ？ 演劇の役者にでもなるのか？」

「ち、違うよ！」

突然、秀児が大声を出した。それに思わず、修は飛びあがってしまった。

「あ……、ごめん」

驚かしたことに謝罪した後、秀児は理由について語った。

「あのね、僕。将来、執金吾しつぎんごになりたいんだ」

「え？」

修は聞き返した。

「ごめん。何になりたいって？」

「執金吾だよ」

秀児が再び言いなおした。しかし、耳慣れない職業名に、修はかえって戸惑うばかりだった。

「えっと、その、シツキンゴって？」

「都の治安維持を担当する役職だよ」

秀児が説明した。

「執金吾はね、きらびやかな服を着て、街を巡回するときには、大勢の騎馬の近衛兵を引きつれて歩くんだ。物凄く、カッコいいんだよ」

熱心に語る秀児。どうやら、彼女は本当に、それに憧れているようだった。純粋な夢の持ち主である。

「な、なるほど」

修はピンときた。秀児が自分の可愛らしさを捨ててまで、カッコよくなりたい、というのは、その執金吾になるための選考基準かなにかが、そうでなければならないというわけであろう。それくらいのことば、修にも、容易に想像はついた。

だが、念には念をと思い、修はもう一度尋ねた。

「つまり、お前はそれになりたいがために、カッコよくなりたい、と？」

「うん」

秀児が頷いた。

「執金吾になろうと思ったら、威厳が必要なんだよ。まず、長身で引き締まった体じゃないといけないし、それから、ひまぐしめつれい眉目秀麗じゃないとダメなんだ。それから、都の治安を守らないといけないから、やっぱり強くなかつちゃね」

「そういうことか」

修は一度頷いた後、じつと、秀児の頭の上からつま先に至るまでを観察した。

なるほど、眉目秀麗というならば、彼女は合格かもしれない。先ほどのように取り乱さなければ、それなりに威厳を保てるかもしれない。体つきも、女性である彼女には失礼であるが、すらりと引き締まっているので、問題にはならない。

しかし、長身かと言われたら、そうでもない。見たところ、その辺にいる同年代の少女より少し高いくらいで、そんなに特別高いというわけではないようである。

また、強さに関しても、本当に強いかはわからない。毎日、訓練は欠かさずに行っているので、女の子にしては強いのであろう。しかし、修の知る限りだが、秀児が実戦で戦っている姿を見たことは一度もない。

修はそのような事を考えたが、流石に口にはしない。なにしろ、秀児は大きな夢と目標を持っているのだ。それを壊すような男は、最低であると言わねばならない。

「よし、わかった」

修は応援してやろうという気になった。

「秀児。いい夢じゃないか。お前は、本当に純粋なヤツだな。本当に今どき、珍しいくらいだよ。ま、俺は応援させてもらっぜ」

そう言っつて、彼は秀児の頭の上に、ポンと手を置いたのである。

「え？」

頭に手を置かれた秀児は、またしても赤くなった。

「ん？ あ、ああ。」  
「ごめん」

秀児の表情を見て、修は慌てて手をひっこめた。つい、猫かなんかを撫でるような感じじでやってしまったのである。

「うっん。それより」

秀児が頬を赤らめつつも、微笑みながら言葉を紡いだ。

「お話聞いてくれて、ありがとう。修くん」

「よせやい」

修は急に照れくさくなつてしまった。

「礼を言われるようなことなんか、した覚えねえよ」

「あ、そうだ！」

不意に、秀児が言った。

「都に着いて用事を済ましたら、一緒に執金吾の行列を見よう。すつごくカッコいいからね！」

どうやら、秀児はどうしても見せてやりたいようだった。

「あ、ああ。その時は案内、頼むぞ」

そこまで言われると、修も見たくなったのであった。

「任せといて！」

得意げに、貧相な胸を張る秀児であった。

それから後の二人の会話は、主に馬車から見える三輔さんぽく、すなわち、関中一帯の景色のことに費やされたのであった。

\*

(やれやれ。盗み聞きは、俺の趣味じゃねえんだけどな)



馬車の御者席の隣に座っている来歎は、後ろの少年少女の会話を聞いて、そう考えていた。

(それにしても)

彼は思った。

(秀児のやつ、なんだかんだで、きちんと女の子やってるじゃねえか。やっぱ、逆らえねえもんかな)

秀児の従兄にあたる彼は、幼いときからの彼女のことをよく知っているだけに、そう思わずにはいられなかった。

(まあ、あんなことがあつたら、誰でもそうなるか)

ふと、昨日のことを思い出す来歎。何度思い返しても、あれは傑作であった。なにしろ、何かと見に行ったら、一糸まとわぬ少年と少女。しかも、少年に至っては鼻血を噴き出して倒れている有り様である。本当に、春陵郷にいる伯升への土産話にしたいくらいだ。

(しかし、秀児のヤツ。結局言わなかったな)

後ろの二人の会話が、周辺の景色のことに移ったところで、彼はふと、口にしそうになった。

(あいつがカツコつけてるのは、執金吾になりたいことと、もう一つあるってのに。まあ、そのことは置いておくか。アイツの方から話したければ話すだろう)

そう思った来歎は、前に秀児が教えてくれた、もう一つの夢。秀児がまだ修には話していないことを、一人、心の中で、そっと呟いた。

（『官になるなら執金吾。妻を娶らば……』）

\*

ここは荊州江夏郡当陽県にある緑林山。

数年前より、この山に食い詰めた人々たちが寄り集まって、盗賊集団を形造っていた。

盗賊といっても、もともとは素朴な農民たちである。飢饉によって飢えに苦しみ、さらには役人たちからの容赦のない取り立てに我慢できず、土地を捨てて逃亡した人びとなのだ。

土地を捨て、食い詰めた彼らを拾い上げたのは、江夏郡新市県で顔役を務めていた、王匡、王鳳という男たちであった。

王匡、王鳳たちは、逃亡農民たちに巧みに声をかけ、散り散り立った彼らを一纏めにしたのである。

そして、緑林山を隠れ家に、周辺の集落を襲い、特に食料の多そ

うな倉庫のある富豪・地主の家や、役所などを中心に略奪を働いたのである。そのため、人びとはこの盗賊集団のことを、「緑林軍」と呼んで恐れたのである。

相手が仮に、五十人の衆で蔵を守っているならば、その倍の百人の人数で襲いかかるといった具合である。

そういう風にして大暴れしているうちに、噂を聞きつけた逃亡農民や、任侠の輩などが、新しく参加するようになり、さらには南陽の馬武、潁川の王常、成丹といった連中が、彼ら自身の徒党を引きつけてきたこともあり、「緑林軍」の数は、たちまち数千人にまで膨れ上がったのである。

これに対する皇帝・王莽の造反対策は、彼らしく聖人ぶって、「赦免してつかわす」といった程度のものであった。

あまりのことに、荊州牧の費興という人物が、

「租賦を軽くするべきであります」

と、まっとうな進言をしたのだが、王莽は自分で決めた税率にいちやもんをつけられたことに怒り、その場で彼を解任してしまったのである。

そして、費興の後任の荊州牧は、二万の兵を率いて緑林軍の討伐に向かった。

「二万の官兵来る！」

斥候からの報告に、緑林軍内部は騒然となった。なにしろ今までの

彼らは、その辺の集落や役所を突然襲っては、食料・金品をまきあげて、素早く山に帰るといふ、略奪目的の奇襲を繰り返していただけで、戦争らしい戦争をしたことは、ほとんどないのである。

しかも、元々が逃亡農民であることもあって、彼らの「お上恐怖症」は、かなりのものであった。

しかし、緑林軍の首領である、王匡や王鳳たちは、大笑いして言った。

「なにが、お上の軍隊だ。お上の軍隊って言ったって、元々は、お百姓さんじゃねえか。つまり、元々は、俺たちの仲間だ！」

「そうだそうだ。それより、二万もの官軍が来るんだ。さぞかし、おびただしい量の、兵糧・輜重を持ってくることだろう。それを俺達でいただこうじゃねえか！」

この一言で、緑林軍の士気はかなり高まったのである。

そして、緑林軍は雲杜うんとという場所まで出向くと、そこで二万の官軍と刃を交えたのである。

このとき襲いかかった緑林軍の数は、わずか八千にも満たなかった。

ところが二万の官軍は、自分たちの半分にも及ばない緑林軍のために、呆気なく大敗してしまった。数千人もの戦死者を出し、携えてきた兵糧、輜重車から武器に至るまで、ことごとくが緑林軍のものとなったのである。官軍を率いていた荊州牧は、軍を棄てて逃げ帰った。

官軍さえも打ち破ったことによって、緑林軍は、もう何も怖くないと言わんばかりの勢いとなった。

さらなる参加者が相次ぎ、さらには集落を襲った際に、婦女の略奪が行われた。彼らはどうやら、軍中で家庭を作ろうとしたようである。

その結果、数か月後には、緑林山の人口は五万人を超えたのである。

「いつの間にか、凄い人数になったもんだな」

山中の隠れ家を見て回りながら、とある幹部が独り言を言った。

「しかし、素直に喜べないな。どうも、嫌な予感がする」

果たして、その幹部の予想は、後に的中してしまうのだが、そのことに気付ける人間は皆無であった。

まして、その出来事が、世の中を大きく変える引き金になるなど……。

## 第五章 官になるなら執金吾（後書き）

### 人物紹介

おうきぎょう  
・王匡

字は不明である。荊州江夏郡新市県の人。荊州の盗賊集団、緑林軍の創始者のひとり。なお、同時期に、新王朝側にも同姓同名の王匡（王莽の親戚）がいるが、もちろん、別人。また、王莽の息子にも、王匡がいるが、全然関係ない。

おうほう  
・王鳳

字は不明。荊州江夏郡新市県の人。王匡同様、緑林軍の創始者のひとり。なお、王莽の叔父に、同姓同名の王鳳がいたが、これについては、時代の差もあって、別人であることがはっきりしている。

## 第六章 大司馬邸と思わぬ再会（前書き）

さて、今回は神妙な態度の秀児をご披露いたします。

そして、後半では秀児にとっての思わぬ再会、すなわち新キャラの登場です！

## 第六章 大司馬邸と思わぬ再会

春陵郷を発つて十日目。

修たち一行を乗せた馬車は、ついに都・常安（長安）に到着した。

人口二十一万人を超える関中最大の都市で、高祖・劉邦が漢王朝を建国して以来、二百二十余年の歴史を誇るこの都は、今日も大勢の人々で賑わっていた。

それこそ、例えば宮中で誰が居座ろうと、おかまいなしと言わんばかりである。

「花の都」の二つ名は、伊達ではないのだ。

いずれにせよ、市内を見物するのは後回しにしなければならない。

先に用事を済ませることにした一行は、春陵侯本家からの訴えの書状を携え、目的の場所へと向かった。

秀児たちが向かったのは、国の三公の一人である、大司馬（国防相）の莊尤の邸である。

皇帝・王莽に近い立場の人間で、宮中の要人の中では良識的であり、また、豪族たちへの理解も深いとの評判である莊尤ならば聞いてくれるだろうと思いい、その邸に向かったのである。

やがて、馬車は莊尤の邸の前にたどり着いた。



「ここから先は、書状を持った秀児一人で行かなければならない。

「秀児、大丈夫か？」

すでに要人に会うための準備を整えている秀児に対し、修が話しかけた。少しでも緊張をほぐしてやろうと思ったからである。

「うん。大丈夫だよ、修くん」

きちんと正装した姿の秀児が、微笑みながら答えた。彼女は以前この都・長安にて礼学を学んでいたという。だから、国の要人に対して失礼なことはいはしなはずであった。

「まあ、その……」

それでも、修は心配な様子である。

「なんかあつたら、とにかく叫べよ。すぐに駆けつけてやるからな」

「あはは、よく言っよ」

秀児が笑いながら言った。

「この僕に、『女の子の悲鳴』をあげさせたのは、どこのどちら様だったかな？」

彼女はそう言ってからかったのである。

「う……。と、とにかく、俺は来歎さんと一緒に待ってるから、早

く戻ってこいよ」

苦笑いしながら、修は気まずそうに言った。

「あははは！ 冗談だよ。心配してくれてありがとう！」

そう言って頭を下げると、秀児は

「それじゃ、行ってくるよ」

と、言い残して、莊尤の邸の門をくぐり、中へと入って行った。

「ふう、やれやれ」

秀児を見送った後、修は溜め息をついた。そして、しばらくその場で佇んだ後、隣にいる来歎に話しかけた。

「あの、来歎さん」

「なんだ？」

訝しがる来歎に、修は質問した。

「その、秀児が着ていた服のことなんですが、あれが、『正装』ですよね」

彼はそう聞いたのである。

「ああ、そつだ」

来歙は頷くと、説明した。

「あれは、女性の儒者が着る服だな。今から二十年ほど前。当時、漢の『安漢公』あんかんこうだった王莽……、いや、今上皇帝陛下が、女性の学者・官僚や太学生の服装を一新してな、太学に通う女学生たちや、学者・官僚として働く女性たちの『正装』は、ああいう服装になったわけだ」

そう言って来歙は、近くにある太学の門を指差した。そこでは、さっきの秀児と同じような服装に身を包んだ少女たちが出入りしていた。

「ふーん」

「ちなみに言っておくと、今から十年前ほどには、春萌も着ていたんだぞ。それはそれは、可愛かったなあ」

「ええ!？」

修は仰天した。あの劉嘉こと、春萌まで着ていたとは。

「ま、今でも十分お似合いだと思うがな。なにしろ、俺の義妹いもつとだし。はっはっは!」

そう言って、何かをごまかすかのように大笑いする来歙。しかし、修には笑う気にはなれなかった。

(なんでだよ……)

彼は現在、全力でつつこみたいのをこらえていた。

(あの恰好は、いつたいなんなんだ……)

彼の脳裏に、先ほど去って行った秀児の姿が甦る。

先ほどの秀児は、正装するにあたって、自身が女の子であることを隠しもせず、髪を下ろし、いつも着ているような男服とは似ても似つかない服を着ていた。来歎曰く、「太学時代からの正装」とのことである。

問題は、その服であった。

(なんで白黒なんだよ……)

その通りである。秀児が着ていた「正装」なる服、そして、太学付近にいる少女たちの服装。それらはいずれも白黒模様の、ややゆったりとした服である。それらは見かけこそ、古代中国風に織られていたが、現代日本からやって来た修にとつては、それは細かいところを除けば、見たことのあるものであった。

(なんで、スカート部分にフリルがついているんだよ……)

そう、秀児たちが「女性用儒服」と呼んで着ていたそれらには、いずれも下が長いスカートになっていて、しかもフリルまで付いているのである。実際の古代中国に、こんなものがないことぐらいは、修でもわかることであった。

(おまけにあの帽子はなんだ……)

次に修がつつこんだのは、秀児が被っていた帽子である。それは

幅広い上に、やけに長い、リボンみたいなものが付いていたのである。しかも、秀児はそれを「冠」と呼んでいた。

それらの服装に付いている模様や紋章、文字こそ、古代中国っぽいものであるが、衣装そのものは、どこからどう見ても、アレではない。すなわち……。

(なんで……)

修は過去最大級のつつこみに入った。

(なんで、『ゴスロリ衣装』なんだ!?)

そう。秀児や太学の少女たちが着ている「儒服」なるものは、どこからどう見ても、ゴスロリ衣装以外の何物でもなかったのである。すぐ近くを歩いている、「本物の儒服」に身を包んだ儒学者の男性と比較すれば、その衣装が異様であることはあまりに明らかであった。

(この世界は、いったいどうなっているんだ!?! この世界を作った神は、孔子さまを舐めてんのかああああ!?!?)

口にこそ出さなかったものの、今にも天に向かって叫びたい気持でいっぱいだった。

\*

さて、こちらは莊尤邸の客間。

邸の中に入った秀児は、そこで大司馬・莊尤そうゆうと面会していた。

「私が大司馬、莊伯石てうはくせきじゃ。そちは何と申す？」

卓を挟んで秀児に向きあっている、年長の女性こそ、今をときめく大司馬の莊尤である。

長い紫色の髪を持ち主である、この大司馬は、窓から差し込む日光を背にしていることも手伝って、なんとなく妖美な雰囲気を漂わせていた。

「莊大司馬閣下に、お初にお目にかかれたこと、光栄に存じます」

相手から解き放たれる威圧感にも滅入らず、秀児はきちんと丁寧に挨拶した。少しでも無礼なことがあつてはならない。そもそも、三公の「大司馬さま」である莊尤に、こうして会えただけでも、奇跡に近いのだ。しかも、秀児の態度次第で、春陵郷の一族の命運がかかっていると言っても、過言ではないのである。

「私、荊州・南陽が蔡陽・春陵から参りました、姓は劉。名は秀。字は文叔と申します。以後、お見知りおきを」

「ほう、そちは劉秀というのか。国師公（\*）と同じ名前じゃな」

そう言つと、興味深げに、莊尤は秀児を見つめた。

そして、そのまま、しばらくの間、沈黙が続いた。莊尤は秀児の顔をじつと観察してくるのである。秀児は緊張と威圧感とに押しつぶされそうに、なりながらも、かろうじて平静を装った。

「ふむ……」

やがて、莊尤の方から沈黙を破った。

「その方、髪と眉の美しき者じゃな。なかなか気に入ったわ」

「は、もつたいないお言葉でございます」

この妖美な雰囲気の大司馬は、秀児の下ろした蒼い髪と、整った眉とが綺麗だと言つたのである。まさかこんなことを言われるとは思つていなかった秀児は、嬉しい気持ちを抱きながらも、つい、冷や汗をかいた。

「さて、無駄話はこの辺にしとくでしょう」

莊尤が本題の方へと話を進めさせた。

「この度、そちはいかなる用で、この莊伯石の元へと来たのじゃ？」

「は。私めは、この通り、無位無官の下賤な輩であり、本来ならば、莊大司馬閣下に会うことさえ許されない立場でございますが、この度、我ら春陵の劉家の当主たる社より、お上への訴状を預かる立場として、閣下の下へと、参上つかまつつた次第でございます」

今までにないほどの、神妙な表情で、話を進め、携えてきた訴状を差し出す秀児。今の彼女を、外で待っている修が見れば、仰天して腰を抜かすであろう。

「まあ、そう自分を卑下せずとも好い。それで、春陵の社なる者からの訴えとはなんじゃ？」

莊尤が聞いた。

「は。社が申しますには、一に、租賦を毎年の通り、粟の一粒も欠くことなく納めているにもかかわらず、県の役人どもが、あれこれと理由をつけては、社の莊園より、錢から牛馬に至るまでを、取り立てていく始末だとのこと。二に、役人どもによる、小作人らへの横暴も治まらぬとのこと。三に、県宰、前隊大夫、州牧もこの訴えをまったく聞き入れてくれぬとのこと。いずれも、天子様の御威光に傷をつける行為にございます。私は、天子様の御威光に傷が付くことを恐れるのみで、こうして訴えに参った次第でございます」

頭を下げたまま、あらかじめ暗記していた訴状の内容を読み上げる秀児。その声は、先ほどよりも、さらなる真剣さを帯びていた。

「つきましては、莊大司馬閣下より、この現状を、皇帝陛下の方までお取り次ぎ願いたい次第でございます」

「なるほど。そちの訴えは、よくわかった」

莊尤は書状を読みながら、そう言った。

「ちょうど、そちの訴えと同じようなことを言うものが、直接私まで言いにくる者が幾十。書簡で届けてくる者が、幾百、千といふの



じゃ。このままでは、皇帝陛下のためにもまずいであろうと、私も考えていた所じゃ」

「では……？」

思わず顔をあげそうになる秀児。それを見た荘尤は、フツと微笑むと、言った。

「そちの所のことも含め、私の方から今一度、皇帝陛下に申し上げてみることにしよう。なあに、心配は無用ぞ」

「はは。ありがとうございます！」

秀児はそう言って深く頭を下げた。

「ふふ。そちは偉いやツじやのう」

そんな秀児を見て、おもしろかったのか、荘尤が褒めあげた。

「無位無官の身であるにもかかわらず、また、一族の人間であるとはいえ、遠縁の者のために、よくぞこの荘尤の所まで訴えに参ったものじゃ。関心するぞ」

「もつたいなきお言葉にございます」

嬉しさを心の内に秘めながら、秀児は荘尤に向かって感謝の意を示した。

「そう、畏まらずともよい。しかし、この朝廷にも、そちのようなもの言う臣がいたら、もつとおもしろいものなんじゃがのう」

不意に莊尤が、声を潜めて独り言を言った。

「は？」

「いや、こつちの話じゃ。さて、訴えのことはこの莊伯石がなんとかとりもとう。陛下が正しき天子の道をお進みになられるよう、微力ながら全力を尽くさせてもらおうぞ」

「はは！」

こうして、秀児は無事に春陵侯家からの訴えを上奏してもらえることがになったのであった。

\*

「お待たせ、二人とも！」

大司馬邸の門の内側から、嬉しそうな笑顔の秀児が出てきた。この様子だと、きちんと「任務」を果たすことができたようである。

「秀児！」

修と来歙が急いで駆け寄った。そして、門から出てきたばかりの

秀児と対面したのである。

「どうだったか？」

来歎が聞いた。

「うん。大丈夫だったよ」

秀児が得意げな笑みを浮かべて、結果について報告した。

「莊公（大司馬・莊尤）は、きちんとお上に上奏してくれるって！」

「やったじゃねえか！」

修はまるで自分のことのように、嬉しくなった。

「お前、本当にすげえよ！ やるなあ！」

「あはは、そんなことはないよ……？」

言いかけた時であった。

「ん？」

ふと、秀児が何かに気付いた。

「ねえ」

「ん？」

「なんだ？」

訝しがる修と来歙。そんな二人に、秀児は自分が気付いたことについて話した。

「なんか聞こえない？」

そう言われて、二人は耳をすませた。そして、聞き取った。

「言われてみれば……」

「なんだ？ 泣き声か？」

聞き耳を立てれば立てるほど、それははっきりと聞こえた。誰かがすすり泣きをしているのだ。

「あっちだ！」

秀児が大司馬邸の塀に沿って、角を曲がった。修と来歙も、急いで続く。

そして、三人は見た。

「あの子か……！」

塀の近くに植えられた、枝垂れ柳の幹の前で、一人の女の子がべそをかいているのを。

「なにをやっているんだ？」

わけがわからずに、修が呟いた。木に寄りかかって泣いている少女は後姿であったが、容姿容貌から、修や秀児と同年代の女の子であることは、容易に想像ついた。

彼女は秀児と同様の「儒服」（どこからどう見てもゴスロリ衣装）を身につけ、肩口くらいまで下ろした茶髪の頭の上には、秀児が被っているのとそっくりな帽子を被っていた。

（迷子、というわけじゃないみたいだな）

修がそう、間抜けなことを考えていたときだった。

秀児がその女の子の方に向かって、一步一步、ゆっくりと、前に進み出始めたのである。

（秀児？）

修は呆気にとられたが、黙って見てることにした。なぜか、そうした方がいいと思ったからだ。

やがて、女の子のすぐ後ろについた秀児は、ゆっくりと右手を上げると、泣いている女の子の肩を、そっと軽く叩いた。そして、言った。

「茶柳………」

肩を叩かれた少女は、泣きながらも振り向いた。その時、修はその女の子の顔を見た。茶髪のよく似合う、童顔の、その女の子は、目から涙を流していて、それはそれは悲しそうな表情であった。だが、それも、秀児の顔を見るまでであった。

「なんで泣いているの？」

優しげに語りかける秀児。すると、そんな秀児の姿をみとめた少女の表情が、悲しみから一変して、驚きの表情に変わったのである。

「うそ……」

少女は小さな声で呟いた。

「秀ちゃん……？」

「うん。僕だよ」

ニコリと優しげに微笑む秀児。すると、ついさっきまで泣いていた少女は、自分と同じ格好をした秀児に向かって抱きついたのである。

この様子からすると、お互い知り合いなのであるうことくらいは、修にも容易に想像することができた。

茶柳と呼ばれた少女の抱きついた時の勢いゆえか、修と来歎が見ている前で、くるくると自然に踊っているかのように抱き合う少女たち。

「大げさだなあ、茶柳は。たった数カ月じゃないか。僕たちが会ってないのは」

「だって、南陽ならとにかく、こんな所で、また、秀ちゃんに会えるなんて、思っていなかったんだもん！」

その二人の表情は、本当に嬉しそうであった。

「あー！」

不意に、来歙が声を上げた。

「どうしたんです、来歙さん？」

「なんだ、誰かと思つたら、茶柳じゃねえか」

目の前の仲良しな二人組を眺めながら、来歙はそう言った。

「え、誰です？」

「アイツは、秀児の幼い時からの友達だ」

暖かな視線を送りながら、来歙は、秀児と抱き合っている茶髪少女のことを、修に紹介した。

「アイツは朱？。字は仲先。秀児の幼馴染にして、以前、一緒にここ（長安）の太学で学んだ、『悪友その一』だ！」

\*（注）

・国師公

王莽の側近の大臣のこと。本名は劉りゅう？、字は子駿ししゅんだったが、後に名を「秀」、字を「穎叔えいしゅく」に改めた。儒教の經典の編集に携わったり、

「五徳終始説」などの理論体系を編み出し、後の中国の儒教政治などに多大なる影響を与えるなど、功績の大きい天才学者だが、王莽の帝位篡奪などに協力したり、儒教の経典を改竄したなどの悪評があり、あまり高い評価は得られていない。



## 第六章 大司馬邸と思わぬ再会（後書き）

恋姫紹介

・劉秀

字は文叔。真名は秀兒しゅうじ。荊州南陽郡蔡陽県の人。一人称は僕。景帝の子、長沙定王・劉発の末裔。現在、16歳。青みがかつたセミロングの髪（アホ毛有り）だが、普段は男らしく、後頭部で纏めている。貧乳。将来の夢は「官になるなら執金吾。妻を娶らば……」

・朱？（朱祐とも）

字は仲先。真名は茶柳ちやる。荊州南陽郡宛県の人。一人称は私。秀兒の親友。現時点では、16歳。栗色の髪を肩口で切りそろえている。童顔だが、胸は秀兒よりはある。頭が良く、太学時代は、いつも秀兒より先を進んでいた。見かけによらず、武勇にも優れている。秀兒のみならず、伯升とも親しいようだ。

・莊尤ていゆう

字は伯石。新の大司馬（国防省）を務める、妖美な女性。紫色の長い髪を持ち主。過去には匈奴遠征などで功績をあげ、高句麗討伐においては、高句麗王をだまし討ちにしたこともある。王莽政権の中では比較的常識人で、孫氏の兵法も覚えており、軍事的才能は豊かなのだが、才能の割に、主君に恵まれない、可哀そうな人である。

・儒服と礼学について

昔の中国の儒者たちは、ゆったりとした服を着て、頭には冠を被っていました。この冠のエピソードといえば、孔子の弟子の一人、子路ろが自分の主君を救おうと、クーデター軍の精鋭の剣士二人相手に一人で戦い、力及ばずに討ち取られた際、息を引き取る直前に、外れた冠を被りなおして、「見よ！ 君子は、冠を正しゅうして、死

ぬものだぞ！」と絶叫してから息を引き取った話です。

また、漢の高祖・劉邦は儒者が嫌いで、ある日、とある儒者に「冠を脱いでよこせ」と言っつて、儒者から冠を取り上げるや否や、それに放尿したという、汚いエピソードもあります。

また、中国の明の時代になって、日本に続いて中国に入ったイエズス会の宣教師たちが、最初は袈裟姿で、お坊さんになりすましてキリスト教を広めようとした（西僧）が、あとで中国ではお坊さんは尊敬されていないことに気付き、今度は髪を伸ばして、取り寄せた儒服を着用して、「西儒」の姿を借りてキリスト教を広めたそうです。

ちなみに、王莽は儒教を標榜した形式主義で、大混乱を招きました。が、彼が定めた「皇帝即位の儀式の要典」などは、その後の中国王朝でもずっと使われ続けたのです。

ちなみに、今回秀児たちが着ていた服装ですが、帽子に限定しては、朱里が被っているものの色違いというイメージです。

これは恋姫世界の話で、実際の儒教とは関係ありません。絶対に本気にしないでください！

至聖・孔子さま、本当に申し訳ございませんでした。

（でも、今時、論語の萌え本も売られているからなあ……）

## 第七章 朱？と？禹（前書き）

今回はちょっと、世間話みたいになってしまいました。

後半がとくに、自信ないですが、読んでいただければ幸いです。

それでは、どづぞー！

## 第七章 朱？と？禹

「幼馴染、ですか？」

修が呟いた。

「ああ、そうだ」

来歙はそう言って、二人の少女の方を、微笑ましげに眺めた。

「二人とも、小さい頃から仲良しで、いつも一緒に遊んでおったわ。一緒に追いかけっこしたり、時には何かと張り合ったりな」

「へえ〜」

感心する修。今や彼の眼は、正面にいる秀児たちの方に、釘づけになっていた。

（仲いいんだな）

見れば見るほど、微笑ましげに見えてくる光景である。

「ところで……」

見とれている修たちを余所に、秀児が例の朱？<sup>しゆい</sup>という女の子に話しかけた。

「茶柳<sup>ちやう</sup>。どうして君は、こんな所で泣いていたのかな？」

女の子であるにもかかわらず、いかにも頼れるお兄さん、みたいな口調で秀児が言った。

「うん、実はね……」

ついさっきまで寄りかかっていた枝垂れ柳の幹を背にしながら、朱？こと、茶柳が打ち明けた。

「私の実家で、役人たちが『租賦を払っていない』とかなんとか言つて、私の家や、親戚の人たちに、いつも迷惑なことばかりしてくるの。だから私、南陽の皆の代わりに、莊大司馬の所に、訴えに来たの」

「なるほど……」

秀児は幾度となく頷いた。茶柳が故郷・南陽の地を遠く離れた、この都まで一人で来ていたのは、秀児たちの本家、春陵侯家と同様の問題があつたがためだつた。だから、秀児には茶柳の気持ちがあつた。すぐに理解できたのである。

「そういうことか。しかし今、君が泣いているってことは、つまり……」

秀児はそう言つて、どうして茶柳が泣いているのかの答えを当てようとした。

「つまり、莊公は、君を相手にしてくれなかつたってことかな？」

「うん……」

凶星だったらしく、落ち込む茶柳。そして彼女は語った。

「私ね、ちゃんと荘公に言ったんだよ。『これを、皇帝陛下にお取り次ぎください』って。それなのに、荘公は、『検討しておくから今日は帰られよ』って、言うんだよ？　なんだか、冷たくあしらわれたみたいで。それに、せっかくここまで来たのに、わたし、何の役にも立てなくて、それが悔しくて……」

思い出すだけで悔しかったらしく、再び涙を目にためる茶柳。そんな彼女に対し、安心させてあげるかの如く、秀児は優しく、相手の両方の肩の上に手を置いた。そして、慰めようと声をかけた。

「茶柳。そんなことはないと思うよ」

「え？」

泣きべそをかいている茶柳と向きあい、秀児は彼女なりの自論を述べた。

「僕もついさつき、春陵侯家の、同じような問題のことを、荘公の所に訴えに行っただ。荘公は言ったよ。『同じような訴えが、たくさん来てる』って。だから、茶柳が訴えに行った時、虫の居所が悪くて、『またか』って思っ、うんざりしたんじゃないかな？　仮に僕が荘公なら、そう思うよ」

「そう、なの？」

「うん。それに荘公は言ったよ。『必ず、皇帝陛下に上奏する』って。だから大丈夫だよ。茶柳の訴えは、絶対にムダじゃないよ」

そう言ったとき、茶柳の表情は、ぱあっと、明るく輝いた。

「よかった……」

嬉しさのあまり、再び泣きそうになる茶柳。そして、そんな茶柳を見て微笑む秀児。

「それにしても……」

不意に、秀児が口を開いた。

「君は僕に宿題も教えてくれないほどの勉強家で、僕よりも先に進学するほどの『秀才』だし、しかも僕なんかよりずっと可愛く、おまけに武芸にも優れている。それなのに……」

なにやら昔話を持ちだして、いろいろと並べ立てる秀児。そして彼女はわざとらしく勝ち誇ったかのような態度をとりながら、最後にこう言い放った。

「どうして荘公は、君のことを相手にしないのかな？」

それを聞いた茶柳は、一瞬ポカンとなったが、間もなくからかわれたことに気付き、カアツと赤くなって、そのまま膨れた。そして、秀児の上半身を、ポカポカと力なく殴り始めた。

「もう、秀ちゃんつたら！」

そう言って嬉し泣きをしながら、茶柳はからかわれたことへのお返しを続ける。

「こんなに人が悩んでいるのに、からかうなんて！」

「あははは、ゴメン、ゴメン」

得意げに笑う秀児。この二人は、本当に仲良しであった。

\*

「あはは。仲いいですね、二人とも」

一連のやり取りを見ていた修が言った。

「そつだろつ。あいつらは昔からああいう関係だ」

来歎はそう言うと、今度は幾つかの昔話をした。

「この間まで、二人ともこの太学で学んでいたんだがな、俺が知り合いからきいた話だと、その土産話がまた傑作でな」

「どんな話なんです？」

好奇心旺盛だと言わんばかりに、修が聞いた。



「ああ。例えば、ある時は蜜（砂糖黍のしぼり汁）を、二人で割り勘したとか。他にも、学費を稼ぐために、二人で露店を開いてなあ、そこで、『薬草と蜂蜜で作った薬』を売ろうとしたそうだ」

「へえ〜。あの秀児がそんなことを……」

修は感心した。

「で、その『蜂蜜入りの薬』は売れたんですか？」

「いや、全然ダメだったらしい」

それを聞いて、修はガクツときた。思わず、ずっとこけそうになったほどである。

「まあ、ほかに、秀児のヤツは、『運送業』をやるために驢馬ロバを割り勘で買った……」

来歎が言いかけた時であった。

「あ、そうだ！」

不意に秀児の声が届いた。

「せっかくだから、茶柳に新しい友達を紹介するよ！」

言つやいなや、秀児は修たちの方を向いた。そして、大きく手を振った。

「しゃーねー、行くか」

修は来歎と共に、初めて話すであろう、茶髪の少女の方へと歩みを進めた。

「あ、来歎さん！」

以前からの顔見知りなのか、来歎に向かって明るく挨拶する少女・朱？。

「よう、茶柳。こんな所で会えるとは、奇遇だな」

来歎が愛想よく挨拶を返す。すると、朱？こと茶柳は、今度は修の方を見て言った。

「秀ちゃん。もしかして、この人が『新しい友達』なの？」

「うん。そっだよ、茶柳」

秀児は笑顔でそう言って頷くと、今度は修の方に向き直って、

「ほら、修くん。挨拶しなよ」

と、彼に挨拶を促した。

「ああ」

修は一度頷くと、自己紹介を兼ねて挨拶をした。

「俺は、柳修りゅうしゅう。字は伯昇はくしょう。よろしくな」

「初めまして、伯昇さん、でいいかな？ 私は朱し？。字は仲先ちゆうけんとい  
います。よろしくお願いします」

そう言っつて互いに頭を下げる二人。すると、秀児がさわやかな笑  
みを浮かべて言った。

「茶柳。おもしろい名前だろ？ 姓名の発音がこの僕と同じで、字  
が？兄様と同じなんだよ？」

「あ、言われてみればそうだね」

茶柳が秀児の言わんとすることに気付いて言った。

「秀ちゃんの名前と発音が同じだし、伯升さんの字とも読みが一緒  
だよ。凄いやー！」

そう言っつて、素直に関心する茶柳。秀児はなんだか照れくさくな  
ってきた。

(伯升さん……)

今更ながら、自分と全く読み方が同じ字を名付けた伯升に、一言  
言いたい気持になる。

すると、茶柳は何かを思い出したかのように言った。

「そう言えば秀ちゃん、伯升さんは元気になっているの？」

「ああ、もちろん！」

自信満々の表情で、秀児が答えた。

「昼は何もせずにゴロゴロして、夜になると、劉稷さんたちと飲んだくれる毎日だよ。元気すぎて、本当に腹が立つくらいね」

一瞬、秀児の笑顔の裏に、どす黒い何かが見えた気がしたが、修も来歎も、黙っておくことにした。

「あはは、伯升さんらしいね」

茶柳が苦笑いした。

「あ、ところで」

今度は秀児が言った。

「茶柳。君は露々るるを見かけなかったかな？ 露々るるはまだこの太学で頑張っているはずだし……」

「ううん。私、まだ会ってないよ？ できたら会いたいんだけど」

首を傾げる二人。どうやら、この長安には、もう一人、彼女たちの友人がいるらしい。

「おかしいな。あの露々るるが太学を退学になんてなるはずないし、どこにいるんだらうね？」

秀児がそう言った直後であった。

「誰が、退学ですって!？」

明らかに苛立ちを含んだ、少女の声が、修たちの耳に入った。

「え？」

後ろから聞こえた声に、修はさっと振り返った。しかし、声の主を見つけることはできない。

「あれ、今の声、いったいどこから？」

不思議に思っ、辺りをキョロキョロと見回した時だった。

「ここよー！」

自分はここにいると言わんばかりの大声が響いた。慌てて修は、自分の足元の方を見た。

そこにいたのは、秀児や茶柳と同じ服装をした、黒髪ツインテールの少女だった。もつとも、秀児や茶柳と比べて、遥かにチビだったが。

「ち、小さい？」

修がうっかり漏らしてしまった。それが、どれだけ相手を傷つけるかさえも考えずに。

「だ、誰が……」

チビ少女が、怒りに震えた。

「誰がチビですってえええ!!?」

そう言っつて、小さい体には似合わないほどの高さまで飛びあがると、見とれていた修の顔面に、飛びひざ蹴りを喰らわしたのである。

「ぐはあ!?!」

回避する間もなく、修はそれを喰らって倒れた。それはもう、盛大なものである。

「なによ、コイツ! 露々のことを、まったく知らないくせに! ホンツト失礼なヤツね!」

地面に着地するやいなや、両腕に腰をあて、言いたい放題のチビ少女。秀児たち三人は、苦笑するしかなかった。なにしろ、非は明らかに修の方にあるのだ。

「露々。もうその辺で」

苦笑いの表情を浮かべた秀児が、優しげに言った。

「ああ、もう。本当に腹立つわね」

苛立ちを隠せないまま、「露々」と呼ばれたチビ少女が言った。本当に腹が立っているようだ。

「あいてて……」

しばらくして、修が起き上がったので、秀児がさりげなく、一言言い渡した。

「修くん。ほら、謝らないと」

「あ、ああ」

流石に自分の言ったことのひどさに気付いた修は、すぐに謝った。

「い、ごめん」

「ふーんだ！」

チビ少女は、そう言って、脹れっ面でそっぽを向いた。エラそうに、腕まで組んでいる。

「いったい、この子、誰なんだ？ 秀児」

わけがわからないまま、修は聞いた。

「ああ、紹介するよ」

そう言って、秀児が紹介する。

「彼女は？ 禹とついか。字は仲華ちゅうか。僕や茶柳の、太学時代からの友達だよ」

「フーンだ」

どうやら、修はこのチビッ娘ごと、？禹からは、目の敵にされてしまったようだ。とりあえず、聞いてもらえないこと前提で、修も挨拶した。

「えっと、初めまして、？仲華さん、かな？ 俺は、柳修。字は伯昇。まあ、片隅にでも置いてくれないか？」

そう言った時だ。突然、？禹が険しい表情を崩さずに、修の方を見てきたのだ。一瞬何事かと思い、修はギョツと目を見開いたが、？禹は構うことなく、修の顔を、じっと見つめた。そして、しばらくして言った。

「うん。嫌なヤツだけど、将来、何かの役に立つかもね」

「え？」

訝しがる修。

「それってどういう……」

「言葉どおりの意味よ。認めたくないけど」

そう言ったきり、？禹はまたそっぽを向いてしまった。わけのわからない話とは、このことであるうか。

「あはは」

チンブンカンブンになる修を見て、秀児が笑いながら声をかけた。

「露々はね、昔から人を見るのが好きなんだよ。意外なことに、彼女の評は、けっこう当たるんだ？」

「なんだそれ？」



「いったいどこの占い師だ、と修は思った。

「ところで、秀児も茶柳も、こんなところでなにしてるの？ 二人とも、先に南陽に帰っていたはずでしょう？ まあ、久しぶりに会えたのは嬉しいけど」

思い出したかのように、秀児たちに語りかける？ 禹。

「ああ、それはね……」

今までのいきさつを、秀児と茶柳とが説明した。

「なるほどね……」

話を聞いて、？ 禹は何回か頷いた後、今度は彼女自身の近況について語った。

「最近、本当におかしくなっているわ。秀児や茶柳が南陽に帰ってから、この都でも、物の値段が鰻登りよ」

「そうなの？」

茶柳が聞いた。

「この露々さまが言ってるんだから、その通りよ。特に、粟の値段が十倍に上がっているのよ！ どうしてかわかる？」

「もしかして、河のことかな」

秀児が答えた。

「そうよ。以前、魏郡ぎくんで黄河が決壊したでしょう。あの大河の河の流れそのものが変わってしまうほどに。それなのに、皇帝陛下は堤防の修復さえしていないのよ」

「ええ!?!」

茶柳が驚いた。

「なんで!?!」

「聞いた話だと陛下はね……」

声を潜めながら、?禹が説明した。

「『天子が天に徳と威光を見せつけければ、洪水は起きない』と思っているらしいのよ。もともとその言葉は、『河を治めるものが天子たる資格を持つ者なり』という意味なのに、はき違えているわ」

なんだそれ、と修は思った。洪水を防ぐには、堤防が必要なことくらい、誰にでもわかることなのに、皇帝・王莽は何もしていないのだ。おかしい話である。

「それともう一つ」

?禹が続けた。

「陛下はまた、匈奴に遠征軍を送るつもりらしいわ」

『ええ!?!』

全員が驚いた。国内で飢饉が発生しているというのに、どうして匈奴などという、草原の異民族の討伐などしようとするのか。誰がどう見ても、しなくてもよい戦争である。

「おかげで、全国各地から壮丁が集められているし、兵糧も牛馬も、大量に北へと運ばれているみたいよ。どこから集めてきたのかしら、本当」

修たちには思い当る節があった。最近、役人たちによる徴発がやけにひどいのは、こういう流れだったのではないかと、思い至ったのである。

「まあ、こんな世間話しても仕方ないわね」

? 禹が手を横に広げながら、首を傾げた。

「今日はせっかく三人そろったんだし、いっぱい楽しみましょう！」

「うん、そうだね！」

「楽しまなくちゃ！」

こうして、世間話は幕を閉じ、長安観光へと、事は運ぶのであった。

都・長安は、本当に壮大な都市である。

現在、修たち一行は、東市にいた。そこで様々な店を見物していたのである。

「本当にすごいなあ」

修は息を呑んだ。ある店では蜂蜜が売られ、ある店では牛や豚の解体が生で見れるようになっていた。

またある店では、きれいな絹織物が売られていて、また別の店では、当時としては極めて珍しい、西域から来た瑠璃色の盃、すなわちガラスの容器が売られていたのである。

国が飢饉やら盗賊やらで苦しんでいるとは思えないほど、長安の街は賑やかであった。

「ここは本当にすごいなあ」

そう言っつて、修は隣にいる秀児に話しかけようとした。だが、そこで異変に気付いた。

「おい、秀児？」

話しかけても、秀児は向こうの方に夢中になっていて、気付いていないのである。

「おい、秀児！」

「え、わぁ！？」

声を張り上げたたん、驚いてビクつく秀児。

「何やってるんだ？」

「あ、ああ。ごめんね！」

そう言っつて、何かをごまかすかのように、慌てだす秀児。

「お前、何余所見してたんだ？」

お前らしくないぞと、修は言った。

「いや、なんでもないよ、うん！」

秀児はそう言っつて、何かを隠そうとしているかのように慌てた。それにしても、バレバレである。

「なんか、怪しいな」

そう言っつて、問い詰めようとする修。その時であった。

「秀ちゃん！ それから伯昇さん！ 大通りを、執金吾の行列が通るっつて！」

茶柳がそう言っつて、大通りの方へと一行を急かした。

『執金吾！？』

聞くやいなや、一行は大通りの方へと向かった。おかげで、修は先ほど秀児が見ていたモノが何かということ聞きそびれた。実は、先ほど秀児が眺めていたのは、近くの店前に並べられていた、可愛い女の子が描かれている屏風絵だったのだが、彼女にとっては幸いなことに、修にばれることなく済んだのである。

なにはともあれ、一行は大通りにたどり着いた。

「どれだよ、執金吾って？」

人ごみにもまれながらも、修が懸命になって背伸びしようとしたときだった。

「来た！」

秀児が腕を掲げながら、声を上げた。

それを聞いた修は、秀児が掲げる腕の先の方を凝視した。

やがて、それは姿を現した。人ごみの向こうの大通りを、ゆつくりと闊歩する騎兵集団。もう、間違いない。兵士たちの体格といい、恰好といい、あれは近衛兵たち以外の何者でもなかった。

それらはゆつくりと、しかし、それゆえに威厳のある存在として、人びとの見守る中を通過していくのである。

そして、ついにお目当ての人間が姿を現した。

「あれが……」

修は思った。彼の眼に入ったのは、きらびやかな衣装に身を包んだ、眉目秀麗で、威厳のありそうな人物だった。なるほど、秀児の言っていたとおりである。これに目を奪われるなという方が、無理というものだ。

「あれが、執金吾か……」

修は誰に言うでもなく、一人呟いた。

そんな彼を余所に、執金吾の行列は、ゆっくりと通り過ぎていく。それは河の流れのように、永遠に続くかに思われた。しかし、しばらくすると、最後尾の近衛兵が通り過ぎ、やがて、行列の姿は消えた。そして、大通りはいつも通りの喧騒にまみれるのである。

修は、行列が通過した後も、しばらくぼうつとなっていた。

「どっつ？」

突然、横から秀児が声をかけてきたので、我に帰る。

「あ、ああ。凄いな……」

だが、我に帰っても、それだけしか言えなかった。それ以外に、言い表す言葉がなかったのである。

「でしょっつ？」

満面の笑顔で秀児が言った。

「僕があれになりたい理由、少しはわかってくれたかな？」

「ああ」

修は未だに表情が戻らないまま、なんとか言葉を続けようとした。

「わかりすぎて、言葉が出ないなあ……」

「あはは、修くん、本当におもしろいよ、君！」

そんな修の姿がそばにはまったのか、大爆笑する秀児であった。

なお、このやり取りを眺めていた、来歙、茶柳、そして、？禹こと露々が笑いを隠せずにいたことは、言うまでもなかった。

その後、秀児たち一行は、都長安で一泊した後、再び南陽へと帰る運びになった。

露々は長安に残って勉強を続けるため、長安城北東にある宣平門で別れることになったが、こんどは朱？こと、茶柳が一行に加わり、一緒に帰ることになったのである。

一行を乗せた馬車は、来た道を引き返し、南陽の新野へと向かうのであった。

しかし、この時の修たちは気付いていなかった。

あの執金吾のきらびやかさの裏で、すでにどす黒い影が渦巻きつつあったことに……。



## 第七章 朱？と？禹（後書き）

恋姫紹介

・？禹<sup>しゅう</sup>

字は仲華<sup>ちゅうか</sup>。真名は露々<sup>ろろ</sup>。荊州南陽郡新野県の人。一人称は露々。現在、13歳。黒髪ツインテールで八重歯で碧眼。言うまでもなくお子様体型。性格的には子供らしくわがままな所があるが、詩経を誦し、勉強も得意な天才児。自称「張良」だが……。秀児の親友で、南陽・新野の大豪族、？家の一員。人の隠れた才能を発掘するのが得意である。三国志の終盤に登場する、？芝の先祖。

「光武帝」の史実のお話

今回、秀児が茶柳を「どうして荘公は……」とからかった話がありますが、あれは史実です。

史実の劉秀は、朱？に太学での講義でわからないところを教えてもらおうとしましたが、朱？は構わずに、さつさと先に昇進してしまつたのです。

この話については、以前の読み切り短編にて書いています。ともかく、劉秀と朱？は、このような冗談が通じるほど、仲が良かったようです。

ちなみに？禹ですが、史実では劉秀より七歳も年下でした！

劉秀は？家とは実家が婚姻関係であつたのですが、？禹と仲良くないのは、都・長安でのお話で、ここではそれを元にしていきます。なお、？禹が十三歳にして、「詩経」を論ずることができたのは史実です。

本当に、驚かされる話ばかりですね。

なお、最後に美少女の屏風絵ができましたが、劉秀は「美人の屏風絵」をコレクションにっていて、皇帝に即位した後も、この屏風絵コレクションを大事に持っていました。ある日、宴会の際に、皇帝・劉秀はこの屏風絵コレクションを皆に見せびらかして自慢していた所、家臣に叱られてしまい、慌てて全部撤収させたというお話があります。

こう言う所をみると、彼も真面目腐った人間ではなく、なんとなく親しみやすい、愛着の持ち主であることがわかります。

さて、次回は新野を舞台に、新たなキャラ達との共演を描いてまいります！

間章其の一 劉秀と予言書（前書き）

今回のお話は、秀児の昔話です。

史実を元に作っていますが、もちろん鵜呑みにはしないでください。

ただ、少しでも笑っていただければ幸いです。

それでは、どうぞ！

## 間章其の一 劉秀と予言書

都・長安を出発し、修たち一行は南陽郡の新野県に向かった。

行くときと違って、のんびりと春陵郷へと帰ることができるので、途中、寄り道するのである。春陵郷に帰る前に、新野の地にわざわざ立ち寄るのは何ゆえか。それは、秀児からの強い要望によるものだった。

これから一行が向かおうとしている新野の地には、？家いけという、代々二千石の高官を出している豪族が根を張っている。長安で出会った？禹うこと露ろ々は、その？家の遠縁に当たるのだが、今はさておき、現在の？家の当主は、？晨あさひという名の男だ。

その？晨は、春陵侯分家の劉元りゅうげんという女性と婚姻を結んでいた。

？晨の妻、劉元こそ、ほかならぬ劉秀こと秀児の次姉なのである。

つまり、秀児が新野に立ち寄りたという理由の一つは、彼女の姉と、その夫、つまり義兄あにに会いたいがためであった。

どうやら、秀児はそれをかなり楽しみにしているらしい。南陽へと戻る馬車の中でも、修や茶柳たちが見ているのも憚らずに、ずっとうずうずしていて、まるで落ち着きがない。

彼女はよっぽど、そのお姉さんのことが好きなようである。

「ああ、早く元姉様に会いたいなあ」

長安を出てから、彼女がそう独り言を何度も言うのを、修たちはしつこく聞かされた。おかげで、秀児がどれだけお姉さんを尊敬して、大切に思っているのかが、嫌でも伝わってくるものである。

「秀児のお姉さんって、どんな人なんだ？」

秀児の独り言を何度も聞いているうちに、とうとう質問せずにはいられなくなった修が思い切って聞いてみた。

すると秀児は、よくぞ聞いてくれました、と言わんばかりの嬉しそうな表情で言った。

「元姉様はね、すつごく優しくて、頼もしい人なんだよ。おまけに、すつごく美人なんだ」

「美人、かぁ」

修はなんとなく、春萌のような女性を想像した。しかし、秀児がここまで言うからには、けっこう凄い人に違いない。

「例えばね」

聞いてほしいと言わんばかりに、秀児が熱く語った。

「僕が小さい頃、？兄様によく悪戯されたんだ。おもちゃとかを取り上げられたり。そんな時、元姉様はいつも僕のことを庇ってくれたんだ。？兄様はいつつも、元姉様に怒られてばかりだったよ」

それを聞いた修は、「あの伯升さん」がガミガミ叱られる様子を

想像し、つい苦笑してしまった。なにしろ、普通は想像できない話だからである。それにしても、本当に秀児は幼い時からの苦勞人のようだ。

それはともかくとして、秀児の「お姉様自慢話」は続いた。

「？ 晨義兄様に嫁いだ後も、元姉様はちつとも変っていないんだ。相変わらず優しいし、ダメなことはダメだって、ちゃんと言ってくれるんだよ。おまけに、可愛い女の子が三人もいるんだ。ああ、早く会いたいなあ」

そんなことを延々と言い続ける秀児。そんな彼女の姿を見て、修はこう思わずにはいられなかった。

（秀児。お前、ちゃっかり「妹」しやがって。それにしても、この年でもう、「叔母さん」か……）

「修くん。今何か、変なこと考えなかった？」

不意に秀児が顔をのぞかせてきたので、修は慌ててごまかすように口笛を吹くと、

「いや、何も考えてないよ」

と、ごまかすのであった。

その後夕方になって、馬車はその日泊まる予定の旅籠にたどり着き、四人はそこで食を採り、談笑した後、寝る運びとなった。

「僕たちが行ったら、元姉様も、しん じこや晨義兄様も、驚くだろうなあ」

寝る前に、秀児は誰人に語るでもなく、そう呟いた。

そして、その日の疲れを癒すべく、ゆっくりと眠りに着いたのであった。

\*

「おい、起きろよ、秀児！」

誰かが秀児のことを呼んでいた。いったい、誰の声なのか。寝ぼけているため、相手の顔をきちんと見るまではわからない。だが、彼女のよく知っている人の声だ。

「うーん、眠いよう。もう少し寝かせて……」

秀児は相手をからかってやろうと思い、わざとらしくそう言った。どうしてそんなことをしようかと思ったのかは、彼女自身にもわからない。ただ、それをやれば、おもしろいような気がしたのだ。

「馬鹿を言つなよ」

相手が苦笑しながら言った。

「これから宛の蔡少公さいしょうこうの爺さんの家で宴だと言つのに、お前だけここで寝てるのかよ？ だったら代わりに、俺と伯升とで、お前の飯も喰つてしまつぞ？」

そう言われたとき、秀児は無性に食欲を覚えた。そして、自分でも恐ろしいほどの勢いで跳ね起きると、

「行く行く行くー！！」

と、大声で相手に迫った。その勢いに、相手の男は腰を抜かしかけた。

「わかつたから、大声出すなよ！ まったく、お前も伯升も、やっぱり兄妹なんだな。こういう時に声が大きいのは、本当にそっくりだ」

やれやれと首を振りながら、そう言つて溜め息をつく男。その男を見た秀児は、思わず頭を下げて、挨拶をした。なぜなら、その男は、彼女の尊敬する姉の婿だったからだ。

「あ、おはようございます。？とっしん農義にこうぎ兄様」

「なにが、『おはようございます』だよ、まったく」

？とっしん農と呼ばれた男が、笑いと呆れの混じった表情のまま、外の方を指差した。

「もう夕方だよ」

言われてみればその通りである。すでに陽は傾き、今にも遙か向



ここの山の方へと沈みこもうとしていたのだ。

「急がないと、伯升が、また怒るぞ」

「大変だ！」

？ 晨に急かされる形で、秀児は出発の準備を急いだ。伯升から叱られるだけならまだいい。だが、せつかくのご馳走を食べられてしまふことだけは勘弁してほしい。ただそれだけの気持ちで、秀児は急いで身支度を整え、屋敷の外へと飛び出した。

そのため彼女は、なぜか自分の体が縮んでいることには、まったく気が付かなかつたのである。

それはともかく、身支度を終えた秀児は、？ 晨と共に、宛の蔡少公の家へと向かい、そこで伯升たちとの宴に臨んだのであった。

\*

すでに夜も更けた頃、荊州最大の街、宛えんにある蔡少公という物知りなお爺さんの邸では、宴も佳境に入っていた。

座敷に並べられていた見事な料理も、すでに空き皿がほとんどである。また、酒を口にしなかつた人間も皆無で、座敷にいる者全員

が、真つ赤な顔のまま談笑を続けていた。

だが、たしかに皆、酒を口にして入るものの、飲み過ぎてへべれけになっていくわけでもない。普段だったら、浴びるように酒を飲む伯升や劉稷たちでさえ、飲むのを控えていたのである。それでも、まだ子どもである秀児から見れば、かなり飲んでいたのである。

「ああ、うめえ酒だ！　だが、今日は飲み過ぎる前に、爺さんに聞きてえことがあるんでな！」

盃を下に置きながら、伯升が蔡少公に言った。

「はて？　伯升どのは、この老いぼれに聞きたいことがあるんですかの？」

「ああ、そうだ！　爺さんだからこそ、俺たちや聞きてえんだ！」

年寄りらしいふがふがした声で答える少公に対し、正反対までの大声で物を言う伯升。

「大声で言わんでもわかつとりますわい！　それで、伯升どの、いったい、この老いぼれに、何をお尋ねになられるのですかの？」

「ふふふ。これは凄いで、爺さん。驚いて腰を抜かさんといてくれよ！」

そう言うやいなや、劉伯升は、隣にいた賓客の一人から、一つの竹筒を受け取ると、それを座敷中の人々に見えるよう、高く掲げたのである。そして言った。

「ついこの間、家で見つけたものだ！ 詳しいことはわからねえが、どうやらこれは、あの孔子さまが記された、『予言書』らしいぜ！」

それを見た少公も、他の人々も、胸の内に興奮を覚えた。そして皆、興味深げにそれを見つめた。「予言書」とやらに、何が書かれているのか、皆が知りたかったからである。もちろん、秀児もだ。

「だが、残念ながらこの伯升には、予言だの何だののことは、さっぱりわからねえ。だが、爺さん。あんたは確か、予言とかには詳しいと言っておったな。だから、今この場で、少しでいいから、どんなことが書かれているか、俺たちに教えてくれねえか？」

なるほど、と秀児は思った。今日、このよぼよぼの年寄りの家で宴会を行ったのは、この予言書を解読してもらったためだったのだ。でなければ、あの兄が、こんな年寄りの元を訪ねたりはしないであらう。

そう考えている秀児を余所に、伯升は老人・蔡少公の方へと歩み寄ると、彼の前に予言書の竹簡を置いた。蔡少公は、「ふむ」と言いながらそれを手に取ると、適当に拝見しながら言った。

「なるほど。あの孔子さまの予言とは、素晴らしいものですのう。どれ、一つ読んでみるとしますかな」

そう言っつて、真っ白な髭を生やした顔を、物凄く真剣な表情に変えて、例の予言書を解読し始めたのである。気のせいか、秀児にはこの老人が、まるでおもちゃを与えられた子どもに若返ったかのように見えた。

さすがに予言を解読するには、しばらくの時間がかかったが、

やがて少公はゆっくりと口を開いた。

「これは、これは、非常におもしろいことが書かれておりますのう」

少公はそう言って、目を見開いたのである。

「何が書かれてあるんだ、爺さんよう！」

待ち切れないと言わんばかりに、伯升が詰め寄ったが、少公は手を上げると、年寄りとは思えない剣幕でこれを制した。

「まあ、待ちなさい！ 今からきちんと説明いたしますわい！」

そう言うと、少公は箸を掴むと、それで预言書に書かれた古めかしい文字の列を示しながら解説した。声を潜め、この事は、他言は無用であると前置きをしながら。

「まず、ここの一文じゃが、どうやら、あと十年もしないうちに、王莽さまの天下は終わりを告げ、そして大漢帝国が復興すると、書いてありますのう」

「なんと……！？」

皆が息を呑んだ。爺さんがいうには、なんとあの王莽が滅びるのだというのだ。数年前、高祖・劉邦以来、二百十四年続いた漢王朝から、「高祖の霊からの伝言」と称して皇帝の位を奪い、漢の血筋を引く者たちから王侯の爵位を剥奪した、あの王莽が。聖人ぶつてわけのわからない政策ばかりで、数多くの人々を窮地に追いやって、あの憎き王莽が、滅びるといふのだ。

そして、変わって劉家の大漢帝国が復興するというのである。

皆は思わず叫びそうになったが、すぐさま、その言葉を呑みこんだ。こんなことを誰かに聞かれ、役人の耳にでも入れば、全員的首が飛ぶからだ。

皆は恐る恐る、少公の次の言葉を待った。少公は次の一文を箸で示しながら皆に言い続けた。

「さて、次の文じゃが、ここには王莽さま亡き後の、次の天子さまの名前が書かれておりますのう」

「な、なるほど。それで、次の天子さまとは、いったいどなたなんでしょう?」

声を潜めながら、賓客の一人が聞いた。少公は「ふむ」と頷いた後、予言書の続きを皆に聞かせた。

「ここにその名前が載っていますのう」

それを聞いた皆は、一斉に静まり返った。やがて、少公はそれを読み上げた。

「この予言書によりますと、次の天子さまとなるのは、『劉秀』なる者である、と、記されておりますが、はて、どなたのことですかのう」

少公はそう言ったきり、口を紡いだ。皆は不気味なように静まり返ると、予言書に載っていた、「劉秀」なる人物がいったい誰なのかと、考え始めた。

高祖・劉邦が漢王朝を立ち上げてから、すでに二百年以上が経過している。そのため、この中原には「劉姓」を名乗る人間だけで数万人もの数に上るのだ。

さらに現在の皇帝の椅子に踏ん反り返っている王莽が、皇帝の座に着く前に出した法令、「二名の禁」により、中原一帯の人間のほとんども、自分の諱いみなを一文子いみなずつしか持っていないのである。

そういうことを考えると、劉姓の人間の中でさえ、「秀」という名の人間の数もありふれていることになるのだ。

「これはもしかすると、国師公のことかもしれませんぞ」

賓客の一人が息を潜めながらも、そう言った。当時、王莽の側近の大臣の一人に、国師公の劉秀なる人物がいた。「劉秀」という名前を持つ人間の中では、今のところ、中原一有名な人物である。

「なるほど……」

その場にいたほとんど全員が、互いに頷きあうと、そのまま口をつぐんだ。たちまち、この座敷の空気は、緊張に包まれたのである。このようなことが外に漏れると、大変なことになる。だから皆、沈黙してしまったのだ。普段騒がしい伯升や劉稷でさえも、静まりかえった。

誰もが、今日はもうこのまま誰一人喋ることなく、この宴はお開きとなるだろう、と思った。だから、一人の子どもが、悪戯っぽい笑みを浮かべていることには、誰も気づかなかったのである。

「あのさ」

突然、その場の空気には全然、似つかわしくない子どもの声が鳴り響いた。

「皆、ひどいよ。僕だって『劉秀』だよ？」

口を開いたのは、ほかならぬ秀児であった。突然のこの声に、その場にいた人たちは、わけがわからないまま、思わず目を見開いた。いったい、誰がこんなことを言っているのかと。だが、秀児は構わずに、こう言った。

「どうして僕じゃないって、言えるのさ？」

それを聞いた人びとは、皆一斉に、秀児の方を見つめた。だれもがきょとんとした、間抜けな表情になっていたのである。一瞬、完全に時が止まったかのように、皆錯覚した。しかし、それも束の間のことであった。

「お、おまえ……」

一番最初に口を開いたのは、秀児の実の兄である伯升であった。彼はぽかんとした表情のまま、口から言葉を紡ぎ出した。

「おまえが……、天子さま……だって……？」

そこまで言うのが限界であった。

「だーはっはっはっはー!!」

次の瞬間、伯升は表情を崩したかと思いきや、今までにないほどの大声で大爆笑したのである。それにつられ、その場にいた全員が笑い転げた。なにしろ、今まで緊張の真っ只中にいたのである。それが突き崩された上に、あんな大胆な発言をしたのが、虫一匹殺せそうもない餓鬼だったからだ。もちろん、この場にいる皆が秀児のことを知っている。兄の伯升とは正反対のおとなしい子で、誰かと口論することさえないばかりか、むしろ臆病なところがあるくらいだ。だから余計におかしかったのである。

「おい！ 秀児！」

爆笑しながら、伯升が秀児の前に立った。そして、わしゃわしゃと、秀児の頭を、髪の上から撫でた。

「おまえ、可愛いヤツだな！！ ああ、たしかに、お前は『劉秀』だとも！ しかし、お前が天子さまとは、ああ、こりゃ、おかしー！！」

そう言うやいなや、再び爆笑する伯升。もはや、この座敷にいる人たちの笑いを止めるすべはないようである。

とうとう、言った張本人である秀児までもが、「やったぞ」と言わんばかりに笑い始めた。

だが、そんな中においても、秀児は一人だけ、本心から笑っていない男がいるのに気付いた。

それは、姉婿の？ 農であった。彼はクスクスと笑ってはいたが、伯升たちのように、秀児をからかって笑っているのではないようだった。秀児はそれに気付いたのである。



その後、皆が気分を良くしたところで宴会はお開きとなった。

その帰り道のことだった。

「秀児」

不意に？ 晨が話しかけてきた。

「なに、晨義兄様？」

訝しがる秀児に対し、？ 晨は自分の右手を上げると、それを秀児の頭の上に、ポンと優しく乗せた。そして、優しげな表情で、こう言った。

「お前、将来は絶対に大物になるぞ。頑張れよ」

ただそれだけ言うと、？ 晨は先に歩いて行った。

「あ、待ってよ。晨義兄様！」

呆気にとられていた秀児は、その小さな体で、慌てて？ 晨の後を追うのであった。

\*

「はっ!?!」

窓から差し込む朝の光で、秀児は目を覚ました。

咄嗟に、周りを見回してみる。そこは、新野からはまだ遠い場所にある旅籠の部屋であった。

すぐ脇には、親友の茶柳が、まだスヤスヤと寝息を立てている。そして、その一枚扉を隔てた向こう側からは、修と来歎のいびきが聞こえていた。

「夢だったんだ……」

秀児は悟った。今までの懐かしい話は、全部夢だったのである。ただし、彼女にとっては、ただの夢ではなかった。

「まさか、ちっちゃい時の事を、こうして夢に見るなんて」

彼女はそう言って懐かしく思った。隣の部屋で寝ている修には知る由もないことだが、どうやら秀児自身が過去に体験した話を、そのまま夢で見たようであった。なかなか珍しいことだと言わねばならない。

「そうだ!」

ふと、秀児は思った。

「新野に着いたら、晨義兄様ともいっぱいお話しよう!」

そう考えると、ますます新野に着くのが楽しみになって来た秀児であった。

その後、一行は馬車で新野へと向けて出発した。

果たして彼ら、彼女らは、新野で誰人と会うことになるのだろうか。

それは、また次のお話である。

## 間章其の一 劉秀と予言書（後書き）

人物紹介

・？とうしん晨

字は偉卿いけい。荊州南陽郡新野県の人。新野の豪族、？家の現当主にして、劉？（伯升）・劉秀の次姉・劉元の夫。そのため、秀兎にとつては義兄にあたる。？家は先祖代々、二千石の高官を出している家系で、先に登場した？禹は、その遠縁である。伯升とはまた別タイプの性格で、冷静なところがあり、秀兎を見る目も、妻である元からいろいろ聞かされているせい、他人とは違った目で見ることができるようである。現在、劉元との間に三女あり。

「予言書エピソード」について

今回の話で、秀兎が「どうして僕じゃないと言えるのさ」と発言した話ですが、これは正史にもある話です。

「後漢書・？晨伝」によると、蔡少公が解読した予言書の中に、「劉秀りゅうしゅう当に天子と為るべし」と書かれており、誰かが、「是れ国師公の劉秀りゅうしゅうなる乎や」と発言しました。

その直後、「春陵の三男坊」に過ぎない「劉秀」くんが、「何ぞ用もちて僕に非なざることを知らん邪や」（何用知非僕邪）と冗談で言ったのです。

それを聞いた瞬間、その場にいた全員が笑い転げました。「坐する者皆みな大いに笑う」（坐者皆大笑）

しかし、？晨だけは本気で笑わなかったのです。後漢書は、この時の？晨を、「晨は心に独り喜ぶ」（晨心獨喜）と記しています。

英雄にはいろいろエピソードがつきもので、

例えば「項羽と劉邦」の劉邦なら、秦の始皇帝の行列を見て、「俺もあになりたい」（項羽は「彼かなた、取って代わるべし」）

「三国志」の劉備なら、桑の木の枝を示して、「俺はああいう屋根のついた車に乗るんだ」（皇帝の天蓋車のこと）

といった話が、彼らの性格を示していると思います。

一方の劉秀は、誰がどっから見ても、田舎の県令の三男坊で、しかもこの時は、虫一匹殺せそうにない人間だったので、皆、本当におかしかったんだと思います。

こういう笑い話から始まる英雄も、珍しいものだと思いませんか？しかし、これを本心から笑わなかった？ 農には感服させられるものです。

さて、次回は「三国志」で劉備が立ち寄ったこともある新野を舞台に話を進めてまいります！

## 第八章 迷子少女と南陽男児（前書き）

今回、初めて一万字を超えました！

ただ、ダラダラしているかもしれませんが。

今回のお話は、「ヒロインその一」の、顔見世話です。  
どうぞ！

## 第八章 迷子少女と南陽男児

えー、皆さん。柳修やなぎしゅうです。どうも、ご無沙汰むさたしております。

突然ですが、皆さんに報告しなければならぬことがあります。

実は俺、迷子になりました。

\*

ここは荊州最大の街、宛。

人口は十七万人。中原の城市としの中では長安、洛陽に次ぐ人口の多さを誇る街である。

現在、柳修はこの街の真っ只中で、あるうことか迷子になっていたのであった。

どうしてそのようなことになったのであろうか。この始まりは、秀児たちと一緒に、この街に立ち寄ったことであった。

そもそも、一行は新野にある？家に向かっていたのだが、その通

り道にあつたのが、ほかならぬ、この宛城だつたのである。長安に行く時は急いでいたこともあつて素通りしたのだが、今度は別に急がぬ帰り道であつたこともあり、また、長安で加わつた朱？こと、茶柳の故郷の街でもあるため、素通りするのはもつたないということ、立ち寄ることにしたのである。

「せつかくだから、お土産でも買っていこうよ」

秀児はそう言ったのである。修もそれには賛成だつたし、また、彼自身も、長安とはまた異なる街である、宛の街を見ておきたいと思つた。例えるなら、日本に来た外国人が、東京だけじゃなく、大阪や京都も見ておきたい、と思うこととほぼ同じ気持ちである。

そんなこともあつて、一行は宛の城門をくぐり、街をうるついていたのである。

だが、人間という生き物は、見知らぬところにいくと、ついはいでしまうものである。

修も例にもれず、いろいろなものに目を奪われ、あつちへ行つたり、今度はこつちへ行つたりと、とにかく、悪餓鬼みたいにはしやぎまわつた。それはもう、はしやぎ過ぎたと言わねばならない。

秀児についていけば大丈夫だと思つていた彼は、肉屋が牛を解体しているのに、一瞬見とれた後、そのまま蒼い髪の少女の後についたのである。

だが、それがまずかつたのだ。

「おい、待ってくれ、秀……」



秀児に話しかけようとしたときだった。

「どなたですか？」

「あ、あれ？」

修は異変に気付いた。なんと、秀児だとばかり思っていた蒼い髪の少女が、全然知らない、赤の他人だったのだ。

「す、すみません。人違いです！」

そう言っただけで謝った後、修は慌てて周囲を見回した。

だが、辺り一面は、人ばかりである。日中、大勢の人々にぎわう市場で、顔見知りを見失うことは、事実上の死を意味する。これは大げさな表現ではない。なにしろ、「異世界人」である修にとっでは、冗談にならない死活問題であった。

「おい、秀児！ 来歎さん！ 仲先さん！」

不味いことに気付くやいなや、修は大声を出して、懸命になって、三人の手掛かりを探った。しかし、三人ともどこへ行ったのか、姿は見えない。

「ヤベエよ。どうしよう」

冷や汗を流す修。だが、ふと簡単な解決策が頭に浮かんだ。

「そつだ。南の門の前で待とう」

彼はそう言うと、街の南にある城門へと向かうことにした。というのは、事前に秀児たちと、万が一迷子になった場合は、そこで待ち会うことを決めていたからである。

その時は笑って聞き流していたのだが、まさか、本当にこういうことになるとは思わなかった。

「ああ、秀児のヤツ。怒るだろうな」

我ながら恥ずかしくなってくる修。しかし、今はそうするよりほかに道はない。ただ、一刻も早く、秀児たちと会いたいという気持ちで、彼は南の城門へと足を進めたのであった。

\*

「ん？」

南の方へと向かう途中、修は突然、足を止めた。どうして足を止めたのかというと、それは、

「……どこだ？」

道に迷ってしまったからである。

「おい、ちょっと待てよ。これ、いくらなんでもやばいだろう」

彼は狼狽した。迷子になったときの対策を、事前に話し合っていたにもかかわらず、あるうことが、「二重迷子」になってしまったのである。

どうしてこのような事態になったのかと言えば、事は非常に単純だった。

「畜生……。こうなるんなら、変な道を通るんじゃないか……」

修はそう言っ頭を抱えた。

大通りは人が多すぎて暑苦しかったため、人の少ない裏通りから行こうと思ったのである。それがそもその間違いだったのだ。

人の少ない裏通りに入った瞬間、そこは迷路以外の何物でもなくなったのである。慌てて、元来た道に戻ろうと思ったのだが、結果としては、さらにわけがわからなくなっただけであった。

「どうしよう」

彼は泣きそうになった。情けない話である。この年になって迷子など、本当に泣きたくなる話である。

「くそっ、泣いてる暇はねえ。はやくなんとかしないと……」

そう思って、なんとか人でも探そうと考えた時であった。

「……けて……」

「ん？」

彼はふと、違和感を覚えた。何か、小さな声みたいなものを聞きとったような感じがしたのだ。

「なんだ？」

修は慌てて耳を立てた。すると、さっきの小さい声みたいなものが、ますます鮮明に聞こえてきたのである。

「……だれか……たすけて……！」

「どこだ!？」

彼は自分が迷子になっていることも忘れて、急いで声のする方へと向かった。狭い裏通りの、幾つかの角を曲がり、やがて、一軒の屋敷の、高い塀の前にたどり着いた。

「ここか……、ってああ!？」

そして、そこで彼は見た。

「くっ……っ……っ……!!」

一人の女の子が、塀の上からぶら下がっているのを。

「お、おい……。あれ、やばいんじゃない?」

修は冷や汗をかいた。目の前の女の子は、自身の細い両腕で、懸命になって塀のてっぺんにしがみついていた。しかし、その足元は地面よりはるかに高い所にあり、届いていない。つまり、誰がどこから見ても、女の子は塀の上から落ちそうになっていることにほかならない。

「くそ！ はやくなんとかしないと！」

修がなんとかしようとして、身をあたふたさせていたときであった。

「……キヤー！！？」

とうとう、目の前の女の子が手を滑らせて、地面に向けて落下し始めたのだ。修が見るに、塀の高さはおよそ一丈（三メートル弱）はある。楚々たる少女が地面に落下すれば、少なくとも大怪我をすることは避けられない。

「ちつくしゅう！！！」

無意識のうちに、修は駆けだしていた。むろん、女の子を助けるためである。

「四の五の言ってる場合じゃねえ！！！」

そして彼は、まるで兵士の鬨の声のような叫びを上げながら、落ちてくる少女を抱えようとしたのである。

だが結果は、抱えようとしたという意味においては、失敗であった。

なぜなら、修自身は、落ちてきた少女の小さな体を受け止めた瞬間、そのまま後ろに倒れてしまった。すなわち、彼は小さな少女の下敷きになってしまったのである。

唯一の救いは、彼の尊い犠牲によって、この女の子には傷一つなかったことであった。

\*

「う、うーん……？」

しばらくして、修は目を覚ました。

「いてて。あれ？ 俺はいつたい……？」

転倒した際に打った頭をさすりながら、身を起こそうとしたときだった。

「あの？」

突然、彼の視界いっぱい、一人の女の子の顔が広がった。先ほど修が助けようとした少女である。彼女は、そのいたいけな瞳で、修の顔ギリギリにまで近づいて、覗き込んでいた。

「う、うわあ!？」

いきなりすることに修は思わず、後ろにのけ反った。当然と言えば当然の反応である。目が覚めた時、すぐ目と鼻の先に、女の子の顔があつたら、男なら誰でも驚くであろう。

「どうされましたの？」

驚いた修の姿を見て、見知らぬ少女は不思議そうな表情をして、優しい声で尋ねた。どうやら、彼女にはどうして修が驚いてのけ反ったのか、まるでわかっていないようであった。

「い、いや。なんでもないんだ」

修は息を荒げながら、咄嗟にそう言っでごまかした。

「あら、そんなんですの？ おもしろいお方ですわね」

女の子はそう言つと、右手を彼女の口元まで持つていき、クスツと微笑んだ。その仕種が、またまた可愛いものである。

「べ、別におもしろくなんかねえぞ」

修はそう言つて、ばつが悪そうな顔をした。

「ふふ。男の方つて、よくわかりませんわ。あ、それはそうと……」

不意に、少女が畏まって礼を言った。

「先ほどは、危ないところを助けていただいて、本当にありがとう」

「ごぞいました」

そう言って、ゆっくりと、かつ優雅に頭を下げる少女。その仕種に、修は再び見とれた。

（なんだ、この娘は？ どこかのいいところのお嬢さんなのか？）

彼はそう思った。見てみれば、女の子の着ている服は、ふんわりとした、柔らい生地 of 絹の服である。長い袖と、長い裾がついている上に、きれいな刺繍で彩られたその服は、いかにも気品のあふれてそうな人間が着るシロモノであった。現在、修が着ている麻製の質素な服とは大違いである。

また、少女は美しい、つややかな黒髪を持ち主であった。そよ風が吹くたびに、その後ろ髪が、河が流れるがごとく、きれいに広がるのである。

また、顔立ちも綺麗に整っていた。いかにも古代中国の雰囲気のある絹の服と、そんな絹の服よりもさらに綺麗な黒髪とあわせて、まるで少女が生きている小さな人形のように見えるほどであった。

そんなわけなので、修はつい、じつと固まったまま、少女の方に目が釘付けになってしまったのである。

（うわあ、きれいな子だな）

彼はそう思わずにはいられなかった。

「あの、どうなされました？」



少女が聞いてきたため、修ははっと我に返った。そして、顔を密かに赤らめながら言った。

「いや、なんでもない。それより……」

彼は慌てて話をすり替えた。

「俺、柳修。字は伯昇っていうんだ。君のことはなんと呼べばいいんだ？」

「あら。そういえばそうですね」

修が自己紹介をすると、少女は微笑みながら名乗った。

「私のことは、麗れいとお呼びください、伯昇さま」

「俺、『さま』付けて呼ばれるほど偉くねえよ。『修』でいい」

慣れない『さま』付け呼ばわりされたものだから、つい恥ずかしくなってしまう修。そんな彼の姿がおかしかったのか、麗と名乗った女の子は、またクスツと可愛らしく笑うと、言った。

「はい、わかりました。修さん」

「ああ、よろしくな」

こうして、二人の挨拶は無事に終了したのである。

その後、二人はなんとか表通りに入るべく、移動することとなった。

\*

「ところで、麗ちゃんよお」

歩きながら修が尋ねた。

「はい？」

「麗ちゃんは、どうして、あんな高い所にいたんだ？」

彼はそう聞いた。さっき、どうしてこの少女・麗が、あんな高い所に乗っていたのか。それが知りたかったのである。

「ああ、それはですね……」

麗は説明した。

彼女の説明によると、彼女は自分の叔父と一緒に宛の街に来たのだが、ふと、一匹の可愛い子猫を見つけ、それを追いかけているうちに、路地裏に入り込んでしまった。

そして、その子猫が高い塀の上に登ったので、彼女も後を追って、塀の上によじ登ったのである。それが不味かった。

その後、結局猫はどこかに行ってしまった、塀の上には彼女一人が取り残されてしまった。

しかも麗は、木や塀の上に昇ることができても、降りることはできなかったのである。

彼女自身、それがわかっていたはずなのだが、可愛い動物などに夢中な時などの場合、それをつい忘れてしまうのである。

その結果、自分が高い所にいることを思い出すと怖くなってしまい、とうとう足を滑らせて落ちそうになってしまった。

そして、なんとか両手でしがみついていたところに現れたのが修だった、という事である。

「まったく」

そこまで聞いた修は、呆れかえった。この黒髪美少女は、彼の想像以上の天然のようだった。

「高いところが苦手なら、それを忘れるなよ」

「じゅめんなさい……」

しょぼんとうなだれる少女。それを見た修は、また赤くなってしまった。

（ああ、どうしてこの子はいちいち、その仕種が可愛いんだ？）

本当に、今の自分の姿を秀見に見られたらどう言われことだろうか。一瞬、そういう考えが頭をよぎったが、彼は慌てて首を横に振って、なんとか平常を装った。そして、彼なりに優しく言い放った。

「まあ、なんて言うか、これからは気をつけた方がいいぞ。うん」

「そうですね。これからは気をつけます」

麗は微笑みながら、そう言ったのである。

(やれやれ、これで一件落着……)

修がそう言っ、腕で額の汗をぬぐった時だった。

「あら、猫ですわ!」

麗が足を止めた。彼女のすぐ前には、本当に可愛らしい猫が一匹、あくびをしていたのである。それを見て嬉しそうな表情の麗。

逆に、修の方は戦慄を覚えた。

(まさか、この展開! なんとなく、嫌な予感しか……!?)

そう思った時であった。

案の定、猫が彼らから離れていくかのように、向こうの方へと、駆けて言ったのである。それはもう、人の速さでは追いつけない。それにもかかわらず、追いかける者がいたのである。

「あ、待ってください!」

それは無論、麗であつた。彼女は動きにくい長袖、長い裾の服を着ているにもかかわらず、そんなのを気にも留めずに、走り去っていく猫の後を追つたのである。

「あ、おい。待てつて！」

そんな彼女を慌てて追いかける修。彼には本当に嫌な予感しかしなかつたのである。

こうして猫を追いかけること、およそ十分余り。修の悪い予感は、的中してしまつたのである。

「きゃ！？」

猫を追うのに夢中だつた少女・麗が悲鳴を上げた。修が見ているすぐ前で、正面から歩いてきた人にぶつかつてしまつたのである。

「あら、ごめんなさい！」

咄嗟にそう謝る麗。そのこと自体には、全く問題はなかつた。たいていの場合、きちんと謝れば許してもらえるからである。

だが世の中、全ての人間が「ごめん」の一言で済むほど甘くはない。なかには非常に悪質な人間もいるのである。

雲の悪いことに、麗がぶつかつた相手は、そんな部類の人間であつた。

「おい、待ちな。お嬢ちゃん」

麗がぶつかってしまった、のっぴな男が荒い声を上げた。

「なんですか？」

「あいたたたた！」

突然、その男が大きな声を上げながら、右腕を押さえた。

「どうなされましたの？」

「お嬢ちゃん。どうしてくれるんだ？ お嬢ちゃんがぶつかったせいで、腕の骨が折れちまったじゃねえか」

男はそう言ったのである。そんなことが嘘であることくらい、誰がどこから見てもわかることである。だが、必ずしも誰もが嘘を見抜けるわけではない。

「あら、それは大変ですわ」

麗は本気で心配したのである。いかにも世間知らずそうな雰囲気、しかも優しそうな雰囲気、この少女は、この程度の事で簡単に騙されてしまったようだ。

「そうだよ。おじさん、大変なんだよ」

男はそう言うと、今度はニヤリと、気味の悪い笑みを浮かべた。

「それなら、その腕を見せていただけますか？」

麗が心配そうにそう言ったが、男は首を横に振ると、誰が聞いても呆れることを口にした。

「いや。その代わりに、お嬢ちゃんに、その服を貸して欲しいんだ」  
「服、ですか？」

「ああ。この折れた腕を直すのに必要なんだよ。お金とかは要らねえから、代わりに、なっ」

本当に恐ろしいことである。男の目的が、麗の貞操を奪おうとしていることは、修が見ても明らかなことであった。

我慢が出来なくなった彼は、ついに男を怒鳴りつけた。

「いい加減にしろ！」

「な、なんだ、てめえは！？」

「うるせえ。誰でもいいだろうが！」

男の言うことは無視して、修は麗の手を引いて、その場から去るうとした。

「あら。どうしてそんなに強く手を引くのですか？」

「いいから、逃げるぞ」

「えっ？」

「君は騙されているんだ。あの男、本当は腕なんか折れてないぞ」

「あら。そうなんですか?」

「ああ、そうだよ」

そんなやり取りを交わしながら、麗と一緒に逃げようとする修。だが、やはり世の中はそう甘くない。

「チツ。逃がすかよ」

自分の計略を邪魔された男は、そう言って舌打ちすると、第二の作戦を実行に移した。

「おい！ チビ！ デク！ お前らの出番だ！」

男がそう叫んだ直後である。

「おうよ、アニキ！」

「出番なんだな」

なんと、修たちの前に、男のかたわれらしい、二人組が立ちふさがったのだ。片方は猫背で小さく、反対にもう片方の男は、身長も横幅も極めて大きかった。だが、そんな二人組でも、共通していることはあった。

「へへへ。逃がさねえよ」

「あきらめるんだな」



笑い方が下賤であるということである。

「くそつ。待ち伏せか」

修は今まで以上の戦慄を覚えた。なにしろ彼は、まともなケンカなどしたことがないのだ。この世界に来てから、劉伯升に、直に鍛えてもらっているとはいえ、まだまだ修練が必要なのである。まして、相手は三人なのだ。

(ここは相手を刺激させないように、なんとかしないと……)

彼がそう思ったときだった。

「あら。どうしてそんなに気味の悪い笑い方をしているんですの？」

突然、麗がなんの前触れもなしに、突拍子なことを言い始めたのである。

「え？」

「ん？」

男たちは一瞬、呆気にとられたが、麗はキョトンとした表情のまま、更に言い続けた。

「そんな笑い方、私は好きではありませんわ。あなた方のお顔が、ますますひどい顔に見えますもの」

彼女は残酷なまでに純粹であった。むろん、彼女のこの発言が、

男たちの怒りに火をつけてしまったのである。

「なんだと!?!」

「ああ!?!」

「誰がひどい顔なんだな!?!」

三者三様、男たちは怒りの表情を露わにした。麗の言つとおりである。本当にひどい顔ではないか。

「ええい、もう構わん! こいつらをやっちまえ!」

「おうよ!」

「ああ!」

麗が最初にぶつかった、のっぴな男が命令を下し、それにチビ男とデカ男とが応え、下品な笑みを浮かべながら、修たちの方にじり寄って来たのである。

「くそっ」

覚悟を決めた修は、せめて麗だけでも守つてやろうと、彼女の前に出た。今の自分では、相手には到底かなわないことを知りながら。

そして、目の前の男たちが、今まさに修たちに襲いかかろうとしたときであった。

「待てえい!」

突然、ここにいる誰のでもない大声が響いたのである。

「な!？」

「だ、誰だ!？」

突然の大声に動揺する三人組。と、その時である。

『う、うわあ!？』

修の目の前にいた大男と、チビ男とが、一緒になって宙を舞い、そして地に叩きつけられた。そして、さっきまでこの二人がいた所には、いつの間に関れたのか、長身で、顔に黒い髭を生やした、一人のたくましそうな体つきの男が立っていたのである。

「な、なんだ、貴様!？」

突然の乱入者に、のっぴな男が取り乱しながら言った。だが、仁王立ちで堂々とした風格の男は、それに応えない。

代わりに、彼はその「いちやもん男」の方へと、ゆっくりとにじり寄りつつ、言った。

「か弱き乙女を辱めようとするその魂胆。さらにはたった一人に対し、三人がかりで殴りかかるうとするなど言語道断。てめえら、それでも南陽男児か!」

「な、なにに!？」

「まあいい。それならそれで、南陽男児とは何たるかを、この？奉とんぽうが直に教えてやるわ！」

そう言つて、？奉と名乗つた男は、素手のまま構えをとる。

「なにを、小癩な！」

激怒した「いちやもん男」は、自分なりに全力を振り絞つて、目の前の乱入者に飛びかかった。だが、相手が悪すぎたのである。

「ふん。甘いわ！」

？奉は相手を一括すると、自分に向かつて来た拳を軽々と回避し、逆に自分の右の拳を、相手の腹に叩きこんだのである。

「ぐはあっ！！？」

男はそう悲鳴を上げると同時に、後方へと吹き飛ばされ、近くの壁に叩きつけられると、そのまま伸びてしまった。それだけで終わったのである。

「ふん。他愛もねえな」

？奉はそう言つて、自分が倒した三人組を一瞥すると、今度は修と麗の方へと向き直つた。

「おい、ケガはねえか？」

先ほどの堂々たる風格とは打って変わって、彼は優しげな表情で尋ねたのである。

「は、はい！」

先ほどの光景に、呆気にとられていた修は、そう言って頭を下げることにできなかった。だが、？奉にはそれだけで十分だったらしい。

「そうか。ま、うちの麗を守ろうとしてくれたその態度だけでも、立派なもんだ。礼を言っぜ」

そう言って、男らしく、さわやかな笑みを浮かべる？奉。そんな彼に、修の後ろにいた麗が、とことこと歩み寄ると、そのまま抱きついた。

「？奉おじ様！」

「麗！ 無事でよかったな！」

麗の黒い髪を撫でてやりながら、安堵の表情を浮かべる？奉。それを見た修は悟った。どうやら、先ほど麗が言っていた「叔父」というのは、この？奉のことだったようである。

「まったく。心配かけさせやがって！ 突然猫なんかを追いかけるからだ。探したんだぞ！」

「あら、そうでしたの。本当にごめんなさい」

？奉は麗に対し、軽率な行動は控えるように言い、流石の麗も、今度こそ申し訳なさそうに謝った。まるで本物の親子のようである。

「ま、次からは気をつけねばいいってことだ」

？奉は麗との話をそう締めくくると、今度は修の方に向かって礼を言った。

「いや、本当にうちの姪っ子が世話になったな。なにかお礼でもしてえところだが、あいにく、俺は何も持ってはいねえんだ。すまねえ」

「あ、いや。いいんですよ。お礼なんて……」

慌てて言いかけたところで、修は閃いた。

「お礼は構いませんから、その代わりに大通りへの道と、この城市の南門の場所を教えてもらえないでしょうか？」

彼はこの際だと言わんばかりに、道を聞くことにしたのである。

「おうよ！ そんなのお安い御用だぜ！」

？奉は笑いながらそう言うと、麗の手を引きながら、修の道案内をつとめてあげたのであった。

「ところで、貴方のお名前は？」

「俺は？奉てえんだ。お前さんは？」

「あ、俺は柳修。字は伯昇といいます。よろしくお願いします」

「ほう。なんだか俺のダチに似てるじゃねえか」

「そ、そうですねか？」

「ああ！」

道中、こんなやり取りがあったのは、別の話である。

\*

「ここをそのまままっすぐ行けば、南門だ。わかったな？」

「はい、ありがとうございます」

大通りに出て、南の方へ歩みを進めること十数分。

ようやく向こうの方に、南門がうつすらと見えるところになったところで、修は？奉と麗の二人と別れることになった。なんでもこの二人は、近辺に住んでいるのらしいが、今夜はこの宛城内の旅籠に泊まるようである。そんなわけで、修は短い間ながらお世話になった？奉にお礼を言った。

「本当にありがとうございます。？奉さん」

「なあに、聞けばお前さんも、この麗を助けてくれたそうじゃねえ

か。これでおあいこだぜ！」

「ははは。そうですね」

そう言って笑いあう二人。そこへ、少女・麗が口を挟む。

「修さん。よろしければ、またお会いいたしませんか？ 私、ここからそう遠くない所に住んでいますの」

「うん、そうだな。また会おう。わかった。約束する」

そう言って、修はニコリと微笑んだ。男ながら、爽やかな笑みである。それを見た麗も、優しげに微笑んだ。

「さてと、そろそろ行くか」

そう言うのと、修は南門の方へと向かって駆けて行った。

「さようなら！」

そう言って手を振りながら！

「あばよ！」

「さようなら！」

走り去っていく彼に向って、？奉と麗の二人が、いつまでも手を振り続けた。

その後、南門に無事にたどり着いた修が、そこで待っていた秀児



たちから、さんざん注意されたことは言うまでもなかった。

だが、修は知る由もなかった。この後、こんな注意など吹き飛ばすほどの、さらなる騒動が彼を待ち受けていることなど……。

\*

一方、修と別れ、旅籠へと向かう途中の？奉と麗の二人である。

「なあ、麗」

「なんでしよう、おじ様」

「お前、あの修とかいうヤツに、自分の家の事を話さなかったな。まあ、話したら話したで、次伯じはくのヤツがまたおもしろくなるだろうが……」

？奉はそう言ったのである。たしかに麗は、修に自分の家のことは何一つ話していなかった。彼女の姓についても。もっとも、話したところで、修にはわからなかっただろうが。

「あら。別にいいのですわ。だって……」

そう言い含めると、麗は十三歳前後の少女のそれとは思えない、

妖美な雰囲気を漂わせながら、言葉を続けた。

「私、あのお方とは、またすぐにでも会えそうな気がいたしますの」

「なんだ、そりゃ？ また、お前のカンか？」

「ふふ。そんなものでしょうか？」

それを聞いた？奉は、自分の頭を軽く掻き耨りながら、やれやれという表情で言った。

「まあ、お前のカンは、昔から不思議と当たるからなあ」

そう言っている間に、二人は旅籠の入口の前にたどり着いた。

「さてと、今夜はここに泊まるぞ。明日、新野の偉卿いけいの家に行くんだから、さっさと寝ねえとな」

「そうですわね」

そう言葉を交わすと、二人は旅籠の中へと入っていった。

その際、少女・麗は、ふと、こんなことを胸の内であらわしていた。

（それにしても、あの柳修さまというお方。なんだか「劉三公子」のお名前を思い出させますわ。劉三公子はお元気にされておりますでしょうか？ またお会いしたいですわ）

かすかに吹くよそ風に、自身の長い黒髪をなびかせながら、麗は叔父の後について建物の中へと入って行った。

## 第八章 迷子少女と南陽男児（後書き）

### 人物紹介

・「麗<sup>れい</sup>」と名乗った少女。

十三歳前後の外見の女の子。長い、艶やかな黒髪が特徴の美少女。十三歳とは思えない、妖美な雰囲気を持ち主だが、反面、かなりの天然で、典型的な「世間知らずなお嬢様」。可愛い動物が好きで、優しい性格である。着ている絹の服から判断して、かなり高貴な家の出のようだが……。新野の？奉<sup>とほう</sup>なる男の姪っ子<sup>とほう</sup>のようである。作者個人のイメージモデル（顔の雰囲気や髪形など）は、キネティックノベルに紹介されているゲーム「紅姫」の「劉伯姫」。〔髪の色と長さは除いて〕。

・？奉<sup>とほう</sup>

字は不明である。麗と名乗った少女の叔父。南陽新野の豪族で、劉秀の姉婿・？晨の甥。姪の麗とは、本物の親子のような関係。かなりの腕力の持ち主で、また、故郷南陽を愛する「南陽男児」である。

## 第九章　？ 晨一家と昨日の少女（前書き）

今回、文字数が少ないうえに、ちょっと物足りなさがあります。

更新を急いで、話を二分することにしました。

すみませんが、よろしくお願いします。

## 第九章　？ 農一家と昨日の少女

「元姉様！」

邸の門が開くやいなや、秀児はそう叫びながら、勢いよく中へと入って行った。

ここは新野にある、？ 農の邸。

秀児の義兄一家の住む家に辿り着くやいなや、彼女は大好きな自分の姉の名を叫びながら、邸の奥深くへと駆けて行った。どうやら、彼女は本当に、姉のことが大好きなようだ。

「お、おい。落ち着けよ、秀児」

修がそう言ったが、彼女は聞く耳も持たずに、そのまま行ってしまった。

「ははは。相変わらずだな。秀児のヤツ」

来歎が微笑ましげに言った。むろん、秀児の従兄である彼は、秀児がどれだけ自分の姉のことを慕っているかをよく知っている。

「秀ちゃん、相変わらずだね」

一緒についてきた茶柳もそう言った。

「劉元さんも、皆さんも、元気にしてるかな？」

秀児の幼馴染である彼女も、劉元と会うのを楽しみにしている。

一行はひとまず、？家の下僕の案内のもと、客間へと向かうことにした。

(それにしても……)

修は一人思った。

(ここもでけえ邸うちだな……)

彼はつい見とれてしまった。なにしろ、この？家の邸は、本当に大きいのである。春陵郷の劉嘉こと春萌の邸もかなりのものであったが、ここはそれをも上回るのだ。いつもどこにでも、上には上がいるものである。もっとも、この新野には、この？家の邸よりもさらに大きな邸が存在することを、修は知らないのだが。

(秀児。お前のお姉さん、だいぶいいところに嫁いでいるじゃねえか)

そんなことを考えながらも、客間へと向かう修であった。

\*

「みんなー！」

客間に入った修たちが見たものは、三人の小さな女の子と一緒に戯れている秀児の姿であった。

「久しぶりー！」

「あ、秀叔母さ……」

「なにかな？」

「ううん、秀お姉さまだ！」

「こんにちは！」

途中、何やら、得体のしれない雰囲気が出たのは置いておいて、秀児は三人の女の子と挨拶を交わすと、そのそれぞれを抱っこしたり、頭を撫でてあげたりと、それは、それは楽しそうである。どうやら、この三人の女の子たちこそ、秀児の姪にあたる子たちのものであった。

（楽しそうだな……）

後から入って来た修たちがそれを微笑ましげに見ていたときであった。

「あら？」

客間に、一人の優しそうな雰囲気のある女性が入って来た。母性的な

感じのするその女性は、秀児と同様の蒼い髪の持ち主だが、彼女とは正反対に、包容力のありそうな人である。

「秀ちゃんじゃない！」

「元姉様！」

女性の姿をみとめるやいなや、秀児は嬉しそうな表情を浮かべながら、その女性の方へと駆け寄った。そして、まるで三歳の子どものように、その女性の胸の中へと飛び込んだのである。

「あらあら。秀ちゃんは相変わらず甘えん坊さんね」

そう言いながらも、優しく秀児の頭を撫でてあげる女性。この女性こそが、秀児の姉、劉元りゅうげんであろうことくらいは、修にも予想することができた。そんなことは知らんと言わんばかりに、修たちをそっちのけに、姉との再会を喜ぶ秀児。

「だって、本当に元姉様に会いたかったんだよー！」

すでに秀児の表情は、「癒されている」と言わんばかりの、満足そうなものである。今の秀児の姿は、誰がどこから見ても、これ以上の幸せ者はいないと言わんばかりのものである。少なくとも、修、来歎、茶柳の三人はそう感じた。

「お、誰かと思ったら、秀児じゃないか」

そこへ、また新たな人間が割って入って来た。今度は、一人の男性であった。



「あ、しんご晨義兄様！」

これまた嬉しそうな表情で、秀児が言った。入って来たのは、伯升と比べると、はるかに優しそうな雰囲気、三十代後半くらいの男性である。どうやら、彼がこの家の当主にして、秀児の姉婿のようであった。

「久しぶりだな。その様子を見ると、『元気か？』って聞く必要はないみたいだな」

「あ、晨義兄様ってばひどーい」

そう言っててむくれ顔になる秀児。それを見た？とっしん晨は

「ははは」

と、愉快そうに笑った。

「あら。来歙さんと、茶柳ちゃんまで来られてたんですね？ お元気？」

後ろにいた来歙たちに気付いた劉元が言った。

「ああ、俺は大丈夫だ」

「お久しぶりです」

本当に久々だと言わんばかりに挨拶を交わす二人。それを微笑ましげに見つめる劉元だったが、そこで、見慣れない少年、修の姿をみとめる。

「あら、初めての子ね」

そう言われて、修ははっとした。彼自身のことを言われたことは、明白だ。

「は、初めまして！」

彼は慌てて挨拶をした。そして、自身を紹介した。この世界に来て以来、もうすっかり慣れた名前で。

「俺は柳修、字は伯昇といいます。秀児や伯升さんの元で、お世話になっていきます。よろしくお願いします！」

そう言って、律儀に頭を下げる修。柳修りゅうしゅうとして、頭を下げるのは、これで何回目であろうか。

「あら、律儀な子ね」

劉元が微笑みながら言った。

（それにしても、秀ちゃんのことを真名を呼んでるあたり、仲がいいみたいね。やっぱり、秀ちゃんの日那さんには、こんな男の子がいいかしら？）

その微笑みの裏で、そんなことを考えていたことなど、修も秀児も知る由もない。

「それでは、こちら名乗らなくてはいけませんね」

劉元はそう言って夫と目配せすると、名乗り返した。

「私は、姓は劉、名は元。弟の？と妹の秀が、お世話になっていま  
す」

「俺は、姓は？、名は農。この元の夫で、こここの家主だ。ま、気楽  
に話してくれ」

夫婦そろって、律儀な挨拶である。

すると、それを聞いていた三人の女の子たちも、我も我もと、声  
を上げた。

「私も！」

「あたしも！」

「あたちも！」

「はい、はい」

自身の三人の愛娘たちに、優しく微笑みかける劉元。どうやら、  
この？一家は、夫婦仲、親子中ともに、本当に良さそうであった。

見ているだけで、修も、秀見たちも、微笑ましげになるのであっ  
た。

その後、彼らは気の済むまで。とことん語りあった。

とある、新たな客人が現れるまで。

\*

「そう言えば、農兄様。？ほ……」

秀児が？農に対し、何かを聞こうとしたときであった。

「おい、叔父上！ 俺だ！ 門を開けてくれ！」

邸の門の方から、男の大きな声が響き渡ったのである。

「あれ？」

修は、首を傾げた。

「今の声、なんか聞き覚えがあるような……」

しかし、どうしても思い出すことができない。

すると？農が、

「お、ちょうどよかったな」

と、秀児に向かって言った。どうやら、彼女が聞かんとすること

の内容が、全部聞かなくても最初からわかっていたようである。彼は客人を迎えに行くために、立ち上がると門へと向かった。

それに、秀児や茶柳も一緒について行くのである。特に、秀児に至っては、嬉しそうな表情であった。

「あれ？ どうして皆……？」

修が彼女たちを慌てて眼で追った。彼には、どうして？ 晨の家に来た客人の出迎えに、部外者であるはずの秀児や茶柳が出迎えに行くのか、わからなかったのである。

「ははあ、なるほど」

来歙が頷いた。

「さては、？ 奉のヤツだな？」

「え、？ 奉さん！？」

修が叫んだ。来歙の口から出てきた名前が、あるうことか、昨日、宛で会ったばかりの、男の名前だったからである。

「なんだ、お前。？ 奉のことを知っているのか？」

修に対し、そのような質問をする来歙。彼にしてみれば、？ 晨と初めて会ったばかりの修が、その「甥」のことを知っているはずはないとばかり思っていたからである。

「知っているも何も、昨日、宛で迷子になっていた俺の事を助けて

くれた人ですよ！」

「なに？ それは、どういう……！？」

来歎が訳を訪ねるよりも先に、修は勢いよく客間を飛び出し、秀児たちの後を追ったのである。無理もない。まさか、昨日知り合っただばかりの人間が、秀児の身内だったとは、思わなかったのである。

（ちゃんと挨拶しなければ！）

彼はそんなことで、頭がいつぱいだった。

そのため、？奉以外にも、まさかの思わぬ再会があるなど、その時の彼には予想することもできなかったのである。

\*

「よう、叔父上！」

邸の玄関で待っていた修たちの前に姿を見せたのは、案の定、あの？奉であった。彼は邸の中に入るやいなや、真っ先に自分の叔父である？奉に声をかけた。

「急に訪ねてスマンな」

「いや、大丈夫だよ。お前も元気そうで何よりじゃないか」

叔父と甥の間で会話ははずむ。そこへ、後からやって来た秀児と茶柳が口を挟んだ！

「？奉！ 久しぶりだね！」

「お久しぶりです、？奉さん！」

「おつ、秀児と茶柳も来ていたのか！ 叔父上を訪ねたら、まさかこんな所でお前にも会えるとはな。はっはっは、これはちょうどいい！」

旧知の二人の姿をみとめて、何故か大笑いする？奉。

「え、何がちょうどいいの！？」

秀児が聞こうとしたときだった。

「？奉さん！」

不意に、少年の声が響いた。むろん、それは一番最後にやって来た、修の声である。彼は、長い廊下を急いで走ったためか、息を切らしながら駆けつけて来たのだ。

「え、修くん？」

秀児が驚くのを余所に、修は？奉の前に駆け寄ると、急いで挨拶をした。

「？奉さん。昨日は本当に、ありがとございました！」

「ん。お前さんは、たしか、昨日の？」

「はい、昨日、宛でお世話になった柳修です！」

「なに！？ お前さんが、どうして叔父上の所にいるんだ？」

不思議がる？奉。それは秀児も同様であった。

「修くん。どうして、君が？奉のことを知っているの？」

「あ、ごめん。言うのを忘れていた」

そうやって修は、秀児たちに、昨日の迷子になったときの一件を話した。

迷子になった際に、道に迷った拳句、ゴロツキにからまれた所を助けてくれた上に、南の門まで案内してくれたのが、ほかならぬこの？奉だということを。それを聞いた秀児たちは納得した。

そして、秀児が、わけのわからないという顔をいている？奉に向かって、そつと一言を言う。

「？奉。修くんはね、僕の友達なんだ」

「なるほど。そう言うことか！」

秀児からの一言を聞いた？奉は、それですっかり納得したようだ。



途端に、彼は笑いながら、修の背中をばしばしと、大きく叩いた。

「いてて!?!」

「なんだ、お前さんは、秀児のヤツのダチだったのか！　なんで黙ってたんだ？　水臭えぞ！」

悲鳴を上げる修を余所に、驚きと嬉しさの混じった表情で、修を歓迎する？　奉。修にとっては、ある意味では、また伯升のような雰囲気の間が、周りに増えたような気がしてならなかったが、一方では、また新たな知り合いができたことに、嬉しさを隠せないものであった。

「なーんだ！」

再会を喜ぶ修たちを見ながら、秀児が呟いた。

「修くん。？　奉とは知り合いだったんだね」

「それにしても、凄いな」

茶柳が口を挟んだ。

「まさか昨日、迷子になってるときに知り合った人が、私や秀ちやんの知り合いで、しかも、今日また会えるなんて。滅多にないことだよ」

本当にその通りである。迷子になった時に道を教えてもらった赤の他人が、まさか友人の知人で、身内だったなど、教えてもらわないう限り、誰が想像できようか。

「おお、そつだ」

突然、？奉が声を上げた。

「どうしたの、？奉？」

「実はな、今日はもう一人、客人が来ているんだ。お前ら、誰かわかるか？」

不意に、？奉がなぞなぞでも出すかのように、声を潜めた。

「え、まさか!？」

突然、秀児が満面の笑みを浮かべた。なにやら、本当に嬉しそうである。

「そつだ、秀児」

秀児の考えていることを読み取ったらしく、？奉が笑みを浮かべながら言った。

「あ、なるほど」

「わかった!」

？晨と茶柳も、誰が来たのかわかったようである。唯一わかっていないのは、修だけのようであった。

(え、誰だろう)

彼は考えた。彼は、難しく考えすぎて、実は答えに該当する人物と、昨日、宛で出会っていることに、全く思い至らなかつたのである。

(ま、いつか。どうせ、すぐに答えもわかるだろうし)

そう思った時だ。

「まさか、本当に『カン』が当たるとは、思わなかつたぜ。よし、それじゃ、呼ぶぞ」

?奉がそう言つて、後ろを振り向くと、

「おい、入ってきていいぞ!」

と、外にいる誰かに向かって呼び掛けたのである。

すると、扉がガラツと開くと同時に、その人物が姿を現した。

「こんにちは、皆さん」

その人物は、皆の前で、律儀にお辞儀をした。見るからに、高貴な雰囲気を漂わせながら。

それを見た修は、あつと息を呑んだ。

着ているのは、滑らかな絹の、長い袖と長い裾のある、高そうな服。そして、頭から地面に向かって降りているのは、艶やかで美しい、長い黒髪。そして、その顔立ちは、美しく、まるで人形が生き

ているかのような雰囲気。

見間違えようがなかった。

『麗ちゃん!』

咄嗟に叫ばずにはいられなかった修。だが、そこで誰かと言葉が被ったことに気付いた。

「あれ、修くん？」

そう言ったのは、秀児であった。言葉が被ったのは、ほかならぬ彼女だったのである。

「あら、修さんもいらしたのですか？」

可愛らしげな声で、修が昨日で会ったばかりの女の子、麗が、そう言った。

「え、修くんと知り合いなの？ いったい、どういうことかな？」

秀児が慌てて聞いた。

「え、いや、その……」

修が返答に困っていると、奉が助け船を出した。

「ああ。そう言えば、修のヤツは、昨日、麗と会ったばかりだと、言ってなかったな」

そう言つと、？奉は昨日の一連の経緯を話してくれた。

「なあんだ。そう言つことが」

話を聞いた秀児は、ホツとした。少なくとも、修にはそう言つように見えたのである。

「劉三公子」  
りゅうさんこうし

不意に、麗が秀児に向かって話しかけた。なにやら、聞きなれない単語を使いながら。

「え、なに？ 麗ちゃん」

そう言つて受け答える秀児。何故か、彼女の顔は、赤く染まっているかのように見えた。しかも、見るからに落ち着きがないのである。

「わたくし、実は、こちらの修さんに、まだ嘘をついたままなんですの。少し、お時間をいただきますわね」

「あ、うん……」

見るからに緊張している秀児。だが、それよりも、「嘘をついたまま」という言葉が引っかけたので、修はどういう意味かと、話を聞くことにした。

「あの、嘘つて？」

「実は、わたくし、修さんにきちんと名乗っておりますの。改め

て名乗らせていただきますわ」

そう言つと、麗は、改めて自己紹介をした。

「わたくしの姓は陰。名は麗華と申します。家は、この新野にありますわ。改めまして、よろしくお願いしますね」

\*

光烈こうれつ陰后いんごう、諱いみなは麗華れいか、南陽新野の人なり。初め光武、新野に適ゆき、后うしろの美うつくしきを聞いて心に之を悦ぶ。後に長安に至り、執金吾しやくきんごの甚なだ盛さかんなるを見て、因よつて歎なげじて曰いわく、「仕官しては当まだに執金吾しやくきんごと作るべく、妻を娶よつては当まだに陰麗華いんれいかを得べし」。

。「後漢書本紀二 皇后紀第十上より」

\*

異世界に飛ばされた少年・柳修が、南陽・新野の超名門出身の美

少女、いんれいか陰麗華と、正式に知り合った瞬間であった。

## 第九章 ? 農一家と昨日の少女(後書き)

恋姫紹介

・陰麗華

真名は麗々

荊州南陽郡新野県の大豪族、陰氏の出身の女の子。現在、十三歳。長い、艶やかな黒髪が特徴の美少女。十三歳とは思えない、妖美な雰囲気を持ち主だが、反面、かなりの天然で、典型的な「世間知らずなお嬢様」。可愛い動物が好きで、優しい性格である。一方で、父親の陰陸を早くに亡くしていることもあって、「父」という単語に過剰に反応して、泣きだすほどである。嫌いなものは、冗談や駄洒落など。

家族は、異母兄の陰識や、弟の陰興などがいる。

母親は? 奉の妹であり、そのため? 奉とは叔父姪の関係であり、傍目から見れば実の父娘のようにも見えるほど。

実は劉秀こと秀児が……。

人物紹介

・? 奉

字は不明である。陰麗華の叔父。南陽新野の豪族で、劉秀の姉婿。? 農の甥。姪の麗華とは、本物の親子のような関係。かなりの腕力の持ち主で、また、故郷南陽を愛する「南陽男児」である。劉秀こと秀児や、朱? こと茶柳とは昔からの知り合いで、友人関係である。そのため、秀児は自分よりもずっと年長の? 奉のことを呼び捨てにしている。

・劉元

劉秀こと秀児や劉伯升の次姉。? 農の妻で、現在、一男三女の母。秀児が幼い頃、伯升にいたずらされたりしたのを庇うなど、優しい



お姉さんだったようで、現在もそれは変わっていない模様。夫婦間、親子間の仲良しという、しっかりした女性である。

（劉秀の恋愛事情）

光武帝として有名な劉秀が、南陽の美少女、陰麗華に一目惚れした時、彼は二十代の若き日でしたが、一方の陰麗華は、まだ十三歳の少女でした（当時は早期早婚でしたが、今だと、いろいろと問題が……）。そして、劉秀が陰麗華と結婚したのは、劉秀が二十九歳くらいで、麗華が十九歳の時でした。

ちなみに、人物紹介の所にて、麗華は父を早く失っていて、父の話をするだけで泣きだしたと言いましたが、これは正史の話です。劉秀も幼い時に父が早世しているため、どうやら話がよくあったと見えます。一方、麗華は馱洒落や冗談が嫌いで、夫の劉秀が、それが大好きだったせいについていけなかったと、史書に書かれています。「名君・名皇后の最高の夫婦なのに、奥さんは馱洒落が嫌いでした」と、歴史書に書かれる皇帝も珍しいでしょう。

ちなみに、劉秀も陰麗華も父を早く亡くしていますが、後に陰麗華のライバルとして登場する美女・郭聖通も、父親を早くに亡くした女性です。劉秀は、なぜか、父親を早く亡くした女性と縁がありません。

ちなみに、劉秀の子どもは男女合わせてかなりの数に上っています。高祖・劉邦が淫乱な無節操漢であったのに対し、劉秀の場合は、その子供たちのほとんどが、麗華、あるいは聖通が産んだ子供で、名前が残っている限りは、唯一、三男の楚王・劉英だけが別（母親は許氏）です。

これを見ると、劉秀は高祖みたいな無節操漢ではなく、奥さん一筋だったのではないかと思います。（高祖の奥さんと言えば、あの「呂后」です）

個人的には、天下を治めることのできる人間は、家庭内を治めてからでないと思えないものではないかと思えます。

## 第十章 新野の美少女、陰麗華（前書き）

やっと更新できました。

遅れてしまいました、読者の方々には、本当に申し訳ございません。  
今回は、ギャグ中心（？）です。  
それでは、どうぞ！

## 第十章 新野の美少女、陰麗華

修たちが新野にたどり着いた頃。

ここは都・長安の宮殿、寿成室（\*）。

つい十数年前まで、未央宮ひめいの名で呼ばれていた壮大なる宮殿の中に、大司馬・莊尤は自らの主と掲見していた。

むろん、秀兎をはじめ、各地から持ちこまれた問題について報せるためである。

「なに？ それは、いったいどういうことだ？」

掲見の間に、しわがれた声が響き渡った。莊尤はその声の持ち主に向かつて、儀礼通りに頭を下げ、両手を前に掲げながら報告を続けた。

「はっ、陛下。恐れながら、臣、尤は申し上げます。各地の豪族たちより、悪質な役人どもの横暴に対しての苦情の声が上がっております。報告によりますれば、役人どもは租賦を取り立てるに当たって、陛下がお定めになられた規定の量以上に取り立て、規定の量を国に納めた後、残りを自らの懐の中に入れていたとのこと。そればかりか、先年の匈奴遠征のための物資収集にかこつけ、各地で牛馬をさらい、さらには小作人から壮丁のみならず、女子供を連れ去って我が物とし、あるいは奴婢として売り飛ばしているという蛮行も報告されています。陛下。これらの役人どもの行為は、いずれも陛下の御威光を汚す行為であり、このまま放置するわけにはまい

りませぬ。よつて、臣、尤は一刻も早く、これら役人どもの不正を取り締まっていただけるよう、陛下に申し上げる次第です」

そう言つて莊尤は頭を深々と下げた。

「莊尤、頭を上げい」

再びしわがれた声が辺りに響き渡つた。莊尤はその声を聞くと、

「はっ」

と、返事をして、頭を上げた。

「よくぞ、報告をしてくれた。朕はうれしく思つぞ」

「もったいなきお言葉にございます」

「さて、役人どもが不正を起こしているとのことだが……」

しわがれた声の持ち主が、再度口を開いた。どうやら、報告にあつた役人たちへの対策の方法が、決まつたようである。

「朕の名を傘に着て、横暴を働くとは、言語道断！ 今後、そうしたことは一切できないようにする！」

「はっ！ しかして、どのように致しますれば……」

「なに。役人どもが不正を働かぬように、今後からは、朕の信任する者に、役人たちの働きぶりを監察させ、逐一報告させるわ！ これで、役人どもも、朕のため、この国のために、きちんと仕事をし

てくれるであろう」

「はっ……」

主君からの言葉を聞き、莊尤はやや低い声で頭を垂れた。彼女は、己が主君が、根っからの悪人ではないことを再確認することができたと同時に、一抹の不安を抱いたのである。

たしかに、役人どもが不正を働かないかを監察させる必要はある。そのための人間を派遣すること自体は、決して間違いではない。しかし、実際にそれだけで上手くいくのであろうか。第一、監察する人間も、結局は「役人」なのである。

そもそも、役人たちがそのような不正を行うようになったのは、「国の威信」をかけた、別に行わなくてもよい「外征」が何度も行われ、そのための物資収集を役人どもに任せたからである。これでは、付け入るなという方が無理である。

(どうも腑に落ちぬ……)

莊尤はそう思いつつも、

「それでは、仰せのとおりにいたします、陛下。私、臣、尤も、微力ながら全力を尽くさせていただきます」

と、答え、退出するしかなかった。今をときめく大司馬である彼女の言葉を以てしても、この宮殿に居座る「主君」は大変癡が強く、その制御は、歯止めが効かないからだ。

なにはともあれ、翌日、曲がりなりにも不正役人を取り締まる勅

令が出ることになったのであった。

\*

新野の？ 晨邸。

先日の迷子少女「麗」改め、陰麗華との思わぬ再会を果たした後、修たちは再び客間で団欒としていた。

もっとも、先ほどと違い、一人の美少女と、「その叔父さん」が新たに加わっていたが。

だが、麗華と？ 奉が客間に入ってきて、別に、大した変りはない。

どうやら、いつものことらしく、二人とも？ 晨一家の中に、自然に溶け込んでいるのである。

この突然の来客は、決して一家の団欒を乱すことはなく、むしろ、よりほんわかとした空気を作りだしたようである。

少なくとも修はそう実感していた。

(それにしても……)

彼はふと、思った。

（宛でも思ったけど、この麗うつくって娘。なんか、見ていると、やけに顔が熱くなってくるような……）

実際、宛城の時と同様、彼の顔は、やや赤みを帯びていたのである。

無理もない。なにしろ、彼の目の前にいる美少女、陰麗華は、それほどまでに可愛いのである。

修は決して年下好みなわけではないし、むしろ唐変木な所もあって、女性の善し悪しなどわからない方である。この世界に飛ばされてきて、秀児を始めとする何人かと、やっと話せるようになっただけで、未だに恋心というものを、ほとんど知らないのだ。（先日の旅籠の風呂の件は別にして）

だが、現に目の前の美少女は、そんな修さえも顔を赤くするほどの愛らしさであった。

さらりと流れる、長くて綺麗な黒髪。ふんわりとした絹の服の似合う、傷一つない肌。そして、ぱっちりとした、濁りなき黒い瞳。

どこからどう見ても、少女は可愛い人形が生きているかのごとくである。いや、むしろ人形の方がこの美少女に似て可愛いのである。うか？

そんな女の子を見て、おかしくなるなという方が無理というものである。

そんなわけで、修はついすっかり見とれてしまったのである。

(ダメだ。このままだと、秀児たちに変人扱いされる……)

なんとか正気を保った彼は、他の事で気を紛らわそうと考えた。

そこで、横にいる秀児の方を向いたのである。彼女と話すことで、いくらか気分を転換しようと思ったのだ。

「なあ、秀児……?」

そして、横に振り向いたとき、彼は見た。

隣に座っている「同居人」が、今まで以上に、赤面しているのを。

「あれ?」

修は一瞬、我が目を疑った。なぜなら、彼の隣に座っている、蒼髪と同年代の少女は、これまでに見たことがないほど、真っ赤な形相を呈していたのだ。

見ていておもしろいほどである。なにしろ、修の世界にある、「交差点の信号機」以上に、その色違いがはっきりとわかるからだ。

「おい、秀児……?」

修は心配になった。なにしろ、秀児の頭から湯気が昇るのではないかと思うほど、彼女の顔は真っ赤なのである。放っておけば、噴火するのではないか。そう思っても過言ではないほどだ。とにかく、



異常であることには違いない。

心配になって声をかけてみたのだが、どういうわけか、秀児からの返答はない。彼女は、ただ真正面を向いたまま、真っ赤な表情で固まっていたのである。

「おい、秀児！」

見るに耐えかねて、修は少し声を大きくしてみた。だが、それでも秀児は反応しなかった。

おもむろに、彼女の目の前で、手を振ってみたが、まったく無反応だった。いったい、何が彼女をここまでさせたのであろうか？

(ダメだ、こりゃ……)

修がそう思った時だった。

「劉三公子？」

ふと、麗華が話しかけてきたのである。すると、不思議なことが起こった。

「え！？ は、はい!？」

なんと、ここにきて、秀児の意識が戻ったのである。もっとも、顔が真っ赤なのは戻っていなかったが。

「な、なにかな、麗ちゃん？」

相変わらずの真つ赤な表情で、秀児が答えた。そんな彼女の顔をまじまじと見ながら、麗華が言葉を紡いだ？

「大丈夫ですか？ お顔、凄く真つ赤ですわよ？」

そう言って、秀児の方に近づいたのである。どうやら、本気で心配の様である。

だが、それがさらに、火に油を注ぐことになった。

「え、そ、そうかな？ アハハハ！」

麗華がにじり寄ったとたん、秀児は、これ以上赤くなるのかというくらいになったのである。冗談抜きで、本当に湯気が噴き出しそうである。

「お、おい。秀児。お前、熱が出てるんじゃない……？」

修は本気で心配になって、その声をかけた。すると、麗華もそれに同調したのか、

「あら、大変ですわ」

と、言つと、さらに秀児に近づいたのである。そして、次の瞬間、

「どれ、私が計って差し上げますわ」

の一言と同時に、麗華は自分のおでこを、秀児のそれに重ね合わせたのである。

修は知る由もなかったが、これがとどめとなった。

次の瞬間、秀児は、ばたりと、後ろに倒れたのであった。

「お、おい、秀児!？」

「劉三公子!？」

どうして秀児が倒れたのかわからない二人は、大混乱に陥った。そして、二人して、懸命に秀児を揺さぶったのである。

『大丈夫か(ですか)!？』

? 晨邸周辺に、他人を心配する大声が響き渡った。

もっとも、修と麗華以外の人間は、事情を知っていたため、苦笑していただけだったが。

それはともかく、秀児が意識を取り戻すまでには、次の日の朝を待たなければならなかった。

\*

「ぶっ、やれやれ……」

倒れてしまった秀児を寝かしつけた後、修は溜め息をつきながら客間に戻った。

「秀児のヤツ、風邪なら風邪だって言えばいいのに……」

そう呟きながら、彼は邸の庭の方に足を運んだ。秀児を布団まで運んだあと、皆が庭の方に行ったからである。修が庭先に着くと、ちようど？ 農一家が茶柳たちを加えて、団欒といるところであった。

（しかし、本当に明るいや家だな）

修は思った。ちようど目の前では、？ 農、劉元夫妻が、茶柳も加えて、我が子たちと遊んでいるところだった。見ている、ほのぼのとする光景である。事実、来歎、？ 奉の二人は、それを微笑まじげに見ていた。

（俺も、いずれ、？ 農さんみたいなお父さんになるのかな？）

修がふと、そう思った時だった。

「修さん」

すぐ隣から、可愛らしい声が聞こえた。咄嗟に振り向いて見ると、そこには、やはりあの黒髪美少女がいた。

「あ、えつと……、麗ちゃん……、でいいかな？」

修は戸惑いながらも、そう聞いてみた。すると、麗華は、微笑みながら、

「いいですわよ」

と、優しい声で答えた。

「それにしても、劉三公子、すごい熱でしたわ。大丈夫なんですよか？」

麗華はそう言った。本当に心配そうな表情である。無理もない。なにしろ、秀児は彼女の目の前で、突然倒れたのである。もつとも、倒れた原因が、麗華自身にあるということに、彼女はまったく気づいていなかったが。

「多分、大丈夫、と思うよ？」

修が答えた。彼もまた、秀児が倒れた原因など知らないのだが、少なくとも、一晩寝れば回復するだろうくらいに考えていた。もし、秀児の命に関わることならば、この家の人たちが、秀児を放置して遊ぶわけがないのだ。

「そうですね。劉三公子のことですから、すぐに元気になられますわね」

そう言うと、麗華こと麗は、今度は庭で遊んでいる、？晨一家の方に目を向けた。余談だが、？晨は麗にとって、「大叔父さん」に当たる。

「皆さん、楽しそうですわね」

麗が呟いた。現に、三人の女の子たちははしゃぎまわっており、

父親たる？ 晨は、自分の娘たちを順番に、木と同じくらいの高さまで持ち上げてあげるなど、それはそれは、楽しそうである。

「うん、本当だな。みんな、すつごく喜んでるし。？ 晨さん、いいお父さんだな」

修は微笑ましげにそう言った。そして、話を続けようと、ふと思いついたことを口にした。

「麗ちゃんのお父さんって、どんな人？ ？ 晨さんみたいな優しい人？ それとも、？ 奉さんみたいな強い人？」

何気なく思ったので、そう聞いたのである。決して悪気はなかった。なにしろ、相手の事を興味本位で、もっと知りたかったのである。少なくとも、修はそう思っていた。

だが、これが思わぬ反応を呼ぶことになった。

「私の、お父様、ですか？」

不意に、麗の声が小さくなった。

修は、「おや？」と思った。

父親がどんな人かを聞いた途端に、麗は声を潜めたのである。

（あれ？ 俺、なんか聞いてはいけないこと聞いたかな？）

修が嫌な予感を覚えたときだった。

「私、お父様のことは、よく覚えておりませんの」

「えっ？ どういう……」

言おうとして、修は流石に戦慄した。

(まさか……？)

と、思ったのである。

すると、麗がそのまさかを口にした。

「私のお父様は、私がまだ小さい時に、亡くなられましたの……」

それを聞いて、修の胸の内は、罪悪感に包まれた。思ってもいなかったことはいえ、タブーに触れたからである。

「じ、ごめん！」

咄嗟に頭を下げた。すると、麗は可愛らしげに、しかし、どこか悲しさを含んだ表情で言葉を返した。

「大丈夫ですわ。私には、お母様や、？奉叔父様、それに、識しお兄様や、弟の興こうもいますから……」

だから、ちっともさみしくありませんわ、と、言わんとしていることは、修にもよくわかった。なにしろ、言っているうちに、麗の目が、潤んできたのである。

いまにも堤防が決壊するかのごとくである。いや、もう時間の問

題であった。

「お兄様曰く、『真面目でいい人』だったみたいですね。私は憶えていませんけれど……」

そう言った瞬間、とつとつ、その可愛らしげに開いた目から、一筋の涙が流れ落ちたのであった。

「あら、おかしいですね。やけにしょっぱい水が……?」

それを見た修は、なぜか自分まで泣きたくなった。なにしろ、目の前の美少女を見ると、自然とそうなってしまふのである。

「もう、いい……よ……」

我慢できず、修は呟いた

「はい?」

「もっいいよ!」

呟くどころか、つい、声を荒げてしまった。

「もう、無理してまで話さなくていいから!」

今にも泣きそうな声で、修は麗の話を止めようとした。

「あら、どうしてですか? 私、もっといっぱい、家のこととかお話して差し上げますのに」



首を傾げる麗。もちろん、その目から、流れるものが流れ出たままである。それを見ると、修はますます叫ばずにはいられなかった。

「もういいってば！ 麗ちゃん、本当に親孝行な子なんだね！ わかるよ！ もう、わかったから！」

「あら、そうなんですの？ どうして皆さん、いつも私のことを『親孝行』と言うのでしょうか？ 不思議ですわ」

自分でどれだけ涙を垂れ流しているかを知らないまま、キョトンと首を傾げる少女・陰麗華。恐るべしである。

その後、修はこの黒髪美少女の目から涙が出るのを止めるのに、大変苦労する羽目に陥ったのであった。

その光景を、麗の叔父たる？奉と、来歙の二人が見ていた。

来歙は、修が慌てているのを心配して、

「おい、？奉。あれ……」

と、手で示しながら言ったが、？奉は首を横に振りながら言った。

「放つとけ。ああなったら、俺でも手が付けられねえ」

結局、麗が泣きやんだのは、夕方になってからの話であった。

その後については、特筆すべきことはない。修たち一行は、？農邸にて一晩泊った後、次の日の朝、春陵郷へと向けて、出発して言った。彼らが春陵郷へと帰ったのは、出発して以来、実に約半月ぶ

りである。

こうして、修や秀児は、半月ぶりに劉伯升と再会を果たし、またいつもの畑仕事生活に戻るようになったのであった。

\*

修たちが？晨邸を発った日の事である。

修たち一行を見送った後、麗は？奉、茶柳の二人の付き添いの下、そんなに遠くない所にある実家へと帰ろうとした。

その途中の事であった。

「あら、あれはなんでしよう？」

疑問を浮かべながら、麗は前の方を指差した。

見れば、彼女たちの前方では、人に乗せた四騎の馬が、何かから逃げるようにして走り去っていくところだったのである。

更によく見れば、その四騎の後ろから、役人らしき恰好をした男に乗せた馬が二騎、ぴったりとくっついたまま、後を追っているのが見えたのである。

「ははあ。さては馬泥棒だな？」

？奉が口を挟んだ。

「泥棒さん、ですか？ いけませんわ」

「？奉さん！ 捕まえた方がいいのでは！？」

相変わらずおっとりとした麗を余所に、茶柳が詰め寄ったが、？  
奉は笑い飛ばした。

「無茶言つな！ ここから徒歩で、馬に追いつけるか！？」

確かにその通りであった。どう考えても、ここから走って追いつけるわけがないのである。

「ま、こういう仕方ねえのはお役人に任せて、俺たちは早く帰った方が、身のためってもんだ」

？奉がそう言ったので、一行はやむを得ず、帰路についたのであった。

\*

一方の、馬泥棒騒ぎの現場である。

「待て！」

役人らしき男二人が、自らの馬に鞭をくれて、目の前の四騎を追いかけていた。

「ひいい!？」

「おら、もつと速く走れ!!！」

「もつと早くなんだな！」

逃走中の四騎のうち、三騎には、それぞれ体つきの異なる男たちが乗っていたが、三人とも、涙や鼻水をたらし、とにかく無様な醜体をさらしながら、懸命に馬を飛ばしていた。

だが、無理をしすぎたせいか、馬の速度は見る見るうちに落ちていく。このままでは、追いつかれることは明白であった。

「さあ、観念しやがれ！」

あと少しだと思った役人が、声を荒げて言ったときであった。

突然、盗まれた四騎のうちの、一番前を走っていた一騎が、その歩みを止めたのである。そればかりか、その一騎は馬首を翻すと、何を思ったのか、役人たちの方へと向けて駆けだしたのであった。

「なっ、おい!？」

「呉亭長！？」

仲間三人が驚くのを余所に、赤い髪の若き少女を乗せた、その一騎は、来た道を引き返し始めたのであった。

これには、追跡していた役人たちも度肝を抜かれたのである。

その一瞬が、命取りとなった。

「ぐわ！？」

役人の一人が、突然落馬した。引き返してきた赤髪の少女から、馬鞭の一撃を喰らったのである。頭上から振り下ろされた鞭の一撃をまともに食らい、落馬したのだ。

「お、おのれ！？」

もう一人の役人が、馬上の少女に向かって鞭を振り下ろしたが、その少女は、左手を上げると、その鞭を直接掴んだのである。

「なっ、バカな！？」

役人は己の目を疑った。普通、振り下ろされた鞭の一撃を、片手で受け止めることなどできるわけがない。ましてや、少女なのである。

「ば、化け物め！？」

役人がそう叫んだ直後であった。

「……うるさい……」

赤髪の少女は、誰にも聞き取れない声で、そう呟くと、反撃に移った。

次の瞬間、信じられない光景が繰り広げられた。

「うおわああ!?!」

役人は悲鳴を上げながら、宙を舞った。少女は左手で相手の鞭を受け止めたまま、その相手の腕を右手で掴むと、そのままぶん投げたのである。

こうなってはなすすべもなく、投げられた役人は、道のと真ん中に叩きつけられ、意識を手放した。

それを見届けると、一度馬を降りた。そして、役人たちが乗っていた二頭の馬を、そのまま自分が乗っていた馬の方へと連れて行ったのである。

赤髪の少女は二頭の馬の頭を一回ずつ撫でてあげると、今度は自分の乗っている馬の横に並べ、三頭ともに、縄で繋いだ。そして、再び馬にまたがると、自分が乗る馬が、他の二頭を引っ張る形で、仲間が待っている方へと引き返したのである。

「す、すげえ……」

「すごいですが、アキ……」

「さ、さすが呉亭長なんだな……」

仲間でさえ、言葉を失っていたが、少女はそんなことなど、おかまいのないようである。

「いくよ……」

仲間に追いつくやいなや、少女は聞き取りにくい声で、そう言った。

「え!？」

「行くんですかい!？」

「待つてほしいんだな!」

慌てて後を追いかける三人組。そんな彼らを余所に、少女は馬を走らせた。

「ちよつと、呉亭長! 行くつて、いったい、どこに行くんですか!」

三人組のうち、一番のつぽな男が、慌てて追いかけながら、声を張り上げた。

すると、赤髪の少女は、やや長めの前髪で隠れた、誰にもつかがい知ることのできない表情のまま、相変わらずの小さい声で、目的地を言った。

「北の方……」

本当にそれだけであつた。

結局、この「馬泥棒騒動」は、「犯人逃亡・行方不明」として、うやむやになつたのであつた。

\* (注)

・寿成室

都・長安にある宮殿で、かつて、前漢の名宰相、蕭何が高祖・劉邦のために立てた「未央宮<sup>ひわいききゆう</sup>」。蕭何曰く、「新たに作る必要がないように」建てられた宮殿は、完成から二百年以上たった当時も健在であつた。しかし、改名マニアの王莽は、帝位に就くやいなや、「未央宮」を「寿成室」と改名してしまつた。



## 第十章 新野の美少女、陰麗華（後書き）

・「呉亭長」と呼ばれた少女

馬泥棒をしたグループの筆頭と思しき少女。姓は「呉」。「亭長」は地方の下級役人の役職名。赤い髪が特徴で、十代後半と思われる。馬の扱いに長け、しかもかなりの力自慢である。反面、前髪に隠れた表情はうかがいにくく、しかも、かなりの口下手とみられる。

間章其の二 陸に上がる海賊たち、山を降りる山賊たち（前書き）

ようやく更新できました！

今回は、史実を元にした、世の中の移り変わりを描きました。

正直、恋姫らしさは少ないですが、それでもよいというのならば、  
どうぞ、お楽しみください！

## 間章其の二 陸に上がる海賊たち、山を降りる山賊たち

修たちが春陵郷に帰りついてから一週間。

現在、修は劉嘉邸の客間にて、秀児、春萌<sup>はるも</sup>、来歙たちとともにうな垂れていた。

空の食器や酒瓶、食べ残しなどで、ひどく散らかった客間にいる全員が、がっかりとした表情で、その場に佇んでいたのである。

「畜生！」

不意に来歙が叫んだ。その表情は、普段、温厚な彼には似つかわしくないほど強張っていて、心底から怒っていることを伺わせた。

「俺たちや、いったい、何のために、長安まで行ったんだ!？」

怒り任せに言うやいなや、来歙は近くに落ちていた酒瓶を引っ掴むと、その中に残っていた中身を、一気に飲み干した。それで少しは気を紛らわそうと思ったようだ。

しかし、怒りに支配された状態で飲んだ酒は、飲んだ人間を、ますます苛立たせる作用があるらしい。

中身を全部飲み干すと、来歙は静まるどころか、ますます顔を真っ赤にした。そして、その勢いのまま、右手に持った酒瓶を、床に勢いよく叩きつけた。酒瓶は大音響を立てて砕け散り、破片があちらこちらに飛び散る。それでも治まらず、来歙はその場に佇んだまま、肩で息をしていた。

「歎義兄様」

見るに耐えかねたのか、来歎の義妹である劉嘉こと春萌が注意した。

「お気持ちわかりますが、これ以上、私の家の物を壊すようでしたら、いくら歎義兄様でも出て行ってもらいますよ」

「あ、ああ。すまねえ、春萌……」

義妹の言葉で、なんとか正気を保てた来歎は、酒で痛む頭を右手で押さえながら、その場でうな垂れた。

「いったい彼らはどうして、これほどまでに怒り心頭なのかだろうか。」

それを語るには、つい先ほど、この邸で行われた酒宴に話を戻さなければならぬ。

秀児たちが春陵侯本家のために、都・長安まで訴えに行ったことが功を奏したのか、先日、皇帝・王莽よりの「お触れ」が出たのである。

その内容は、「不正役人を取り締まるために、皇帝自らが信任する人間を監察官として各地に派遣する」というものであった。

そのお触れが出た時、春陵郷周辺の豪族・士民たちは、

「これで、役人どもに苦しめられることがなくなるぞ」

と、拍手喝采したものである。

春萌は、

「秀ちゃんの賜物ね」

と、秀児のことを褒めてくれたし、来歙も、

「わざわざ長安まで言った甲斐があつたつてもんだ」

と、喜んでいたのだ。秀児自身、

「さっすが、莊大司馬さまだ！」

と、嬉しそうに言っていたし、そんな彼女たちを見て、修も我が事のように嬉しく思っていたのである。

もつとも、劉伯升一人だけは、何故か険しい表情をしていたのだが。

なにはともあれ、さっそく新任の監察官がやってくるというのである。そのため、劉嘉邸にて歓迎のための宴を開くことにしたのだ。

春陵郷の劉氏のみならず、周辺の中小豪族たちや、村の有力者・士民たちもそろっての、歓迎の宴になるはずであった。

ところが、劉嘉邸に現れた、肥満体の監察官は、宴の席に着くやいなや、信じられない事を口にしたのである。

「不正を行う役人どもは、しっかりと取り締まりましょう。ですから、皆さま。そのための『お礼』は、たっぷりいただきますよ?」

それを聞いた瞬間、席に就いていた人びとは、皆、言葉を失った。当たり前である。「賄賂を寄せせ」と言われたことにほかならないからだ。

「どういうことですか!? 貴方は、役人が不正を行わないよう、監視するために来られたのでしょうか!? 話が違います!」

春萌が抗議したが、その監察官は、貪欲そうな表情丸出しの、不気味な笑みを浮かべながら、こう言った。

「おやおや、いいのですか? 私を怒らせて。もし、そんなことをすれば、皇帝陛下に、あなた方のあることないことを報告させていただきますよ? そうなれば、どうなるかわかっておいででしょうか?」

言うまでもないことである。そんなことをされれば、最悪、「お家取りつぶし」にもなりかねない。

「それがいやなら、黙って、私に従うのです。ああ、ご心配なく。不正を行う役人は、しっかりと取り締まりますから」

そう言うと、その監察官は、連れてきた仲間の役人たちとともに、食いたいだけ食い、飲みたいだけ飲むと、下品な笑みを浮かべながら帰って行った。去り際に、

「またお伺い致しますよ」

と、ねっとりとした、いやらしい声を残して。

皆、それを呆然と見送った。結局のところ、皆を苛める「役人」が、また一人増えただけだったのである。

期待しながら劉嘉邸に集っていた人々は、宴が終わるや、皆、カンカンに怒って帰って行った。期待を裏切られたのであるから、当然と言えば、当然であろう。

もつとも、伯升一人だけが、怒りもせず、笑いもせず、珍しいほど、おとなしく帰ったのだが。

そんなわけで、最後まで残った四人だけで、愚痴を言い合っていたのであった。

「まったく、俺たちの苦勞は、なんだったんだ。これじゃ、何のために秀児が訴えに行っただんだか……」

溜め息をつきながら、修が言った。それを聞いた秀児が、自身の右手を修の左肩に、ポンと乗せた。そして、苦笑いの表情を浮かべて言った。

「気にしないほうがいいよ。あれは、せつかくの楽しい旅行だったんだし」

(バカ。無理しやがって……)

もつとも気にするべき秀児が、それを押し殺してまで、自分に優しげに声をかけてくれるのを見て、修は悔しさを覚えるのであった。

\*

月日は流れ、一か月後。

ここは、徐州琅邪国海曲県の海上にある離れ小島。

海上の無法者たる海賊以外、誰人たりとも住みつかない小島にて、一人の老女のための葬儀が、厳かに行われていた。

お世辞にも立派とは言えない、それでも、石作りの粗末な墓碑だけはなんとか備えることのできた墓の前に、数十人ほどの男たちが集まり、皆、亡き老女のために黙禱を捧げていた。

「あばよ。呂のおつかさん。こんな粗末な墓ですまねえが、しっかり休んでくれよな」

男たちの先頭に立った、ひよろりとした体格の男が、目を瞑りながら、小さい声でそう言った。

彼の名は徐次子。先ほど墓に葬られた老女・呂母の邸に出入りしていた、海曲県の悪少年の首領格である。

そのひよろりとした体つきとは正反対に、相撲や撃剣に強く、「猛虎」のあだ名で呼ばれている彼は、先日起こった「呂母の乱」



に加担し、呂母の右腕として、悪少年たちや海賊たちを集めて、呂母の復讐劇に一役買ったのである。

呂母の息子の仇である梟宰の杜先を殺し、仇打ちを果たしてから既に三カ月。彼らが「將軍」と仰いでいた老女・呂母は、海賊の隠れ家である離れ小島にて、徐次子以下、海曲の悪少年たちに看取られて、静かに息を引き取った。

彼女の世話になった悪少年及び、海賊の幹部たちは、粗末ながらも墓を作り、彼女の亡骸を丁寧に葬ったのである。

「ありがとよ、おつかさん。今まで本当に、世話になったぜ……」

「あの世で坊ちゃんと楽しくやってくださいませ……」

「俺たちのことは、もう何も気にしなくて、いいんだな……」

海の男たちは、冷たい土の下の老女に、思い思いに別れを告げ、その後、厳かな葬式は終わりを告げた。

しかし、悲しんでばかりではいけない。亡き呂母はともかく、葬儀の参列者たる彼らは、明日、どう生きるかを考えなくてはいけないからだ。

葬儀が終わって間もなく、徐次子以下、「呂母の海賊集団」の幹部たちは、亡き呂母の墓から、そう離れていない場所に集まって、会議を始めた。

「猛虎の兄貴。これからどうしやす？」

さつそく、幹部の一人が口を開いた。

「呂のおっかさんは、坊っちゃんのお打ちを果たせたからこれでいいかもしれませんが、残された俺たちや、どうすりゃいいんですか？」

男はそう言ったのである。確かに彼の言う通りであった。呂母が海に出る前、海曲県沿岸の海賊の数は、せいぜい数百人程度に過ぎず、それも日頃は漁師として暮らし、食べ物不足すると、沿岸部の街や村を襲うという程度のものであった。

しかし、呂母が悪少年たちを率いて海に出て、人数を集めるために、その辺のゴロツキと化した逃亡農民や漁民を集めているうちに、その人数は、鰻登りに増加したのである。

そして、三カ月前に海曲県の役所を襲った時点で、呂母の海賊集団は、すでに一万人を超えていたのだ。

ここまでの大集団になってしまえば、海賊稼業で食っていくことは不可能である。その上、海賊が襲うべき「獲物」である、沿岸部の街や村が、ひどく荒れ果てている状態なのだ。「獲物」がないのである。

しかし、だからと言って、ここで解散するわけにもいかなかった。

そもそも、県の県宰を襲って殺してしまった以上、朝廷から追われる立場なのである。あるいは恩赦好きの王莽のことだから、仮にこの事に対しても恩赦を出し、その罪を許してくれたとしても、彼らには帰るべき土地も、耕すべき畑もないのである。そもそも、彼らの大半は、役人たちによる執拗な取り立てに耐えられず、土地を

棄てて逃げてきた流民なのだ。朝廷が対策らしい対策を、何も施してくれない以上、彼らは元の純朴な農民に戻ることはできないのである。

こうなつた以上、できることは一つである。

「皆、聞いてくれ！」

呂母の後を継いで、新首領格となつたばかりの徐次子が、皆に呼び掛けた。

「俺たちはここまで来てしまつた以上、もう引き返せねえ。かと言つて、今まで通り、海賊として暮らしていくことも不可能だ。かくなる上は、一つ！」

皆が息を呑む中、徐次子は声を張り上げて、誰にでもわかる一言を口にした。

「陸おかに上あがろう！」

それを聞いた海賊の幹部たちは、誰もが一瞬、黙りこくつた。しかし、それも一瞬であつた。

「なるほど！」

「そいつあ、いい考えだ！」

「俺たちは一万！ だから、これからは海賊なんて、せこせこしたことをやらずに、どでかい城を襲つて、その食料を皆で分けちまえばいいってことか！」

「よし、俺は乗った！」

「俺も徐の兄貴に賛成だ！」

「皆、俺達あ、猛虎の兄貴に着いて行くぜ！ 異議のあるモンはいねえよな！？」

『おう、異議なし！！』

こうして、呂母が息子の仇打ちのために集めた海賊集団一万人は、亡き呂母の意向とは関係なしに、陸地へと上がり、そこで流賊集団となつて、徐州の各地をさまようことになつたのであつた。

\*

それからさらに一カ月後。

徐次子率いる流賊集団は、疲弊していた。

無理もないことである。なにしろ、ついこの間まで沿岸部で海賊をやっていたのに、いきなり陸に上がり、慣れない城攻めなどを行ったからである。それはまさしく、陸に上がった河童と言つてよいほどであつた。

とある県城を攻めた時には、その守りが思いのほか堅く、返り討ちに遭いそうだったので、撤退する羽目に追いやられた。またある県城を攻めた時は、なんとかその城を攻め落としたものの、そこにはろくに食料が残っていないかった。またある時は、これから攻めようと思った県城が、すでに別の流賊によって略奪され尽くされていたということもあった。どうやら、彼らの同業者はいくつもあるようであった。

「猛虎の兄貴。昨夜も数十人ほど逃げやしたぜ」

部下からの報告に、徐次子は溜め息をついた。流賊集団というものは、食えるとかわかっていれば、人が多く集まってくるものである。しかし、ひとたび食えないことがわかれば、脱走者が多くなり、ついには瓦解してしまうものでもあるのだ。かつての呂母海賊集団であるこの軍勢は、なんとか奇跡的に、一万人超の人数を保っているが、このまま食えない日が続けば、ずるずると瓦解してしまうことには違いない。

「上手くいかないものだな」

徐次子はそう言うと、ただちに幹部たちを招集し、対策を練るところにした。

「皆知っていると思うが、我が軍は食少なく、疲弊を極めている。よって、瓦解する前になんとかしなければならぬが、何か案のある者は？」

すると、一人の男がこう進言した。

「兄貴！ こうなつたら、どこか、他の流賊の連中に巻かれまじょうぜ！ 俺たちや、一万人もいるんでやすから、高く買ってもらえらと思いやすぜ！」

「なるほど、それはいい考えだ」

「しかし、兄貴！」

そこに、また別の男が口を挟んだ。

「なんだ？」

「それはいいと思うんですが、どこのどいつの下に身を寄せるおつもりですか？ 俺たちみたいな流賊連中なんて、星の数くらいあるみたいですよ！」

たしかにその通りである。この陸地には、小さくて数百人。大きくて万単位の流賊集団が、それこそ星の数くらい、存在しているのだ。だが、合流できるのは、一回だけである。

「よし。それなら、情報を集めさせよう。どこのどいつに売り込むかは、それから決める」

こうして徐次子たちは、各地に諜報員を送り、急いで情報を集めさせたのである。

数日経って、帰って来た諜報員たちは、各地の模様を報告した。

長江流域の会稽かいけいでは、瓜田儀かでんぎなる人物（瓜田が姓、名は儀）が率いる流賊集団があるとのことである。しかし、この瓜田儀は凶暴な

人物で、締め付けが厳しいとのことであつたため、徐次子たちは却下した。

次に、荊州当陽県の緑林山に、王匡、王鳳を首領とする「緑林軍」が存在することが報告された。南陽の馬武、潁川の王常や成丹といった豪傑を擁し、ついこの間には二万の官軍を撃破し、その勢力は五万を超えたという。

「だが、ダメだ。荊州なんて遠すぎる」

徐次子はそう言って、却下した。徐州の山東半島近辺から、一万人もの人間を率いて荊州まで行くなど、あまりに無謀すぎるのだ。

「ええい！ ほかに、もっといい情報はないのか!？」

徐次子が怒鳴り散らすと、また別の男が口を開いた。

「泰山たいざんの麓で、樊崇なる者が、一万近くの軍を率いて、派手に暴れまわっております」

「なに？ 詳しく話せ」

徐次子は促した。

「はい。なんでも、樊崇なる者が、泰山の麓に立てこもって、辺りを荒らしまわっているようです。最初は百人くらいで旗揚げしたのが、今や一万を超えたとか……」

「しかし、泰山といえば、古いにしえの天子が、封禪の儀を行った神聖なる山ではないか」

呂母の家に屯していた悪少年・徐次子は無学の徒であったが、それでも、泰山が神聖な山であることぐらいは知っていた。

「しかもそれ以前に、あそこは荒れ地ばかりで、ろくに食いものもないはずだ。どうしてわざわざ、そのような所で……」

馬鹿じゃないか、そいつは。と、徐次子は言いかけたところで、その言葉を呑みこんだ。

(いや、わざわざ、泰山などと言う恐れ多いところで、旗を上げるようなヤツだ。もしかしたら、とんでもない大物かもしれん)

ふと、そういう考えが、頭をよぎったのである。

(よし。一か八か、賭けてみよう)

そういう気になった徐次子は、

「いや、待てよ。泰山といえば、ここからあまり遠くないな。よし、ひとまずは、使者を出そう」

と、もつともなことを言って、幹部たちを納得させたのであった。

それから間もなく、徐次子率いる、「かつての呂母海賊集団」一行は、泰山の麓にて、樊崇なる人物が率いる流賊集団と合流したのであった。

もつとも、合流した側も、された側も、この後、自分たちの集団が、徐州はおろか、大陸中を震撼させる存在と化すなど、夢にも思



つていなかったが。

\*

こちらは荊州江夏郡当陽県にある緑林山。

徐次子たちが泰山へと向かっていた頃、緑林山では異変が起きていた。

「み……、水う……！」

「熱い！ 頭が熱い！」

「苦しい！ 誰か、助けてくれー！！！」

緑林山に巢食う盗賊集団「緑林軍」の軍中において、多くの人間が倒れていたのである。

ある者は吐き、ある者はのたうち回り、またある者は、死ぬまで地べたをはいずり回り、そして、その全員が、やがては息絶えていったのである。

ついこの間には、二万の官軍を壊滅させ、五万人もの大軍に膨れ上がった、無敵の緑林軍の戦士たちが、こうしてわけのわからない

苦しみに苛まれながら、次々と死んでいくのである。どうしてこのような事になったのであろうか。その原因は、疫病であった。

そもそも、この緑林山は元々、官憲から逃げてきた地元の流民数百人が、こつそりと暮らすための隠れ家だったのである。それなのに、雲杜の戦いで官軍を破った後、参加者が相次ぎ、いつの間にか緑林山の人口は五万人を超えてしまったのだ。しかし、彼らの壻うぐいすである緑林山は、五万人もの人間が集まって暮らせるような場所ではない。

当然のことだが、たちまちのうちに緑林山は不衛生となってしまうのである。そして、ついに疫病が発生してしまったのだ。しかも運の悪いことに、この疫病は、かなりの悪疫だった。五万人いた緑林軍は、すでに半数が死んでいたのである。このままでは全滅してしまうことは、誰が見てもわかることであった。

緑林軍の幹部たちは、急いで会議を開いた。

「知つての通りだが、我が軍は、悪疫が流行り、現に今もなお、倒れる者が続出しているぞ。どうすればよい？」

緑林軍の創始者の一人、王鳳が言った。

「誰か、いい案を持った者はいねえのか？」

もう一人の創始者である、王匡が、幹部連中全員を見回した。

「案もなにも、こついつ時は、さっさと山を降りるに限るであろう」

幹部の中にいた、長い銀髪の、妖美な雰囲気をする若い女が、や

や低めの声で言った。

「ああ。朱鮪しゅうすいの言うとおり、俺も同感だ」

口をはさんだのは、白髪混じりの頭をした、左目の目蓋の上に古傷のある男であった。

「このまま座して、死を待つなど、愚の骨頂というものだ」

「しかし、王顔卿おうがんけいどの。この難攻不落の緑林山を失うのは……」

あきらめきれなかったのか、幹部の一人が口を挟もうとしたが、途端に青ざめた。古傷男こと、王顔卿が、静かな声で、冷やかな一言を浴びせたためだ。

「ならば、貴様だけ残るか？」

「い、いえ!？」

「まあ、落ち着け。王常」

王鳳がそうつたしなめた。

「なに、冗談だ」

王顔卿改め、王常が、到底冗談には聞こえないような声色で言った。

「まあ、それはともかくだ。早いところ、山を降りようじゃねえか」

機転を利かせたのか、王匡が話を戻した。

「おい、馬武<sup>ばぶ</sup>。お前も異存はないな？」

彼はそう言っつて、幹部連中の後ろの方で、愛用の戟を片手に座り込み、空いているもう片方の手で酒瓶を傾けていた、くせのある黒髪くせのある黒髪の女の方を見た。

「あら？ 山を降りるですって？ 別に構いませんわよ」

「よし、決まりだ」

こうして、緑林軍の生き残りたちは、山を降りることにしたのである。

「しかし、全員で降りれば、官軍に目立つし、また悪疫が流行ったら、今度こそ全滅するぞ」

「なら、二手に分かれればよいではないか」

王鳳の疑問に答えたのは、銀髪の女、朱鮪であった。

「よし、ならば、そうしよう。それなら、どっちかが全滅しても、片方が生き残れるからな」

いい提案だと言わんばかりに、王鳳、王匡は賛成した。

そういつわけで、緑林軍の生き残りは、半分ずつに分かれて下山することになったのである。

官軍に見つからないよう、彼らは闇夜の中、持てるだけの武器や兵糧・輜重を携え、山を降りた。

二手に分かれた緑林軍のうち、王鳳、王匡、朱鮪、馬武を筆頭とした者たちは、「新市軍」と号し、南陽郡へと向かった。「新市」と称したのは、王鳳、王匡以下、配下の将兵たちに、新市県出身の者が多かったからである。

一方、王常、成丹、張せいたん、張ちやんじう？と言った者たちを筆頭としたもう片方の軍は、「下江軍」と号し、長江に沿って南郡へと向かった。「下江」とは、名前の通り、長江を下るという意味である。

緑林山を降りた者たちは、皆、一度は闇夜に浮かぶ、この山の方を振り返った。それに関しては、誰もが同じことであった。

しかし、何を思ったかについては、一人として共通するものはなかったのである。

（私は、こんな片田舎の山賊ではおさまらないぞ。近いうちになりあがってやる！　こんな所とは、おさらばだ！）

新市軍の銀髪の女、朱鮪はそう思いながら緑林山を見上げると、すぐに踵を返し、王匡たちの後を追った。

（あら、こうして私たちの住んでいた壻ひくを見上げるのも、またいいものですね。せめて、月でも出てれば、もう少しい味がしたのでしょうけど）

同じ新市軍の幹部でも、酒飲み女、馬武はそんなことを考えながら、見納めと言わんばかりに、また酒瓶を傾けたのである。

一方の下江軍では、その首領となつたばかりの男、王常が、自身の軍を背に、闇夜に浮かぶ緑林山を、強面の表情のまま、じっと見上げていた。

愛用の大剣を背負い、左腰に酒瓶を携えたまま、王常は表情一つ変えることなく、緑林山を見ていたが、やがて、踵を返すと、他の誰に言うでもない、小さな、しかし、それゆえに威厳のある声で一言だけ呟き、軍の方へと帰って行った。

「さらばだ、緑林」

\*

徐州で、そして荊州で、今、まさに世の中が大きく動き出そうと  
していた。

## 間章其の二 陸に上がる海賊たち、山を降りる山賊たち（後書き）

登場人物紹介

（徐州流民集団）

・徐次子じよじし

自らを「猛虎」と自称する悪少年（青年）。「呂母の乱」の首謀者、呂母の右腕的存在だった男。呂母の死後、一万人に膨れ上がった海賊集団を率いて陸地に上がり、流賊となっていたが、泰山の麓にいる樊崇なる人物の流賊軍と合流する。しかし、それが大陸中を震撼させる一大事件を引き起こすことになるなど、夢にも思っていない。

（緑林系下江軍）

・王常わうじょう

字は顔卿がんけい。豫州潁川郡舞陽県の人。盗賊とは思えないほど、冷静沉着で、謙虚な人物。王莽末期、弟の仇を討つため、江夏郡に逃亡。その後、王匡、王鳳たちの緑林軍に加わっていた。白髪混じりの髪だが、大剣を振るう力は全く衰えていない模様。緑林山の悪疫流行後は、「下江軍」の首領となる。

・成丹せいたん

下江軍の幹部の一人。王常と比較すると、小物臭のする男。

・張ちやう？  
ちやう

下江軍の幹部の一人。成丹同様、王常と比較すると小物臭のする男。

（恋姫紹介）

（緑林系新市軍）

・朱鮪しゆい

揚州淮楊郡の人。字は不明である。長い銀髪の美女。盗賊である緑林軍に身をやつしているが、盗賊とは思えないほどの知識の持ち主。どうやら、将来成り上がることを夢見ている模様。

・馬武<sup>Ma Wu</sup>

字は子張<sup>しちやう</sup>。荊州南陽郡湖陽県の人。クセのある黒髪の美女だが、酒好きの猛将。愛用の戟と、大きな酒瓶を常に携え、戦いながら飲み飲みながら戦うなど、限度を知らない。また、ずけずけともの言う性格のようだが、一方では、以外にも謙虚な一面があったりなかったり。

いかがでしたでしょうか？

今回はほぼ正史ルートなお話でした。

ただし、実際は、徐次子たちが樊崇に合流するのは、もっと以前のお話ですので、鵜呑みにしないようご注意ください。

ちなみに、個人的には王常は好きな男です。

ここでは、とにかくシブくてカッコいい男としてキャラ付けしました。

個人的なCVイメージは、石川英郎さんです。（FFXのアーロンさんみたいな）

今回初登場した朱鮪ですが、この人物なくして、光武帝・劉秀を語ることはできません。これから、どのような活躍をするかを、しかと見届けてください！

そして、馬武ですが、正史でも「酒好きの猛将で、言いたいことはずけずけと言う」と書かれているのですが、このキャラ、「うたわれ〇もの」のあのお姐さんに被りますよね（苦） うわー、またや



やこしいことに（苦笑）

しかし、皆さんが納得いくように、これからもしっかりと書いていきます！

さて、次回は再び春陵郷に舞台をかえたいと思います！

それでは、またお会いしましょう！

なお、余談ですが、「緑林軍」が登場して以降、中国では盗賊のことを「緑林」と呼ぶようになったそうです。つまり、緑林山の盗賊たちは、その後の盗賊の代名詞となったわけですね。

## 第十一章 劉伯升の企み（前書き）

ようやく更新できました！

今回のお話は、前半は泰山。後半は、春陵郷が舞台です！

更新を急ぎ、少し中途半端な所で終わっていますが、漫画で言う落ちみたいなものと思ってください。

それでは、どうぞ！

## 第十一章 劉伯升の企み

えんしゅたいざんぐん  
？州泰山郡にある泰山。

かつて、秦の始皇帝や、漢の武帝・劉徹といった歴代の皇帝たちが「封禅」の儀式を行ったことで有名な聖地である。

現在、その麓において、おおよそ二万人もの人間がひしめき合っていた。

そのうちの一万人は、始めからここにいた人間であり、残りの一万は、つい先ほど徐州からやって来たばかりの男たちであった。

その徐州勢を率いてやって来たばかりの新参者である徐次子ら、「旧呂母海賊団」の幹部たちは、現在、陣中を見て、啞然としていた。

「なんだ、これは？」

徐次子は息を呑んだ。

数日前、斥候から聞いた報告では、樊崇なる者が泰山近辺で大いに暴れ回っているとのことであり、それは頼もしいものであるかと期待していたのである。

ところが、実際に合流して、相手の陣中を見れば、それは予想をはるかに裏切るものであった。

泰山の麓にいる流賊集団は、自分たちと同じ一万人だと聞いていたのだが、実際に行ってみると、それは軍隊どころか、盜賊集団ともかけ離れたものであった。なにしろ、陣中には男だけでなく、年老いた老人や、赤ん坊を抱いた女性、さらには無邪気に遊び回る子どもたちまでもがいたのである。

それだけではない。軍中にいるのは人だけではなかった。

砂礫だらけの荒地の上には、牛や羊といった家畜が放し飼いにされていて、まだ幼い牧童たちが、家畜相手に戯れていたのである。

「猛虎の兄貴……」

一抹の不安を覚えたのか、徐州組の幹部の一人が口走ったが、徐次子は遮った。

「言うな。俺だって、何が何だか、わけがわからねえんだ……」

本当にその通りであった。

彼らの目に移るこの集団は、流賊というよりは、難民の集団に等しいものだった。

いったい、どういうことかと疑問に思った徐次子たちは、ひとまずは訳を聞こうと、この集団の首領である樊崇の下へと向かうことにした。

\*

「やあやあ、皆さん！ 泰山にようこそだべ！」

本陣の幕内にたどり着いた徐次子たちを待っていたのは、彼らをさらに脱力させる光景であった。

「一万人もの人たちを連れて、仲間に加わりてえって聞いたときにや、おらあ、感激したべ！」

田舎者丸出しで、いったいどこの生まれなのかわからない訛りで、元気いっぱい徐次子たちを歓迎する、ぼさぼさの短い黒髪のうちっぽけな少女。

「このどこの馬の骨かわからない少女こそ、「泰山難民集団の首領、樊宗はんすうだつたのである。」

(な、なんだ、コイツ……!?)

徐次子たち一行は呆然となった。一万人もの大集団を率いているというのだから、いったいどれだけ凄い人物かと期待して来てみれば、そこにいたのは、田舎者丸出しの、見るからに無学な少女だったのである。どこで拾ったのか、一人前にボロボロの革の鎧を身に着けてはいるが、それを除けば、その辺にいそうな子ども以外の何者でもなかった。

しかも、それだけではない。

「いやー、ホント、助かったっしょ。男手が少なくて、私たち、ちようど困ってたんだべ」

樊崇の隣にいる、同じような鎧を身にまとった、茶色の巻き髪のでこっぱち少女、逢安ほうあんが、やはりひどい訛りのある声でそう言った。

「せやなー、安ちゃん」

今度は、水色の髪を頭の両側でそれぞれお団子にした少女、徐宣じょせんが笑顔で言った。どこで拾ったのか、彼女は虫食いだらけの、ボロボロの「女性用儒服」を身にまとっていた。

「ウチらだけじゃこころもなかったし。でも、徐次子のおっちゃんが出来てくれたおかげで、万事すべて、解決やー！」

「せやせやー！」

相槌を打ったのは、紫色の髪をやはり頭の両側でお団子にした少女、楊音よういんであった。髪の色を除けば、徐宣と同じ格好であるため、あたかも双子であるかのように見えた。

「こんだけのおっちゃんたちが来てくれたんやさかい、ウチら、ほんま、無敵やわー！」

「はうう、おじ様たちが、こんなにたくさん……」

勝手に盛り上がる樊崇たちの後ろで、黄緑色の髪を後頭部でまとめ、馬の尾のように垂らした髪型の、やはりボロボロの「儒服」を身にまとった少女、董憲とうけんが縮こまっていた。恥ずかしいのか、彼女

は被っていた帽子で顔面を隠していたのである。

(なんなんだ、コイツら?)

徐次子は、混乱した。

本陣にいる、「幹部」なる者たちは、どこをどう見ても、子どもばかりだったのである。

しかも、その全員の様子を見れば、どうも軍隊を率いているという意識がないみたいであり、例えるなら、まるで子どもたちが「軍隊ごっこ」でもしているかのような有り様だったのである。

「兄貴、ど、どうしやす?」

冷や汗をかいた子分が震える声で聞いた。あたかも、徐次子に助けを求めているかのような声である。

「ま、まあ、待て」

徐次子はそう言って子分を落ちつけさせたが、内心、

(俺の方こそどうすればいいか聞きてえよ!)

と、思っていた。しかし、ここまで来た以上、なんとか話だけは着けなければならぬ。

「いやー、樊崇どの。この度は、我々を受け入れてくれて、まことに感謝の限りでござる」

ひとまず、悪少年・徐次子は、彼らしくない声で、堅苦しい挨拶をした。いつの世も、挨拶は重要である。

「そんなに堅苦しくしないでいいんだべ！ こっちだって、男手が増えて、本当に嬉しい限りってやつっしょ！」

挨拶を受けて、樊崇は笑いながらそう言った。その瞳はキラキラとしていて、本当に嬉しそうであった。

（ま、まあ。ある意味、噂以上に明快なヤツだな）

徐次子はそう思った。普通、組織の人数が増えれば、様々な問題が生じるのである。単なる数の問題ではなく、例えば、兵糧の問題一つにしたって、そう簡単に上手くいかないのだ。だから、組織の幹部と言うものは、常に胃が痛む思いに駆られるものである。それについては、徐次子自身がこの1、2カ月で体感してきたことである。

しかし、今日の前にいる少女には、そういったことで苦悩している様子は見られない。どうも彼女は、単純に人数が増えたことを喜んでいだけのようであった。

そんな様子を見て、徐次子は、樊崇のことを、一言でいえば「馬鹿正直」なヤツだと思ったのである。

「いやー、歓迎されて何より。しかし、樊崇どの」

作り笑いをしながらそう言うと、徐次子は先ほどから思っていた疑問を解き明かそうと、目の前の田舎少女に向けて一つ質問することにした。



「なんだべ？」

「先ほど、軍中を見て回ったが、あれはなんででしょうか？ 見たところ、女、子どもや年寄りまでいっぱいいるようですし、おまけに牛や羊が放し飼いにされているようですが？」

「ああ、あれ？」

答えてくれたのは、逢安だった。

「女の人たちや子どもたち、おじいちゃん、おばあちゃんたちは、皆、私たちの兵隊さんの家族の人たちだべ？ あと、牛や羊とかは、皆が持つてきたり、その辺から連れてきたものだから、皆で飼ってるんだべ」

「せやせや。お牛さんとかは、荷物運びに使えるし、羊さんとかは、毛とかとれるし」

「いざという時は、皆で食ってしもたらええんや。いろいろ役に立つやろ？」

途中から、ぴったりの呼吸で、徐宣と楊音が割り込んだ。

だが、徐次子は納得がいかなかった。

「いや、しかし。いざ戦いになった時、邪魔になるのでは？ いたい、ここではどのような『変法』を使っているの？」

彼はそう聞いたのである。「変法」というのは、およそ三百七十

年前の春秋戦国時代の秦に登場した政治家、商鞅（しやういやく）が行った政治改革のことだが、その中に、「什伍」と呼ばれるものがある。商鞅は戸籍制度を作り、民衆を五戸、または十戸ごとに一つに分け、それによって住人同士を監視させる防犯の仕組みを作ったのだが、後年、軍隊を編成するに当たって、この「什伍」を元にして部隊編成が行われたのである。五人ごとの部隊を束ねる部隊長を「伍長」、十人ごとの部隊を束ねる部隊長を「什長」というのはそのためであり、当時としては最もわかりやすいものであった。

いつしか、この編制のことを、「变法」と呼ぶようになっており、例え、どんなに無知な盗賊でも、このやり方に従って部隊作りを行う事が多かったのである。

徐次子が变法について聞いたのは、

（お前たちの軍は、女子供、老人も家畜もごっちゃになっているが、いざ戦争の時、どのような部隊編成を行っているのか？）

と、いうことを聞こうとしたことにほかならない。

ところが、樊崇たちから帰って来た返事は、またしても予想を裏切るものであった。

「『变法』？ なんだべ、それ？」

樊崇はわけのわからないという顔で、そう言ったのである。

「なあ、逢安。おめえ、なんか知つとるだべか？」

「ううん？ 私、全然知らないっしょ。宣ちゃんはなんか知つと

るだべか？」

「ああ！ 『変法』やる？ なんか昔、商鞅はんとかいう、えらい、おっちゃんを作った、難しい法やる？ まあ、ウチは詳しいこと、なーんも知らへんけどなー。音ちゃんはなんか知つとる？」

「あほう！ 宣ちゃんが知らんこと、ウチに聞いても、知つとるわけないやろ！？」

「ああ、せやな。あははは！！」

「はづづ……」

「ど、どうしやす、兄貴イ！？」

少女たちのこのやり取りについていけなくなったのか、既に顔中、脂汗まみれの子分が、徐次子に助言を求めた。

「いつそ、琅邪に帰りやすか？」

彼は、本当に帰りたいそうであった。だが、徐次子はなぜか首を横に振った。

「ま、まあ待て！」

「なんでですかい！？」

「俺たちは、食いもんがなくてここまで来たんだ。今更引き返したところで、結果は同じことだ。まあ、責任は俺がとる。俺としても不本意なことだが、ここはひとまず、コイツらと一緒に、楽しくや

ろっじゃねえか」

彼はもっともらしい事を理由に、「ここにどまることを部下に告げたのである。」

「ま、まあ。そう言うのでしたら」

とどまることと、その理由を聞いた部下たちは、黙って徐次子の言うとおりにすることにした。

だが、徐次子にしてみれば、先に行った理由とは別に、「ここにとどまらないといけない理由があったのである。それは、本当に情けない理由であった。」

目の前で茶番劇を繰り広げる少女たちを見ているうちに、彼は心中で、次のように叫んでいたのである。

それはすなわち、

(ダメだ……。コイツら……。ほっとけねえええ!!！)

\*

同じころ、こちらは春陵郷。

修と秀児は、伯升の号令の下、今日も部曲たちとの鍛錬で、徹底的に鍛え上げられた所であった。

「うっ……、足が、足が……」

鍛錬はとっくに終わったというのに、修は立ち上がれないままであった。

無理もない。なにしろ、今日は重い葛籠くわろうを背負ったまま、十理（約五キロメートル）も走らされたのである。

おかげさまで、修はすっかり、筋肉痛になってしまったのだ。これで立てという方が無理であろう。

「修くん、大丈夫？」

心配した秀児が駆け寄ってきた。彼女も修と全く同じ鍛錬を受けていたため、かなり疲れてはいたが、それでも修ほどひどくはない。さすがは、「あの伯升」の妹だけはある、というべきであろうか。

「ああ、全然、大丈夫じゃない……」

修は顔をしかめながら言った。重荷を背負ったまま走り続けたせいで、彼の足は、まるで棒のようになっていた。

そればかりか、所々からは血が出ていたのである。

「わ、大変だ！ 血が出てるよ！」

秀児は思わず自分の両手を口元に当てると、すぐに修の横に屈みこみ、自身の肩を貸してやった。

「ほら、立って。早く家に帰って、ちゃんと手当てしないと……」

そう言われると、流石の修も、立たずにはいられない。左手で秀児の肩を借りると、足が痛むのを耐えつつ、なんとか立ち上がる事が出来た。

「サンキュー。助かるぜ」

「さんきゅー？」

「あ、いや。ありがとな。お前だって疲れてるだろうに」

「ううん。大丈夫だよ」

家へと移動しつつ、話しあう二人。この二人は、本当に仲良しである。

「それにしても……」

家に向かう道中、ふと、秀児が言葉を漏らした。

「ん、どうしたんだ、秀児？」

「あ、いや。あのね、最近、やけに鍛錬が厳しいな、と思って」

「ああ、確かにそうだな……」

修は納得して頷いた。秀児の言うとおり、この一カ月、伯升が主導で行う鍛錬が、やけに厳しくなっているのである。

今日みたいに、重荷を背負ったまま走らされたかと思えば、五人ごとの組に分けられ、槍に見立てた棒を持たされ、組同士で戦わされたりもしたし、ある時は十人ずつの組に分けられて、そのまま前進するように言われ、言う通りにしたところ、途中の木の影や草むらの中から、伏兵役が現れて襲いかかって来たということもあった。

その度に、修が腰を抜かして歩けなくなったことは、別の話である。

それはそうと、この最近の鍛錬のやり方が、やけに本格的過ぎるのではないか。二人とも、どうしても思わずにはいられなかったのである。

「でも、まあ、伯升さんも言ってたじゃないか。『この間、山を降りた盗賊どもがこつちに来ている』って。だからじゃないか？」

修は伯升のことを擁護するかのように、そう言った。

毎晩、賓客たちと交わっている伯升の下には、賓客たちを通じて様々な情報が入ってくるのである。

その情報の多くは、この辺り一帯で起こった出来事についてで、つい最近、緑林山に巢食う「緑林軍」の軍中で悪疫が発生し、人数が半減した彼らが軍勢を分けて山を降りたという情報も、伯升の下に入ってきていたのである。

鍛錬に際し、修たちも伯升からこの事を散々聞かされていたので、

「それなら、盗賊よりも強くならないと」

との想いで、いかなる訓練にも耐えて来たのであった。

そのため、修は特に伯升の行動に疑問を持っていなかった。彼の知っていることを引用するなら、かの「三国志」の劉備たちは、物語の冒頭で、「黄巾賊」の討伐のために兵を挙げているのだから、それと同じ事だろうと、一人で納得していたのである。

だが、秀児はどうも、納得できていない模様である。

「うーん。それだといんだけど……」

そんな彼女の様子を見て、修は首を傾げた。

「どうした？」

「あ、ううん。なんでもないよ」

聞かれた秀児は、そう言って微笑み返すと、

「ほら、もうすぐ家だから」

と言って、そのまま、足に怪我を負った修が歩くのを手伝い続けたが、実は、内心ではこう思っていたのである。

（最近の、？兄様の鍛錬のやり方、やけに本格的過ぎるよ。何と云うか、あのやり方は、この土地を守るための戦い方というより、まるで、どこかに攻め入るかのような感じが……。なんかの間違いだ



といいのだけど……)

結局、彼女はその場では口に出すことはなく、修を家に運び込んだのであった。

\*

そして夜。

空に三日月が昇る中、劉兄妹の家では、三人でのささやかに夕食を楽しんでいた。

今日の晩御飯は、粟飯あわめしと、春萌の家から分けてもらった牛肉と、家で採れた野菜で作った羹あつものであった。

本当にささやかな食事である。

「修。今日もお前は、よく頑張ったな。だから、何杯でも飯はおかわりしろよ!」

酒の入った盃を片手に、伯升が修に向かって声をかけた。

「しっかり動いた分、しっかりメシは食え! それが、男というもんだ」

昼間の厳しさとは打って変わって、本当に面倒見のいい人である。

修は、この世界に来た当初、どうして「怠け者」の伯升が、大勢の賓客に慕われているのかがわからなかった。

だが、彼の家で半年近くも居候させてもらっている今となっては、なんとなくそれがわかるような気がしてきたのである。

鍛錬の時などは、一切妥協せず、とにかく鞭むちばかり振るうような男だが、夜になると、共に食い、共に飲み、共に話す。一言でいえば、「アメとムチ」の使い方がうまい人間。それが、劉伯升である  
と、修は思うようになった。

そんなわけで、その日もしっかりと晩飯を食べ終え、あとは「お酒」(どぶろくの種類)でも一緒に飲むかと、思ったときであった。

「? 兄様」

ふと、秀児が口を開いた。

「なんだ、秀児?」

「ひとつ、お聞きしてもよろしいですか?」

いつになく、真剣な眼差しで、兄の顔を見上げる秀児。そんな彼女の顔を見て、修は何事かと思ったが、ひとまずは話を聞くことにした。

「なんだ?」

「？兄様。ここ最近の鍛練についてですが、やけに張り切り過ぎていませんか？」

「なんだ、そんなことが」

伯升はそう言うと、笑みを浮かべながら、いつもの理由を言った。

「前にも言ったただろが。ほら、例の『緑林軍』が……」

「『緑林軍が攻めてくるかもしれない』。しっかりと憶えていますよ」

秀児はわざと声を落として伯升の声を真似すると、にこやかな笑みで、話し続けた。

「ですが、今日の鍛練の最中、ふと思ったのです」

彼女はそこで一旦息をつくと、そのまま自身が考えていることを、一気に告げた。

「この一カ月の鍛練ですが、どうも兄様のやり方を見ていると、単に賊どもから土地を守るための特訓とは思えない気がするのです」

「ほう、その根拠はなんだ？」

「今まででしたら、単純に部曲一人一人に槍の扱い方とか、並び方とか、春萌義姉さまのお屋敷への避難といった、簡単なものでした。しかし、この最近は、異常なまでにたくさん走ったり、組ごとに分かれて戦ったり、やけに陣形まがいな整列をしたり、『伏兵』と戦

ったり。どうも本格的過ぎるのですが？ 思うに、あれは、『どこかを攻めるための鍛練』みたいにも見えるのですが」

彼女はそこまで述べた。なるほど、たしかにおかしな話である。

単純に土地を守るだけなら、どうして、「どこかを攻めるための鍛練」などをするのであろうか。

だからこそ、秀児は疑問に思ったのである。それだけではない。

「思い返せば、鍛錬が厳しくなったのは、一カ月前。あの横暴な役人が春萌義姉様の所にやってきた次の日のからです」

「秀児。お前、ちゃんと見ているじゃねえか」

秀児の言うことを黙って聞いていた伯升が、怪しげな笑みを浮かべながら言った。

「？兄様。兄様は、まさか……」

「おっと、待った！ 俺は何も、あんなくだらねえ猪役人ごときにケンカを売るつもりは、一切ねえ！」

秀児が冷や汗を浮かべながら言いかけた時、伯升は秀児が何を言わんとしたのかを察したらしく、役人にはかまわないと、はっきり言ったのである。

「なあんだあ……」

それを聞いて、修も秀児も胸をなでおろした。そのため、この後

に来る伯升の台詞を予想することができなかったのである。

「いいか、よく聞け」

ホツとする二人を見て、伯升は相変わらずの笑みを浮かべたまま、言葉をつないだ。

「この劉伯升、あんなくだらねえ連中の事など、まったく相手にしておらんわ！ あんな連中、相手にするだけ、時間の無駄というものよ！」

そこまで言うと、伯升は、二人が全く予想していなかった事を口にしたのである。

「この劉伯升が望むことは、ただ一つ！ 篡奪者・王莽を誅し、高祖が築きし大漢帝国を、この地上に甦らさんことのみ！」

それを聞いた直後、ちょうど酒（甘酒）を飲んでいた秀兎が、すぐ前にいた修の顔面に向けて、口の中の酒を噴いてしまったことは、別の話である。

## 第十一章 劉伯升の企み（後書き）

（恋姫紹介）

（泰山流民集団の幹部たち）

・樊崇

字は細君。徐州琅邪郡の人。訛りのある喋り方で、背丈も低い少女。この時点では、ぼさぼさの短い黒髪が特徴。全くの無学で、文字の読み書きさえ、ほとんどできないにもかかわらず、なぜか流民集団の長を務めている。自ら、「三老（町の会長に相当）」と号している。とにかく、「馬鹿正直」な性格。見かけによらず、勇猛ともいうが……。

・逢安

字は少子。徐州琅邪郡東莞県の人。茶髪の巻き髪が特徴の、でこっぱち娘。樊崇とは同郷である。樊崇同様、強い訛りのある声の持ち主。彼女も樊崇同様、無学で文盲。

・徐宣

字は驕穉。徐州東海郡臨沂県の人。水色の髪を頭の両側でそれぞれお団子にした少女。樊崇・逢安とはまた違った訛りで話す。いつも、ぼろぼろの「女性用儒服」を身に纏っている。元・村役場の獄吏で、少しだけ「易経」の研究をしていて、「この集団の中」では、一番読み書きができる。楊音と同郷で、背丈、髪型がそっくりなため、知らない人からは「双子」のように見える。

・楊音

字は不明である。徐州東海郡の人。紫色の髪を頭の両側でお団子にした少女。徐宣同様、変った訛りで話し、いつもぼろぼろの「儒服」を着用している。元・村役場の下級書記だが、徐宣ほど読み書きは

できないが、家事などは得意。一応、食糧担当。背丈・恰好が徐宣にそっくりなため、知らない人は「双子」と間違うが、性格面では徐宣ほど優しくない。

・董憲とうけん

字は不明である。徐州東海郡の人。黄緑色のポニーテールが特徴の少女。ぼろぼろの「儒服」を纏っているが、かなりの人見知りで、知らない人に会うと、被っていた帽子で顔を隠してしまうほど。実は、兵法家の素質がある模様。

いかがでしたでしょうか？

本当は、こんな中途半端なところで終わらすべきではなかったかもしれませんが、続きは次回と言うことで、いったん引かせていただきます。

さて、今回、冒頭に出てきた泰山流民集団ですが、樊崇をはじめとした幹部たちのほとんどが文盲だったという点については、史実です。幹部連中は、元・村役場の下級書記程度の間人ばかりで、かろうじて文字の読み書きができたにすぎなかったようです。

史書によつては、元・獄吏の徐宣だけが文字を読み書きできたとしているものがあるほどです。それは流石に大げさだと思えますが、いずれにせよ、当時の庶民階級では、識字率が極めて低かったことを意味しています。

秦末期の「陳勝・呉広の乱」や、「三国志」冒頭の「黄巾の乱」、唐王朝末期の「黄巢の乱」など、中国の王朝末期には、必ずと言っていいほど、農民による大反乱が起こるのですが、その反乱の指導者たちは、少なくとも文字の読み書きはできたのです。

ところが、王莽末期に登場した、樊崇たちだけが、史書に「文盲」とはつきり記されていたのです。

そのため、この樊崇たちをとる行動は、少なくとも知識を持った人

間からは予想もつかない道をたどることになるのです。  
それはまた後日、本編で語ってまいりますよう。

なお、このお話で徐宣と楊音を双子みたいにしたのは、作者の勝手な妄想ですので、絶対に鵜呑みにしないでください。

それでは、次回をお待ちください！



**第十二章 劉伯升、大志を語る（前書き）**

お待たせいたしました！

第十二章のお話です。

それでは、ごゆっくりお楽しみください！

## 第十二章 劉伯升、大志を語る

皆さん、こんばんは。柳修やなぎしゅうです。

またの名は、柳修しゅうしゅう、字は伯昇はくしょうといます。

現在、俺は大変、混乱しています。

なぜなら、いつもお世話になっている「家主さん」こと、劉伯升さんが、突然、

「国にケンカを売るぞ！」

と、言い出したからです。

俺はこの先、いったい、どうなるのでしょうか……？

\*

「本気ですか……？」

劉伯升による突然の「謀反宣言」から十数分。ようやく落ち着い

たところで秀児は、このとんでもない兄に向って、声を震わせながら問い詰めた。

「?兄様。本気でそのようなことを仰っているのですか!??」

すると、伯升はいつものごとく、豪快に笑いながら言った。

「秀児。俺が冗談を言うと思うか?」

「思わないから言っているのです!」

そう叫んで、頭を抱え出す秀児。だが、伯升は、そんな妹の姿を見て、ますますおかしそうに笑った。そして、からかうように言った。

「そうだな。なんつったって、俺はお前のように、冗談とか得意じゃねえからな!」

「笑い事じゃありません!」

笑顔満面の伯升とは正反対に、秀児は怒りに肩を震わせ、ドンと卓を叩いた。そして、怒りと呆れが入り混じった声で、それでも家の外に声が漏れないよう、懸命に抑えた声で言い続けた。

「?兄様。自重してください。この辺の子役人どもならともかく、『あの王莽』に喧嘩を売って、それで勝てると、本気で考えますか?」

彼女はそう言って、自身の兄を懸命に諫めようとした。念のため言うが、彼女とて、王莽の政治の乱脈ぶりは知っているし、また、

多くの民たちが災害や、それにとまなう飢饉などで苦しんでいるのを見て、これらの元凶である朝廷への憤りも感じていた。

しかし、彼女が「兄の挙兵計画」に、ここまで懸命に反対するのにも、むろん理由がある。

皇帝独裁のこの国では、「国家転覆」を企てれば、計画を立てただけで、「大逆罪」。しかも、計画を立てた本人のみならず、家族一族全員皆殺しの「連座制」なのである。

もし、伯升の「反乱計画」が漏れれば、妹である秀児はもちろん、彼女の大好きな姉・劉元も、親戚である春萌たち、春陵侯家も、下手をすれば、婚姻関係にある来歙や？ 農たちにも害が及ぶかもしれないのだ。

しかも、秀児が反対するのは、それだけが理由ではない。

「だいたい仮に、この春陵侯の劉氏全員で立ちあがったとしても、こんな田舎豪族の集められる兵力など、底が知れています。兄様は、<sup>いにしえ</sup>古から学ぶということをしらないのですか？ かつて王莽に反旗を翻した、<sup>あんしゅう</sup>安衆侯家や、<sup>てんぎ</sup>？ 義たちがどのような目に遭ったか、よくご存知でしょう!？」

彼女はそう言ったのである。

傍系とはいえ、仮にも漢王家の末裔である秀児は多少ながら歴史を学び、かつて、篡奪者・王莽に反旗を翻した者たちがどのような末路をたどったのかを、わかりすぎるほど知っていた。

王莽が高祖以来の漢王朝から天下を奪ったのは、およそ十四年ほ

ど前のことだが、その少し前に、「打倒王莽」の旗を掲げて抵抗した漢の皇族たちや、忠臣たちもいた。だが、そのことごとくが、王莽の派遣した「官軍」によって叩きつぶされたのである。

王莽が帝位を篡奪する前、先駆をきつて打倒王莽の旗を挙げたのは、秀兒たち舂陵侯家と同じ、長沙定王・劉発の家系である安衆侯あんしゅうこう家の劉崇りゅうしゅうという男であった。

彼は自分たち、安衆侯家の挙兵が皮切りとなって、中原各地の王侯となつている皇族・宗室たちや、漢王家恩顧の貴族・豪族たちが皆一斉に立ち上がってくれることを期待し、自身の部曲、数百を率いて荊州最大の城市・宛を攻めたのである。

ところが、どうしたわけか、劉崇たちに呼応してくれた者は、誰一人として現れなかつたのだ。

結局、劉崇は敗死し、安衆侯家は、当時赤ん坊だつた宗室の女子一人を除き、ことごとく殺されてしまつたのである。

その翌年には、東郡太守のて義たちが、第九代・宣帝の曾孫であるげんきょうこうりゅうしん敵郷侯の劉信を天子に立てて、打倒王莽の反乱を起こし、一時は十数万もの兵力を集めたものの、結局討伐され、わずか半年も経たないうちに反乱は鎮圧されてしまつたのである。

この時、首謀者である？義は捕まつて磔にされ、三族皆殺しの憂き目に遭つている。

また、反乱軍の幹部だつた王孫慶おうそんけい（姓は王孫、名は慶）なる男が都・長安の市場で公開処刑された際には、王莽は医者を立ち会わせ、王孫慶を生きたまま解剖したのである。

内臓の位置や大きさ、重さなどを医者に記録させ、今後の医療の参考にしたというのだが、誰が聞いても、残酷極まりない話である。

秀児は、それを直接見たわけではなかったが、数年前に長安で茶柳や露々たちと一緒に太学に通っていた際、その処刑を直接見たことのある人々、例えば、年長の学友たちや、街の人たちから噂を聞いたことが何回もあった。

ある人曰く、

「（内臓とか、血管とかを）細い竹で引き上げてたよ。あの時はぞつとしたねえ。なにしろ、まだ、びくびくと脈打ってたんだよ」

とのことである。そんな話を聞かされた日には、背筋がぞつとしたあまりに、食事さえ喉を通らなかつたほどだ。

余談だが、本来ならば春陵侯本家の当主であるはずの劉祉の父、劉敞が爵位を剥奪されたのはこの時の話で、劉祉の妻が反乱首謀者の？義の兄・？宣てきせんの娘だったからなのである。連座して獄に繋がれた我が子の命と引き換えに、劉敞は爵位を失ったのだ。

それはともかく、「？義の乱」が鎮圧されて以降、漢の皇族や、各地の貴族・豪族たちの中から、王莽に立ち向かう者は現れなくなつてしまったのである。

そもそも、豪族のような「特権階級」が何を叫んだところで、一般の民衆の生活には全く関係ない話なのだ。だから、民衆が自ら積極的に協力してくれるとは、到底思えない。

おまけに、この春陵郷は荊州の片田舎に過ぎず、仮に春陵侯家全員が挙兵し、どんなに多くの兵をかき集めたとしても、せいぜい数千人が限度なのである。十万人以上も集めた？義たちでさえ、半年ももたなかったのだから、こんな兵力で国に喧嘩を売るなど、無謀以外の何者でもない。

そんなわけで、秀児は兄の企みに反対したのである。

だが、当の伯升は、笑顔を崩すことなく、妹の反対理由を黙って聞いていた。そして何度か頷くと、口を開いた。

「秀児。お前、よく勉強しているじゃねえか。なるほど、たしかに、お前の言うとおりかもしれんな。だが……」

そう言い含めたところで、盃に注がれていた酒を飲み干すと、伯升は言葉をつないだ。

「お前はまだまだ甘えよ」

「え？」

思わず息を呑む秀児を余所に、伯升は一方的に言い続けた。

「たしかに、古いにしへからいろいろと学ぶことは重要だ、秀児。だが、安衆侯家のことにしろ、？義のことにしろ、お前の言っていることは全部、『失敗例』にすぎん。いや、失敗から物事を学ぶこと自体は、とっても大事なことだ。だがなあ、秀児。他人の失敗例を見て、自分はいやだとか言うヤツは、ただの臆病モンってやつだ。本当に古から物事を学ぶヤツってのは、『他人の成功』からも学べるヤツのことだ」

「他人の……成功……？」

「ああ、そうだ。例えば、そうだな。俺たちの御先祖様であらせられる、高祖皇帝陛下とかな」

「高祖皇帝陛下ですって!？」

高祖（劉邦）の名前が出た瞬間、秀児の頭の中で、何かが閃いた。

「まさか、？兄様。今までもろくに働きもせずに、稷くわいや賓客たちと飲んだくれたり、僕の事を『仲（劉邦の兄）』に例えたりしたのは……!？」

「その通りだ、秀児！」

あたかも、よくわかったな、と言わんばかりに、伯升は大笑いした。

「かつて、『秦打倒』の兵を挙げる前、高祖がどのような男だったか、お前も知っているだろう？」

「はい。貧乏ほんかいなくせに仕事はろくに手伝わず、侠客を気取り、街に行けば樊はん？たちと一緒にただ酒ばかり飲む、本当にだらしないご先祖様だったと……」

「そうだ。だが、そんなだらしのねえ、任侠気取りな『ご先祖様』の功績はどうだ？ 始皇（秦の始皇帝）亡き後に兵を発し、あの大帝国・秦を滅し、さらには宿敵だった西楚霸王・項羽をも倒し、『大漢帝国』の礎を築きになられた。貧乏百姓から一転して、最後に



はこの中原の『英雄』となられた……」

「それでは、兄様は、まさか、高祖の真似をしておられるの、ですか？」

言葉を失いかけて、ときれときれの声で物言う秀児。そんな彼女を見て、伯升は再度大笑いすると、自身の意を告げた。

「秀児。なにからなにまで、高祖の真似をしようってわけじゃねえ。高祖の時と、俺たちの時とは、世の中がまるで違うからな。だが、ある程度までならば『参考』にさせていただいても、別に罰が当たってもんでもねえだろ？」

それを聞いた秀児は、自身の兄の今までやってきたことを、ひとつひとつ思い出しては、考えてみた。

修と初めて会う数ヶ月前に、長安留学を終えて、数年ぶりに実家に帰った時のこと。

実家に帰ってみれば、伯升が働きもせず、賓客たちと好き勝手放題やっていたこと。

それが原因で、母やもう一人の兄と、妹の全員が、叔父の家へと移ってしまったこと。

仕方なく、一人だけ残って、家の生計を立てることにしたことなどである。

その時は、家族や親戚にも迷惑ばかりかけていた伯升の行動が、全く理解できなかつたが、実は伯升は「第二の高祖・劉邦」になる

うとしているのだと考えると、少しは納得できたような気がした。

だが、それでも不可解な点があった。

「？兄様」

秀児は疑問に思ったことを、思いきって聞いてみることにした。

「仮に、兄様が『第二の高祖』になろうと考えておられるとして、どうしてあんな、任侠気取りをされているのですか？高祖の時ならば、結果的にとはいえ、後に活躍する樊はんかい？（\*）、盧縮ろわん（\*）といった者たちとの繋がりを深めることに役立ちましたし、また、当時は田舎の子役人に過ぎなかつた蕭何しょうか（\*）、曹参そうしん（\*）たちとも関係を築くのに役立ちましたが、僕が思うに、兄様の周りに、そんな者はいないように見えます」

「だーっはっはっは！そうか、俺の周りには、樊？も蕭何もないか。わかつているじゃねえか」

図星だったのか、これで何度目かと言わんばかりに大笑いする伯升。だが、彼は全く気にした様子もなく、秀児に向かって質問の答えを返した。

「言っただろ？俺は何から何まで、高祖の物真似をするつもりじゃねえって。いいか、よく聞け。俺があんなゴロツキどもを相手にしているのには、深えわけがあるんだ」

「なんですか、そのわけって？」

「わからねえか？ゴロツキどもの中にはなあ、役人から追われて

いる盗賊連中とかと繋がりのあるヤツもいるんだ。俺が欲しいのは、その繋がりだ」

「まさか……」

みるみるうちに、秀児は青ざめた。直感で、ここから先は、聞きたくないと思っただのである。

だが、伯升はお構いなしと言わんばかりに、みなまで口にした。

「そうだ。この劉伯升が欲しいのは、『兵力』。つまり、ゴロツキどもの繋がりを利用して、あの『緑林軍』を丸ごといただくこうつてハラだ！」

「いい加減にしてください！」

秀児は両手で思いつきり卓を叩いた。その勢いは凄まじく、立てあつた酒瓶が倒れ、床へと落ちたほどである。

だが、そんなことに気を止める様子もなく、秀児は怒鳴り続けた。

「？兄様！ 何を馬鹿なことを！ あんな薄汚い盗賊どもと手を組んで、事が成功すると、本気でお思いですか！？」

「なんだ、お前。かってえヤツだなあ。そんな怒鳴ってばかりだと胃に穴が開くぞ。まったく、これなら春萌はるもの方が、まだ物分かりがいいってもんだ」

「え？」

彼女は不意をつかれた。なにしろ、伯升の口から突然、秀児が実の姉のように慕う春萌の名前が出たからである。

「なんで、そこで、春萌義姉様の名前が……？」

訳がわからず、呆然となる秀児に、伯升はさらなる追い打ちをかけた。

「おつと悪い。言ってなかったな。実はこの計画の事、あの猪役人が帰った次の日以降、既に何人かに話しているんだ」

「誰に話したのです？」

「教えてやろう。春萌と歎、それから新野の晨のヤツだ。ちなみに、叔父上は臆病モンだから、話してはいねえ」

「なっ!？」

秀児は絶句した。劉嘉、来歎、?晨と、いずれも彼女にとって関係の深い人物の名前ばかりが出たからである。

「それで、皆、なんて言ったのですか？」

秀児は信じられないという表情で聞いた。誰か、この兄を止めてくれ。そんなことさえ考えていたのである。だが、現実は無情だった。

「俺が言うと、最終的に、全員が了承してくれたぜ。あの豚役人どものことが、相当頭にきていたようだったからな。ま、春萌のヤツは、最初だけ戸惑いやがったけどよ、お前のように怒鳴ったりはし

なかつたなあ」

それを聞いた瞬間、秀児はへなへなと崩れ落ちた。彼女と親しい人が全員、この兄の言う、「バカげた計画」に賛成なのである。今の彼女の心境は、もはや誰を信じていいのかわからないほどであった。

そんな妹の様子を見た伯升は、軽く笑った。しかし、いつものように馬鹿笑いはしなかつたのである。

それどころか、いつになく真剣な表情になつたのである。いつも豪快に笑つてばかりの伯升には、到底似合わないキリツとした表情しかし、それゆえに威厳のある顔つきであつた。

やがて、伯升は口を開いた。

「秀児。お前はイヤか？」

「え？」

突然、声色をかえ、いつになく真剣に話しかけてくる伯升に戸惑いつつも、秀児はうな垂れていた頭を上げた。その時、彼女の瞳に映つた伯升の眼は、酒に酔っている様子もなく、濁り一つないように見えた。

「嫌なら、別にかまわねえんだぞ。そんなに嫌なら、お前は、この伯升のやることを、黙って見ていればいい。あるいは、役人どもに密告したって、構わねえんだぞ？」

「な、なにを……」

「まあ、聞け」

伯升は全然似合っていない微笑みを浮かべながら話し続けた。

「お前、将来は『執金吾』になりてえんだつたよな。もし、お前が俺たちの事を密告すれば、それをきっかけに登用されて、それでいろいろと目立つように頑張っていれば、いつかは、その夢も叶うかもしれないな」

「だが、お前はそんなことなどできねえヤツだ。なにしろ、お前は優しいヤツだからな。それに、俺が見たところ、お前は王莽のようなヤツに、仕えようとは思っていないえだろ。俺は知っているぞ。お前が俺以上に、飢えで苦しんでいる百姓どものことを憂えていることも」

そこまで言うと、伯升は最後の締めくくりにかかった。

「ま、難しいことは考えるな。お前はどをやったら執金吾になれるかだけを考えとけばいいんだ。だが、あの王莽の下で、派手に飾った執金吾をやるか、それとも、高祖以来の、漢の赤き旗の下で堂々と執金吾をやるか、どっちがカツコいいかくらいは、考えとけ」

そう言うと伯升は、それまでの真剣な表情を崩し、そしていつも通りに大声で笑った。

(卑怯だよ……)

笑っている兄の姿を見て、秀児は心の中で一人、呟いていた。

(まったく……。そんなうまいこと言つて、この僕を「反乱」なんかに加えようとするなんて……。こんなこと言われて、断れるわけがないじゃないか。どうせ、「連座」なんだから……)

そう思つて、一人憂いに浸っていた時だった。

「あの一……」

不意に、少年の声が耳に入った。

「お二人とも、俺のこと忘れて、なんか、とんでもないお話ししてるみたいですが……？」

それを聞いて、伯升も秀児も、声の主の方を振り返つた。その視線の先にいたのは、今まで同じ部屋にいたのに、ずっと忘れ去られていた少年、修だった。

「はっ！？ 修くん！？」

秀児は突然、現実に引き戻された。

「しまった！ すっかり忘れてたよう……」

彼女は度肝を抜かれたかのように、真っ白になった。なにしろ、「第三者」である修の存在を忘れて、自身はおろか、この南陽の一族・親戚の存亡に関わることを、べらべらと喋っていたのである。彼女じゃなくても、動転することである。

しかし、全く動転していない人間がいた。伯升である。

「修。お前、ゼーんぶ聞いてやがったか。こりゃ、たまげたなあ！」  
心にも思っていないことを言つと、伯升は修の方を見て、男には似合わない、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「い、いえ。その、俺には話が難しすぎて、何が何だか……」

戸惑いながらも、そう言つて目をそらす修。たしかに、彼の言うとおりで、修はこの話の半分も理解はしていなかったのだが、伯升はお構いなしだった。

「話を全部聞かれたからには、やることはただ一つ」

伯升は満面の笑みでそう言つと、立ち上がつて修の横に立ち、自身の右手を相手の左肩の上に乗せた。

「な、なんでしょう、はくしようさま……?」

しどろもどろになる修。そんな彼に向かって、伯升は一言だけ告げた。

「修。お前も俺たちの仲間入りだ。手厚く歓迎するぜ！」

『はい? つて、ええええ!?!』

「なんだ、うるせえなあ。どうせ、お前は俺の仲間に入れる予定だったんだよ。それが早まっただけじゃねえか」

「そ、そんな……!?!?」



「ま、まだ当分の間は事を起こすつもりはねえ。だから、明日からしばらくは、いつも通りに過ごせよ。ま、鍛練はよりいっそう厳しくするが。あ、それから修。この事を役人どもに言いつけたら、あの世であーんなことや、こーんなことをしてやるからな、覚悟しとけよ」

「な、なにするつもりですか!？」

「知るか! あー、今日はたくさん話し過ぎて、声が枯れたわ。さつさと寝るとすつか! だーっはっはっはっは!」

こうして、少年、柳修の「劉伯升反乱軍」入りは、事実上決定したのである。

放心状態になって、まったく動けなくなった修と秀兎。

そんな彼らを余所に、伯升は全く枯れていない声で大笑いしながら、さつさと寢床へと行ってしまったのであった。

(最悪だ……)

放心状態の修は、いるかどうかもわからない神を怨んだ。

(神様、もしいるなら教えてくれ。なんで俺を、こんなとんでもない世界に連れて来たんだ。そりゃ、俺だって昔、ゲームやってるときに、『三国志』のキャラたちと一緒に戦いたいとか思ったことあるよ。だけどこれは、あんまりだ……)

彼は現在、「最悪」の頂点にたどり着いた気になっていた。これより最悪なことは、この世にはないであろう。

彼はそう思ったのである。数日後、その記録が更新されることなど、露ほども知らずに……。

\*

それから一週間後の事である。

あの後、秀児の慰めのおかげで、なんとか正気だけは保った修は、これからのことに奮えつつも、習慣上ではいつもと変わらない、平々凡々とした生活を送っていた。

一週間経過したその日は、伯升が休暇をくれたために、気分転換に、秀児と一緒に、近くの山に入って、山菜を採りに行ったのである。

山のあちこちを探検し、籠いっぱいに山菜を集め、夕日を背に、二人で談笑しながら家路についていた時だった。

「てえへんだ！」

突然、家の方向から、一人の髭もじやの男が駆けてきた。

修はその男に見覚えがあった。修が伯升宅で居候を始めて間もな

い頃、彼に無理やり酒を飲ませた男だったのである。

「てえへんだ、文叔！」

その男は、秀児の字を呼び捨てにしながら二人の下へと駆け寄ってきた。

「稷しやくじゃないか！」

秀児が言った。男は、秀児と同じ南陽劉氏の劉稷で、伯升の賓客の一人だったのである。いつも伯升を実の兄のように慕う彼が、こんなに焦って駆けて来たのだから、何かあったに違いない。秀児はそう思ったのである。

「稷。いったい、どうしたの!？」

「落ち着いて聞け! 役人どもが、兄者の家に押しかけてやがる！」

「え、ええ!？」

「どういうことですか!？」

突然の告白に動揺する二人。そんな二人の表情を確かめもせず、劉稷は何が起こったかを言い続けた。

「なんでも、兄者の家に入入りしていた賓客の一人が、その辺で盗みを働いたらしい。そいつは新入りで、兄者のやろうとしている『事』は何も知らねえヤツだが、獄の中で、兄者のあることないことを、苦し紛れに言いふらしたらしい!」

「それで、兄様は……?」

「安心しろ。兄者はとうの昔に逃げおおせた。だから、文叔たちも早く逃げる! 兄者から連絡が来るまで、春陵には戻ってくるな! 俺は兄者の家族を守りに行ってくる!」

「う、うん!」

こうして劉稷と別れた二人。だが、肝心なことを忘れていた。

「秀児! いったい、俺たちはどこに逃げればいいんだ!？」

「あ、忘れてた。けど、考えている暇はないよ! えっと、春萌義姉さまのところは、多分、途中で役人が張り込んでるだろうし……」

そう言ったとき、秀児はふと、いい逃亡先を思いついた。

「そうだ! 新野の? 農義兄さまの所に逃げよう! そこなら、まだ役人たちの手はまわってないはずだよ!」

「ああー、ちつくしよー!!」

こうして、二人は徒歩で、しかも役人に脅えながら、新野の? 農の邸まで向かう羽目になったのである。

命からがら? 農の邸にたどり着いた時、二人の足の筋肉が、またいつそう鍛えられたことは、言うまでもないことであった。

\* 注釈

\* 樊?  
はんかい

高祖・劉邦の任侠時代からの親友にして、忠臣だった人物。劉邦の妻・呂後の妹の呂須を娶り、劉邦とは義兄弟の関係だった。西楚霸王・項羽との戦いが本格化する前の、「鴻門の会」の際に、劉邦を危機から救ったエピソードが有名。

\* 盧縮  
ろわん

高祖・劉邦の幼き日からの親友で、子分的存在だった人物。劉邦と盧縮は同じ村で生まれ育ち、父親同士が親友だったばかりか、劉邦と同じ年・同じ月・同じ日に産まれた人物でもある。漢楚戦においては、彭越らと共にゲリラ戦を指揮し、項羽軍の兵糧を奪ったりした。後に劉邦によって「燕王」に封じられたが、「謀反を企てている」と告発されてしまい、討伐軍を差し向けられる。間もなく劉邦が死去すると、魯縮は絶望して匈奴に亡命し、匈奴の冒頓単于によって「東胡の盧王」に封じられたが、一年あまり後に病死した。皮肉なことに、彼が親友・劉邦と再会できたのは、雲の上での話である。

\* 蕭何  
しょうか

高祖・劉邦の名臣にして、三傑の一人。元々は沛県の下役人で、劉邦が反秦の兵を挙げるとこれに呼応。それ以降、劉邦陣営における内部事務の一切を取り仕切った。秦の都・咸陽に入場した際には、兵士に略奪を禁じ、国を治めるのに必要な歴史書、公文書等を急いで運びだした。劉邦が漢王となった後は、丞相に任命され、漢楚戦争中は関中を守り、そこから最前線の劉邦軍本隊に物資を送り続けた。劉邦が漢の皇帝に即位したのは、「相国」に任命され、「剣

履上殿」「入朝不趨」「謁讚不名」等の特権を与えられている。なお、「相国」の位は、蕭何と下記の曹参以降（呂后の甥の呂産を除き）、漢王朝においては永久欠番的な役職名となり、「三国志」序盤の悪玉・董卓が勝手に「相国」を名乗るまでは、前漢・後漢四百年を通して「相国」に就任した者はいない。

＊曹参そそうしん

高祖・劉邦の下で活躍した人物。元々は蕭何の部下だった。劉邦が反秦の兵を挙げた時に、蕭何たちと共に、これに呼応。後の漢楚戦では將軍となり、韓信の軍に従軍して戦った。劉邦の天下統一後は斉国の丞相として貢献し、蕭何の死後に「相国」となっている。なお、「三国志」の曹操の祖父である宦官の曹騰は、曹参の子孫の家系だと言われている。

## 第十二章 劉伯升、大志を語る（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回のお話は、伯升さんの大志を語らせていただきました。

正史においても、真つ先に天下を取ることを明確にしたのが、ほかならぬ劉伯升だったのです。

後に漢王朝再興という大偉業を成し遂げる劉秀は、正史ではこの時28歳でしたが、兄たちの挙兵計画を知って、最初は突然のことについていけず、大変戸惑ったといえます。

ちなみに、最後の方で修&秀が？晨の家に逃げるシーンがありましたが、これは後漢書「？晨伝」の一節、「光武の家属と与に吏を新野に避くるに及んで」の一節を元ネタにしています。

なお、王莽が天下を取る前に挙兵した劉崇や？義たちが、どうして簡単に敗れさつたのかを見てみますと、劉崇の場合はるくに根回しもしていない、無謀な決起以外の何物でもなかったのですが、？義の場合は、十数万人も集め、計画も前者より綿密だったのに、簡単に敗れています。

？義たちの挙兵が失敗に帰したのは、一つは、当時の民衆たちに「王莽人気」があったからでした。

天下を取る前の王莽は、様々な社会政策・福祉政策を行っています。

飢饉のときには蝗を国が買い取るといふことをしていますし、疫病

が発生した場合は、そこに療養所を建てると言うことをしています。また、死人が出ると、国から葬式代を出し、他にも学校制度を作つて、庶民の子どもでも儒教の勉強ができるようにしています。

一般的に王莽の政策は、「極端な教条主義」と言われ、評判が悪いのですが、世界に先駆けてきめの細かい政策を打ち出したり、王莽滅後、中国の歴代王朝が儒教政治を本格的に行つていった面などもあり、現在では再評価されている面もあります。（それでも、作者は好きになれませんが……）

そんなわけで（前漢王朝の退廃ぶりがひどかったこともありましたが）、？義の乱当時の民衆が、積極的に反乱に参加することはなかったのです。

さらには、？義たちの傘下に馳せ参じた将兵の中には放火や略奪を事とした者がいて、これが反乱軍の評判を大いに落としたのです。

こうなつてしまえば、民衆から人気のある王莽側が有利になることは、いうまでもありません。

現在で例えるならば、選挙の候補者が、たとえ、どんなに正しい主義主張を唱えようと、実績がなければ通らないことに似ているのではないのでしょうか。

洋の東西を問わず、「特権階級」の起こす反乱は、一部の例外を除いて、めつたに成功しないようです。

そういう意味で言えば、伯升も劉秀たちも、爵位を持っていないとはいえ、庶民同然の生活をしているとはいえ、「特権階級」になる



のですが、状況はすでに？義たちの時とは大きく変わっています。

中国史上、王朝末期には、お決まりと言っていていいほどの「大事件」が起こるのです。

果たしてどのような事件が起こるのか、これからしっかりと語ってまいります。

さて、今回は舞台を新野に移して、物語を続けたいと思います。

## 登場人物紹介（前書き）

ここで一度、これまでに登場した人物たちの紹介をしておきたいと思えます。

作者自身の気持ちの整理も兼ねていますが、どうかご了承ください。

なお、劉秀一家の人々等、本編未登場の人物も一部載せていますので、ご注意ください。

なお、登場人物の主要キャラには「CVイメージ」をつけてありますが、これは作者の趣味でしかありませんので、気にしないようお願いいたします。

## 登場人物紹介

恋姫十先史 光武帝紀の登場人物一覧

(主人公)

・柳修やなぎしゅう：別名は柳修りゅうしゅう、字は伯昇はくしょう。

この物語の主人公。現在16歳。一人称は「俺」。青春真っ只中の男子高校生だが、知り合い相手ならともかく、自分から積極的に女の子と話すのが苦手な「ヘタレ」である。また、女の子の気持ちに対して鈍感な唐変木でもある。しょうもないことが原因で、「三国志の始まる二百年前」の、「外史」にトリップしてしまい、現在、劉伯升・劉秀兄妹の家にて居候中。

CVイメージ：福山潤

(ヒロインたち)

・劉秀りゅうしゅう：字は文叔ぶんしゆく、真名は秀兒しゅうじ。

出身地：荊州南陽郡蔡陽県春陵郷

この物語のメインヒロイン。現在16歳。前漢第六代・景帝の子の長沙定王・劉発の末裔の一人。一人称は僕ぼく。六人兄弟の五番目。父の劉欽りゅうきんは南頓県の県令だったが、幼い時に亡くなっている。青みがかったセミロングの髪（アホ毛有り）だが、普段は男の子らしく、後頭部で纏めている。時々、髪を下ろしたり、あるいはツインのお団子にしたりする。貧乳。将来の夢は「官になるなら執金吾。妻を娶らば……」

CVイメージ：桑島法子

・陰麗華いんれいか：真名は麗々れいれい

出身地：荊州南陽郡新野県

「ある意味メインヒロインその一」。新野の大豪族である陰家の娘。現在13歳。長い、艶やかな黒髪が特徴の美少女。13歳とは思えない、妖美な雰囲気を持ち主だが、反面、かなりの天然で、典型的な「世間知らずなお嬢様」。可愛い動物が好きで、優しい性格である。一方で、父親の陰陸を早くに亡くしていることもあって、「父」という単語に過剰に反応して、泣きだすほどである。家族には兄の陰識や、弟の陰興いんこうなどがある。叔父の？奉を実の父親のように慕っている。実は、劉秀こと秀児が……。

CVイメージ：ゆかな

(秀児の家族)

・劉りゅう?えん：字は伯升はくしょう

出身地：荊州南陽郡蔡陽県春陵郷

秀児の長兄。歳は三十前後。妹の秀児と違って、任侠の風があり、勇猛果敢な人物。先祖である高祖・劉邦を思わせるほどの自信家。ろくに働きもせず、任侠を気取っていたが、実は「篡奪者・王莽」を倒し、漢王朝を復興させるという大志のために、密かに下準備をしていた。

CVイメージ：神谷明

・劉元りゅうげん：真名は雪しえ

秀児や劉伯升の次姉。新野の豪族・？とっしん晨の妻で現在、嫡子の？とっほん汎と三女の母。伯升よりも年上だが、それを感じさせない若い外見である。秀児が幼い頃、伯升に悪戯されたりするのを庇うなど、優しいお姉さんだったようで、現在もそれは変わっていない模様。夫婦間、親子間の仲は良しという、しっかりした女性である。

CVイメージ：岩男潤子

・劉黄りゅうわう

秀児や劉伯升の長姉。本編未登場。どこか遠い所に嫁いでしまい、

滅多に帰ってこない模様。

・劉仲 りゅうちゆう

秀児の次兄。本編未登場。伯升と比べるとおとなしい性格の模様。現在、母と妹と共に、叔父の劉良りゅうりやうの家にいる。

・劉伯姫 りゅうはくき

秀児の妹。六人兄弟の末っ子。本編未登場。現在、母と共に、叔父の劉良の家にいる。

・樊嫻都 はんかんと

秀児や伯升たち、二男四女の母。本編未登場。現在、叔父の劉良の家にいる。

・劉欽 りゅうきん

秀児や伯升たちの父。故人。生前は南頓県の県令だった。

(南陽劉氏(春陵侯家))

・劉嘉 りゅうか：字は孝孫こうそん、真名は春萌はるも

出身地：荊州南陽郡蔡陽県春陵郷

二十代前半の女性で、三つ編み美女。王莽によって爵位を剥奪された、春陵康侯・劉敞の姪。劉伯升・劉秀兄妹とは親戚の關係に当たり、また、新野の豪族・来歙の弟と婚姻關係にあるため、来歙とは義兄妹の關係にある。いまだにあどけない表情を残しているが、頭はよく、仁慈に篤い。女ながら春陵郷の莊園をよくまとめあげている。伯升とは、昔、長安で一緒に遊学した關係である。幼くして父を失ったため、秀児とは姉妹同然に育った。

CVイメージ：荻原えみこ

・劉稷 りゅうしやく

劉伯升の親戚で、春陵侯家の宗族の男。気が荒い性格だが、伯升のことを実の兄のように慕っている。反面、伯升を軽んじられることに我慢が出来ないなど、短気な性格でもある。（三国志で例えるなら、劉備を慕う張飛のような立ち位置であろうか）  
CVイメージ：小山剛志

・劉良  
りゅうりょう

秀児や伯升の叔父。本編未登場。父の劉欽を幼くして失った秀児を父親代わりに育てた人物だが、反面、小心者である。

・劉祉  
りゅうし

本編未登場。王莽によって爵位を剥奪された、春陵康侯・劉敞の子で、本来なら、春陵侯家の当主になっている人物。春萌の従兄。父親の代で爵位を剥奪された上に、ろくな官職にも就けず、新王朝の役人にも舐められっぱなしという不幸な男である。

（南陽の人々）

・? 農  
とんしん

出身地：荊州南陽郡新野県

新野の豪族、?家の現当主にして、劉?（伯升）・劉秀の次姉・劉元の夫。そのため、秀児にとっては義兄にあたる。冷静なところがあり、秀児を見る目も、妻である元からいろいろ聞かされているせいか、他人とは違った目で見ることができるようである。

CVイメージ：杉田智和

・?? 奉  
ほう

出身地：荊州南陽郡新野県

劉秀の姉婿・?農の甥にして、陰麗華の叔父。麗華とは本物の親子のような関係。かなりの腕力の持ち主で、また、正義感が熱く、故郷・南陽を愛する「南陽男児」である。劉秀こと秀児や、朱?こ

と茶柳とは昔からの知り合いで、友人関係である。そのため、秀児は自分よりもずっと年長の？奉のことを呼び捨てにしている。

CVイメージ：天田益男

・来歙ライシャク：字は君叔クニチカ

出身地：荊州南陽郡新野県

二十代前半の男で、劉秀こと秀児とは、従兄妹の関係（史実では劉秀の祖母が義理の母親だったらしい）。弟が劉嘉（春萌）と婚姻関係のため、春萌とは義兄妹の関係である。幼いころから秀児と過ごすことが多かったため、実の兄弟みたいな仲である。

CVイメージ：置鮎龍太郎

・朱シュ？（朱祐シュウとも）：字は仲先チュウセン、真名は茶柳チャル

出身地：荊州南陽郡宛県

秀児の幼き頃からの親友。母親が南陽劉氏の出身のため、秀児とは親戚関係に当たるが、家は豪族というよりは庶民のそれである。現在16歳。栗色の髪を肩口で切りそろえている。童顔だが、胸は秀児よりはる。頭が良く、太学時代は、いつも秀児より先を進んでいた。見かけによらず、武勇にも優れている。秀児のみならず、伯升とも親しい模様。

CVイメージ：力丸乃りこ

・？禹ウ：字は仲華チュウカ、真名は露々ルル

出身地：荊州南陽郡新野県

一人称は露々。現在、13歳。黒髪ツインテールで八重歯で碧眼。言うまでもなく、お子様体型。性格的には子供らしくわがままな所があるが、詩経を誦し、勉強も得意な天才児。自称「張良」だが：…。秀児の親友で、南陽・新野の大豪族、？家の一員。人の隠れた才能を発掘するのが得意である。秀児とは都・長安の太学に通っていた時に知り合った。三国志の終盤に登場する、？芝シの先祖。

CVイメージ：結本ミチル

（新王朝（王莽政権））

・王莽：字は巨君きょくん

高祖・劉邦以来の前漢王朝から皇帝の位を篡奪し、儒教政治を標榜して、聖人氣取りしている男。根っからの悪人ではないのだが、現実を無視した極端な教条主義政治で、国を混乱させている元凶。現在、67歳。

・莊尤：字は伯石はくせき

新の大司馬（国防省）を務める、妖美な女性。紫色の長い髪を持ち主。過去には匈奴遠征などで功績をあげ、高句麗討伐においては高句麗王をだまし討ちにしたこともある。王莽政権の中では比較的常識人で、孫氏の兵法も覚えており、軍事的才能は豊なのだが、才能の割に、主君に恵まれない、可哀そうな人である。少々、「あつち」の気があつたりなかつたり。

CVイメージ：折笠愛

（緑林系新市軍）

・朱鮪しゆじゆ

出身地：揚州淮陽郡

長い銀髪の美女。二十代前半。盗賊である緑林軍に身をやつしているが、盗賊とは思えないほどの知識の持ち主。どうやら、将来成り上がることを夢見ている模様。

CVイメージ：小清水亜美

・馬武：字は子張しちやう

出身地：荊州南陽郡湖陽県

クセのある黒髪の美女。二十代前半。酒好きの猛将。愛用の戟と、大きな酒瓶を常に携え、戦いながら飲み、飲みながら戦うなど、限



度を知らない。また、ずけずけともの言う性格のようだが、一方では、以外にも謙虚な一面があったりなかったり。

CVイメージ：田中敦子

・王匡おうきやう

出身地：荊州江夏郡新市県

荊州の盗賊集団、緑林軍の創始者のひとり。なお、同時期に、新王朝側にも同姓同名の王匡（王莽の親戚）がいるが、もちろん、別人。また、王莽の息子にも、王匡がいるが、全然関係ない。

・王鳳おうほう

出身地：荊州江夏郡新市県

王匡同様、緑林軍の創始者のひとり。なお、王莽の叔父に、同姓同名の王鳳がいたが、これについては、時代の差もあって、別人であることがはっきりしている。

（緑林系下江軍）

・王常おうじやう：字は顔卿がんでい

出身地：豫州潁川郡舞陽県

盗賊とは思えないほど、冷静沉着で、謙虚な人物。王莽末期、弟の仇を討ったため、江夏郡に逃亡。その後、王匡、王鳳たちの緑林軍に加わっていた。白髪混じりの髪だが、大剣を振るう力は全く衰えていない模様。緑林山の悪疫流行後は、「下江軍」の首領となる。CVイメージ：石川英郎

・成丹せいたん

下江軍の幹部の一人。王常と比較すると、小物臭のする男。

・張ちやう？ちやう

下江軍の幹部の一人。成丹同様、王常と比較すると小物臭のする

男。

(泰山造反軍)

・徐次子じよじし

出身地：徐州琅邪郡海曲県

自らを「猛虎」と自称する悪少年（青年）。「呂母の乱」の首謀者、呂母の右腕的存在だった男。呂母の死後、一万人に膨れ上がった海賊集団を率いて陸地に上がり、流賊となっていたが上手くいかず、泰山の麓にいる樊崇なる人物の流賊軍と合流するが、待っていたのは、さらなる苦労の日々の始まりであった。

CVイメージ：関智一

・樊崇はんすう：字は細君さいくん

出身地：徐州琅邪郡

訛りのある喋り方で、背丈も低い少女。全くの無学で、文字の読み書きさえ、ほとんどできないにもかかわらず、なぜか流民集団の長を務めている。自ら、「三老（町の会長に相当）」と号している。とにかく、「馬鹿正直」な性格。見かけによらず、勇猛ともいうが……。

CVイメージ：小桜エツ子

・蓬安ほうあん：字は少子しよじし

出身地：徐州琅邪郡東莞県

茶髪の巻き髪が特徴の、でこつぱち娘。樊崇とは同郷である。樊崇同様、強い訛りのある声の持ち主。彼女も樊崇同様、無学で文盲。CVイメージ：斉藤彩夏

・徐宣じよせん：字は驕穉きよじち

出身地：徐州東海郡臨沂県

水色の髪を頭の両側でそれぞれお団子にした少女。樊崇・蓬安と

はまた違った訛りで話す。いつも、ぼろぼろの「女性用儒服」を身に纏っている。元・村役場の獄吏で、少しだけ「易経」の研究をしていて、「この集団の中」では、一番読み書きができる。楊音と同郷で、背丈、髪型がそっくりなため、知らない人からは「双子」のように見える。

CVイメージ：石塚さより

・楊音やういん

出身地：徐州東海郡

紫色の髪を頭の両側でお団子にした少女。徐宣同様、変った訛りで話し、いつもぼろぼろの「儒服」を着用している。元・村役場の下級書記だが、徐宣ほど読み書きはできないが、家事などは得意。一応、食糧担当。背丈・恰好が徐宣にそっくりなため、知らない人は「双子」と間違うが、性格面では、徐宣ほど優しくない。

CVイメージ：吉田小南美

・董憲とうけん

出身地：徐州東海郡

黄緑色のポニーテールが特徴の少女。ぼろぼろの「儒服」を纏っているが、かなりの人見知りで、知らない人に会うと、被っていた帽子で顔を隠してしまうほど。実は、兵法家の素質があるようだが……。

CVイメージ：後藤邑子

(その他)

・呂母りよぼ

出身地：徐州琅邪郡海曲県

故人。「呂母」というのは「呂家のおっかさん」という意味のニックネームで、本名は不明。山東の豪族兼酒造業者の呂家のおかみさんだったが、県の下役人だった一人息子を些細なことで県宰(県

令)の杜先に殺害され、その復讐のために徐次子たち悪少年を抱き込み、さらには海賊たちをかこつて県の役所を襲撃。息子の仇である杜先を討ち、復讐を成し遂げた。その三ヶ月後に呂母は世を去つたが、彼女が引き起こしたこの事件、「呂母の乱」が、後に中国大陸全土を揺るがす大事件に発展するなど、彼女自身は知る由もない。

・「呉亭長」と呼ばれた少女

出身地：荊州南陽郡宛県

南陽で馬泥棒をしたグループの筆頭と思しき少女。姓は「呉」。「亭長」は地方の下級役人の役職名。赤い髪が特徴で、十代後半と思われる。馬の扱いに長け、しかもかなりの力自慢である。反面、前髪に隠れた表情はうかがいにくく、しかも、かなりの口下手とみられる。例の馬泥棒事件の後、彼女は仲間を引き連れて北の地へと向かった模様だが、そのことが彼女自身の性格はおるか、この大陸にまで影響を及ぼすことになるなど、誰も知らない。

CVイメージ：齊賀みつき

(祭遵外伝)

・祭遵さいしゆん：字は弟孫ていそん。

出身地：豫州潁川郡潁陽県

『祭遵外伝』の主人公。現在、15歳。董色の長い髪をサイドテールにした「美少女」。柔和な外見で、歌や遊びも好きだが、読書も大好きである。なぜかいつも裾の短い服を着ている。華麗なる外見に似合わず、怒りやすい性格で、喧嘩にも強い。

CVイメージ：結本ミチル

・祭午さいご

出身地：豫州潁川郡潁陽県

祭遵の兄。祭家の現当主。現在、三十代前半。腕よし、頭よしの男だが、なぜかオカマ口調である。誰よりも祭遵のことを心配して

いる。

CVイメージ：後藤哲夫

(馬援外伝)

・馬援ばえん：字は文淵ぶんえん、真名は珠寿しゅじゅ

出身地：司隸右扶風茂陵

『馬援外伝』の主人公。現在、24歳。長くて綺麗な栗色の髪が特徴の女性。本編で修や秀兎が新野に行っている現在、珠寿は涼州北地郡にて牧畜王となっている。先祖は趙の名將の馬服君・趙奢。幼いころは、強烈な劣等感の持ち主で勉強が全く身に付かなかつたが、手先が大変器用であり、模型作りなどが得意である。恐ろしいほどの無欲だが、その反面、自分の近くの空気が読めないなどの欠点がある。曾祖父の時代以来、落ちつづぶれてしまった家を建て直すことを、生涯の夢にしている。幼馴染の朱勃とは、「同じ老師のもとで学んだだけ」の関係。後に、歴史の表舞台に登場する。言うまでもなく、「三国志」に登場する、馬騰、馬超親子や、馬岱の「御先祖様」。(恋姫世界では、翠や蒲公英の御先祖様なのだが……。)

CVイメージ：小林真紀

・朱勃しゅぼく：字は叔陽しゅくやう、真名は英泉えいせん

出身地：司隸右扶風茂陵

馬援より二歳年下の女性。現在、22歳。薄紫色の長い髪が特徴。貧しい庶民の生まれだが、十歳にして「詩経」を丸暗記するなど、滅多にいない秀才であり、それが馬援に変な劣等感を与えてしまったが、朱勃本人は、「史記」にも登場する英雄を先祖にいただいた馬援のことを、大変尊敬していた。だが、それが皮肉にも、二人を「友情」と呼ぶには微妙な関係にしまっている。現在、新王朝に仕え、渭城県の県宰(県令)を勤めているが……。

正史では、朱勃が堂々と登場するのは、馬援の幼き時と、馬援の死後のみである。

CVイメージ：遠藤綾

・馬況ウマバウ

馬援の長兄。本編開始時点では故人。先祖の失態により、前漢時代は仕官できなかつたが、王莽が漢から皇帝の位を篡奪した後、二千石の高官となっていた。昔から優しい性格で、妹である珠寿の成長を見守り、時には相談にも乗っていたが、残念ながら、彼女の成長を見届けることなく世を去る。

CVイメージ：鈴木琢磨

## 登場人物紹介（後書き）

今後、新キャラが登場した場合、また書き足すことにします。

（しかし、こうして見ると、なんか異様に「男性率」が高いような……。どこが「恋姫」でしょうか？（苦笑） ですが、今後、多くの「恋姫」たちを登場させようと思いますので、よろしくお願います）

なお、現時点でどのキャラが可愛い、あるいはカッコいいかを、皆さまに語っていただければ幸いです。

祭遵外伝 其の一（前書き）

今回の物語は、ネタバレです。

じっくりお楽しみいただければ、幸いです。

それでは、どうぞ！



## 祭遵外伝 其の一

豫州よしゅう潁川ういせんぐん郡

「三国志」の物語の舞台である後漢末の時代においては、「黄巾の乱」の激戦地となったことで有名であり、また、かの曹操の軍師・荀じゆん？や郭嘉かくかの故郷としても知られる土地である。

だが、「黄巾の乱」が始まる約二百年前、この潁川の地において、一人の「恋姫」が生を受けたことは、長い年月が過ぎたためか、知る者は少ない。

。これは、その「恋姫」が、まだ世に出る前の姿を描いた物語

\*

ここは、豫州よしゅう潁川ういせんぐん郡潁陽えいよう県。

潁川郡を横切る潁水えいすいの流れの東側に位置する土地に、とある富豪の邸があつた。

その邸の持ち主は、祭家さいけという地主系の豪族である。祭家の人間は、現在のところ、誰も官職にこそ就いてはいないが、それでも家自体は昔からの名家であり、決して少なくはない財産も蓄えていることから、絶えず賓客たちが行きかう家として、地元では知られていた。

そんな祭家の現当主は、祭午さいごという、体つきのがっしりとした、いかつい顔の男であった。

彼はすでに齡三十に近いが、頭もよく、力もあるため、官職に就いても十分やっていけそうな人間だったが、なぜか官職には就いていない。

その理由は、かの聖人氣取りの王莽のやり方を見て呆れてしまい、自ら仕官を断って、地元潁陽の地主として莊園経営に精を出していたからである。

そんな祭午であったが、彼には一つ悩み事があった。

それは、彼の「妹」のことである。

「まったく、この子は、本当にどうなってしまうのかしらん？」

祭午は、その図体に似合わない、妙に上ずった声で、目の前にいる妹の姿を眺めた。

彼の妹は、名を祭遵さいじゆん、字を弟孫ていそんといい、実兄である祭午も認めるほどの美少女であった。

祭遵は今年で齡十五になるが、父も母も同じであるはずの兄であ

る祭午とは全く似ても似つかない可愛らしさと美しさを兼ね備えていた。

まず、彼女は、黒眼黒髪のいかつい兄とは違い、ぱっちりとした<sup>すみれ</sup>菫色の綺麗な瞳と、やはり菫色をした、彼女自身の腰にまで届く、綺麗な長い髪の毛の持ち主であった。

それだけではない。がっしりとして力強そうな兄とは正反対に、彼女は柔和でおとなしそうな、ほっそりとした外見の美少女だったのである。それこそ、風で舞ってしまいうくらいであり、「飛燕」というあだ名を付けられてもおかしくないくらいであった。

そんな彼女であったが、祭午には納得できないことがあった。

「まったく、あの子は。仮にも名家の子女だというのに、あの、貧乏旅芸人さんみたいな恰好はなんなの!? あんなぺらぺらで、おまけに裾まで短い服を着て! 恥ずかしくないのかしらん!？」

祭午は中庭に向かって歩いていく妹を見ながら、彼独特の喋り方で、そう言ったのである。

彼の言った通りで、祭遵が着ている服は、富豪の子女が着るそれとは到底思えないモノであった。なにしろ、ひどく薄っぺらい服で、しかも裾が極端に短いのである。

普通、大富豪の子女が着る服は、裾が長く、長ければ長いほど、家が豊かだという証であった。

ところが、現に祭遵が着ている服の裾は、やっと彼女の膝が隠れるほどの長さしかないのである。これは貧乏人が着る恰好どころか、

下手をすれば、ちょっとした拍子で「膝より上」が見えてしまう可能性もあった。

それだけを言えば、祭遵は「痴女」ではないかと疑いたくもなるが、実は、彼女がそんな人間ではないことを、兄はちゃんと知っている。

なにしろ、祭遵は子供の時から読書好きで、部屋には大量の竹簡が溢れ返っているほどののだ。その中には至聖・孔子の説いた「儒教」に関する書物も多数あり、彼女は礼儀やしきたりもきちんとな覚えつくしているのだ。だから、大富豪の子女がどのような恰好をすればよいかを、祭遵は知っていたのである。

それなのに、彼女はわざと、あのような「貧乏人」じみた恰好をしているのである。

表向きでは、その理由は「儒者らしく質素な恰好で過ごすため」であった。たしかに、祭午が見る限りでは、祭遵は服装どころか、食事も質素にしている、とても大富豪のお嬢様とは思えない暮らしぶりだったのである。

しかし、流石は兄であるだけあって、祭午は妹の恰好の本当の理由を知っていた。

それは一体何か。その答えが、今まさに、家の中庭で始まるようにしていたのである。

「みんなー！　こんにちはー！」

真昼間の中庭に、可愛らしい女の子の声が響き渡った。その声の

主こそ、祭遵である。

「こんにちはー！」

続いて響き渡ったのは、大勢の男女の声であった。下は野太い声から、上は小さい女の子の声まで、様々である。

そんな大勢の人々の姿を見ると、この董色の髪の美少女は、嬉しそうに微笑んだ。そして、よりいっそう、愛想のいい笑顔を振りまいた。

「今日も私、祭遵の歌を聞きに来てくれて、本当にありがとう！私、今日も張り切って歌っちゃうよー！」

すると、集まっていた人々が、声をそろえて、一斉に叫び始めた。

『遵ちゃん最高！ 遵ちゃん最高！』

『遵ちゃん可愛い！ 遵ちゃん可愛い！』

『遵ちゃん頑張れ！ 遵ちゃん頑張れ！』

「ありがとう！」

皆の応援を受けると、祭遵は皆に向かって手を振った。そして、皆の前で歌い、そして踊り始めたのである。

そんな彼女の姿を見て、観客たちは、老若男女を問わず、大いに盛り上がった。

ある者は一緒に歌い、またある者はひたすら祭遵の名前を叫び続け、またある者は懸命に手を振った。

皆が祭遵の歌声を聞いて有頂天になり、皆が、祭遵の踊りを見て盛り上がったのである。

そうこうしているうちに、一曲歌い終えた祭遵は、皆のほうを見ると、満面の笑顔を向けた。そして、皆に呼び掛けた。

「みんなー！ しあわせー!?!」

『しあわせー!?!』

『もう一曲！ もう一曲!』

それを聞いた祭遵は、満足げに頷くと、応えて言った。

「よーし。それじゃ、もう一曲いっちゃうよー!?!」

『おおー!?!』

そんなわけで、その日も祭家は大いに騒がしかったのである。

その騒がしさの元凶となっている妹を、兄の祭午は不安げに見つめていた。

「あの子、まさか、本当に旅芸人さんなんかにならないわよね?」

彼は妹の将来が心配でならなかったのである。

そんな兄の気苦労も知らず、その日も祭遵は皆と一緒に存分に楽しんでいたのであった。

\*

さて、そんなある日のことである。

この潁陽県に、とある一行がやってきた。

それは、でっぴりと太った男を中心とした、役人たちの一行であった。

言うまでもないことだが、彼らは一か月前に、南陽の舂陵にやってきた、あの汚職監察官たちである。

彼らは劉嘉邸での宴会の後、南陽郡の各地を回り、その一帯の豪族や農民たちを脅して、金品を納めさせたり、好き勝手に飲み食いしたりしていたのである。

そのくせ、朝廷には、

「役人をきちんと取り締まっております」

と、虚偽報告していた。

そんな彼らの「成績」に満足したのか、皇帝・王莽は、

「ならば、今度は潁川郡も頼もう」

と、彼らを移転させたのである。

そんなわけで、監察官一行は、今度は潁川郡に入ると、南陽の時と同様、そこで好き勝手放題を始めたのである。

潁川郡各地の豪族も、農民も、彼らに不満の声を挙げたかったが、それはできない相談であった。

なにしろ、彼らは皇帝が直に派遣した役人なのである。そんな連中に手を出せば、それこそ自分はおろか、一族にも害が及ぶかもしれないのだ。

だから皆、黙り込んでしまったのであるが、そうになると、監察官たちは余計にのさばったのである。なにしろ、抵抗する者がいないのだから、そうなるのは必然であった。

こうして調子に乗った彼らは、ここ潁陽にも足を運んだのである。そこで彼らが目を付けたのは、あるうことが、祭家だったのだ。

(これまでの豪族たちと同じで、この潁陽の祭家もちょっと脅迫すれば、すぐに恭順するだろう)

そう思った彼らは、祭家に挨拶と称して上がり込むや、今まで多くの豪族たちに来てきたことと、全く同じことを要求したのである。



たしかに、彼らの推測は、半分は正しかった。

祭家の当主である祭午は、彼らの態度に憤りながらも、言うとおりにした。

祭家の財力を以て、大勢の部曲を集めたとしても、朝廷を背後につけている役人たちに齒向かうことなど、不可能に近いのである。

だから、できるだけいい待遇をすることで、彼らには早く満足してもらって帰ってもらおう。その方が早い、と考えたからである。

そんな彼の心など知らずに、監察官たちは下品な笑みを浮かべながら、好きなだけ食い、好きなだけ飲んだのである。

そして酒が入って調子に乗った彼らは、祭午のことを、特にその独特の口調などを散々馬鹿にしたのである。

（こんなお下劣な役人どもにかまっているヒマなんてないわ。なんとでも言いなさい。臥薪嘗胆がしんしょうたんよ！）

祭午は侮辱されるたびに、自分にそう言い聞かせた。そして、役人たちが帰るのを見送った後、ようやくほっと一息ついたのである。

だが、彼は知らなかった。

役人たちの愚行を、黙って見過ごせない人間が、すぐ近くにいたことに……。

\*

翌日の昼前。監察官たちは、次の場所へと向かうべく、立ち寄っていた潁陽県の県城内にある役所の門から市街地へと出た。

肥満体の監察官は、豪華な仕立ての馬車に乗っており、その周りを武装した兵士、数十人が守っていたのである。

その行列の先頭には、鞭を持った召使いがいて、市民たちが馬車の前に出てくると、子どもであろうと、老人であろうと、それを鞭うったのである。

そんな風にして、いい気になった彼らが県城内の道を進んでいたときであった。

「な、何者だ！」

突然、先頭に立っていた召使いが叫んだ。

それを聞いた監察官は、重い体をよじって、前方に目を向けた。そして、見た。

そこには、一人の董色の長髪の美少女を先頭にした一団が立ちふさがっていた。見たところ、細い体格の少女はやけに裾の短い服を着用しており、その後ろには、棍棒を手に持った、様々な体格の男

たちが、十数人ほど集っていた。少女はもちろん、祭遵である。

彼女は昨日の監察官たちの無礼を見て、激怒していたのである。特に敬愛する兄を侮辱されたことが気に障ったらしい。堪忍袋の緒が切れた彼女は、賓客たちに呼びかけ、腐れ役人たちへの復讐を挑んだのである。

「な、なんだ。貴様ら！」

監察官は叫んだ。

「この私を、いったい、誰だと心得ている！」

すると、集団の先頭にいた祭遵は、悪戯っぽく笑うと、こう名乗った。

「私、『様』付けされるほど偉くないよ？ 私は祭遵。字は弟孫。見ての通り、普通の女の子です！」

そう言って、服の裾を軽くつまんで、お色気たっぷりにお辞儀をする。

それを見た、監察官の召使いが、ついにキレた。

「ふ、ふざけるなああ……！」

彼はそう叫ぶや、少女・祭遵に向かって鞭を振りおろしたのである。こんなか弱そうな少女など、ひとたまりもないだろう。その場にいた多くの人々がそう思った。だが、その予想は、外れた。

「え？」

彼が気付いた時には、あろうことか、例の祭遵によって、鞭を持つ右手の手首をつかまれていたのである。

「ダメだよ。こんなことしちゃ」

その言葉を最後に、鞭を持った召使い男の意識は途絶えた。

祭遵の放った右膝蹴りが、みぞおちを直撃したからである。

召使い男は、そのままぱったりと倒れた。

それを見た役人たちは、一瞬、静まり返ったが、やがて我を取り戻した。

「おのれ、無礼者め！」

怒りでそう叫ぶと、武器を持った役人たちが、一斉に祭遵たち目掛けて走りだした。全員、殺してやると言わんばかりにである。

すると、それを見た祭遵は、後ろに控えていた仲間たちに声をかけた。

「みんな、気をつけて！ 行くよ！」

「おおー！」

「遵ちゃんを守れ！」

「そつだ、そつだ！」

「お守りしないと、いけないんだな」

「この、くそ役人どもがー！」

こうして、潁陽城下で乱闘騒ぎが幕を開けたのである。

片方はがっちり武装した役人たち。もう片方は、みすばらしい  
恰好の集団。

数と質の両方で、誰もが役人たちが勝つと思ったのである。

ところが、どうであろう。優勢なのは、かの祭遵が率いる集団の  
方であった。

祭遵配下の賓客たちは、役人たちの繰り出す戟を軽々とかわすと、  
棍棒を振るい、相手を次々と倒していったのである。

だが、そんな男たち以上に目立ったのは、やはり祭遵本人であっ  
た。

彼女は役人たちの攻撃を、まるで踊るかのように華麗に回避する  
と、お返しと言わんばかりに反撃した。

まず、最初の一人には、顔面に拳骨を食らわし、続く二人目は回  
し蹴りで蹴飛ばした。そして、三人目の戟を飛んでかわすと、その  
まま飛び膝蹴りを顔面にお見舞いしたのである。そして着地するや  
いなや、今まさに仲間を襲いかかるうとしていた役人の背中を蹴り  
上げ、振り向きざまに、別の敵に踵落としをお見舞いした。

こうなってしまうと、動揺するのは役人たちであった。

なにしろ、ほっそりとしていて、見るからに柔和そうな少女が、ここまで派手に暴れているのである。

そんなものを見せつけられれば、動揺することも無理からぬことであった。

そして、その動揺に、隙が生まれたのである。

祭遵はそれを逃さなかった。

「ごめんね！」

そう言うと、彼女は大きく跳躍した。そして、逃げ腰だった役人の一人を踏み台にして、さらに高く跳んだのである。

それは、本当に人間にそんなに高く跳べるのかというほどの高さであった。

そのため、役人たちも、周囲の野次馬たちも、我を忘れて祭遵の方を見たのである。

その祭遵は、ただただ、まっすぐ跳び続けた。

そして、そのまま落ち始めたのである。そう、馬車上の監察官に向けて。

「いっくよー！」

そう言つと、彼女は自作の技を思いつきり叫んだ！

「祭遵跳び蹴りい！！」

叫ぶや否や、彼女は右足を前にして、監察官の顔面を、その照準に捕えたのである。

もはや、肥満体の監察官にはなすすべもなかった。

そんな、これから蹴られようとしている監察官は、蹴られる寸前、祭遵の短い裾の中を見た。そして、絶句した。

「馬鹿な……。貴様は……。ぐわあああ！？」

これが、彼の最後の言葉となった。

意識を失つた監察官は、そのままぐにやりと、馬車から転げ落ちた。

「ひ、ひいい！？」

それを見た役人たちは、たちまち大混乱に陥つた。そして、一目散に逃げ散つたのである。

「やった……」

決着を付け、地面に着地するや、そう一言だけ呟いた。

『やった。さすが遵ちゃんだ！』

『遵ちゃん最強！ 遵ちゃん最強！』

決着がつくや否や、祭遵配下の賓客たちが、そして周りで見ていた野次馬たちが、そう言って万歳をした。まるで、ときの上を上げるかのように。

「みんな、ごめんね。こんな騒ぎを起こして。そして、応援ありがとう！」

祭遵は皆の声に応え、謝罪と感謝の言葉の両方を口に出した。

その後、彼女は賓客たちを引き連れて、白昼堂々と引き揚げたのである。

こうして、潁陽県城下で起こった、くだらない乱闘騒ぎは幕を閉じたのである。

\*

「ぬ、ぬわあんですってえええ！？ あ、あの子、なんてバカなことしてくれたのよおおお！！！」

一方、この事件について、賓客から知らされた祭午は狼狽した。



当り前である。妹が監察官をばこぼこにしたなどと聞かされて、冷静でいられるわけがなかった。

「だ、旦那様！ いかがなされるのですか!？」

「お、落ち着きなさい！ と、とにかく、遵ちゃんが捕まるようなことがあったら、この家は、すべておしまいよ」

こうして、祭午は考えた挙句、問題を起こした妹が逮捕されないように、根回しを行うことにしたのである。

幸い、潁陽県内の役人には、彼の友人や知人が多かったため、そんな彼らに賄賂を渡し、県宰（県令）を説得させ、妹の逮捕を引き伸ばさせたのである。

そうこうしているうちに、聖人氣取りの皇帝・王莽が、また「恩赦令」を出したため、祭遵の犯した罪はきれいさっぱり消え去ったのであった。

その後、潁陽県の人々の間での「祭遵象」は大きく覆されることになった。なにしろ、今までの彼女の性格を知る人々は、祭遵は温厚で柔らかな性格だと思っていたからである。

それからというもの、市民はともかく、役人たちは祭家に近寄りなくなった。

なお。事件から数日後。なんとか一命を取り留めた監察官たちは、潁川を去った。皆、主に顔などを包帯まみれにしながら……。

\*

それからさらに数日後のことである。

その日も祭遵は、邸の中庭に、大勢の老若男女を集め、自らの歌と踊りを披露していた。

だが、その日の彼女は、一味違った。

なにが違うのかというと、それは、彼女の服装であった。

「あら、珍しいこともあるわね」

中庭が見える渡り廊下を通りかかった祭午が呟いた。

その日、祭遵が着ていたのは、白黒模様の、ふりふりがついた服と、大きな黒い帽子。すなわち、一般的に「女性用儒服」と呼ばれている服であった。

「あの子があれを着て歌を歌うなんて、珍しいわね。雨でも降るんじゃないかしらん？」

そう言つと、祭午は居間に入り、侍女にお茶を持ってこさせると、そこで茶を嗜みながら、中庭から聞こえる妹の声に、そつと耳を傾けた。

「みなさん！ 今日、私は、思い切って、服を変えてみました！  
！ 似合ってるかな？」

『遵ちゃん、似合ってるー！！』

『遵ちゃん、可愛い！！』

「ありがとー！ よーし、それじゃ、お礼にもう一曲歌っちゃおうよ  
！」

聞こえてくるのは、祭遵の元気な声と、客たちの声援である。その会話の内容は、ここまでは、いつも通りであった。

だが、そこからは、いつもとは違ったのである。

「それで、みんなにお願いがあるのだけど……」

不意に、祭遵が皆にそう呼び掛けた。

「実は、今日は昔の人の歌を一曲歌おうと思うの。みんなも知っている曲だと思うから、一緒に歌ってくれるかな？」

それを聞いた祭午は、おや、と思った。いつも賑やかで騒がしい曲ばかり歌う妹が、突然、かしまったように、「昔の人の曲」などと言い出すのである。

「遵ちゃん。あの子、いったい、何を歌うつもりかしらん？」

彼はそう思って、耳をすませた。

『もちろん!』

『俺たちも一緒に歌うぜ!』

「ありがとう! それじゃ、まずは私が歌うからね! 皆は後から続いてね!」

そういうやりとりの後、ほんの少しの沈黙が流れた。しかし、それは一瞬であった。

まもなく、静かに、しかし、力強い歌声が、ゆっくりと邸中に響き渡り始めたのである。

「大風起兮雲飛揚（大風起こりて雲は飛揚す）」

「え?」

祭午は耳を疑った。そして、そのまま続きを聞いた。

「威加海内兮歸故?（威は海内に加わりて故郷に帰る）」

「これは、まさか……?」

彼は、妹が今歌っている曲をよく知っていた。

「安得猛士兮守四方（安くにか猛士を得て四方を守らしめん）」

「これは、『大風歌』じゃないの?」

その通りであつた。聞こえてきたのは紛れもなく、漢の高祖・劉邦が、天下統一後に故郷で作った詩である、「大風歌」に他ならなかつたからである。

「あの子、いつたい……？」

いぶかしんでいるうちにも、歌声はだんだんと大きくなっていった。賓客たちも一緒に歌い始めたからである。

大風起兮雲飛揚

威加海内兮歸故？

安得猛士兮守四方

本当に意外であつた。まさか、あの祭遵が、こんな真面目な歌を歌うとは、思わなかつたからである。

「いつも、騒がしいと思つていたけど、こつして聞くと、遵ちゃん。貴方、本当にいい歌声じゃないの……」

とたんに、しみじみとする祭午。そんな彼をよそに、歌は何回も

繰り返されたのである。

そして、繰り返すこと十回。ついに歌は終わった。その後、しばらくの間、客たちの声援が止むことはなかった。

「ああ、流石は遵ちゃんだわ。流石は、私のお……、いや妹よ」

そう言って涙ぐみながら、お茶をすする祭午。

その時であった。祭遵の声が聞こえてきたのは。

「みんなー。一緒に歌ってくれてありがとう！ この歌、皆知ってたんだよねー！」

『知ってる！！ 知ってる！！』

『大風歌！ 大風歌！』

「よかったー。私、皆と一緒に歌えて、本当に幸せだったよ！」

そう言って胸をなでおろすような感じの声が出た後であった。祭午が予想もしていなかった一言が出てきたのは。

「あのね、みんな。実は私、みんなに言いたいことがあるの！」

『なにー！？』

「実はね、私、将来は高祖を助けた人たちみたいなの、『猛士』になつて、どーんで、大きなことをしてみたいの！ みんなはどう思う？」

それを聞いた瞬間、最後は「ブー!？」と、飲みかけのお茶を吹き出してしまった。

そんなことなどまるで知らんとばかりに、中庭の会話は続いた。

『似合ってるよ、遵ちゃん!』

『遵ちゃんなら絶対なれるよ!』

『遵ちゃん強い! 遵ちゃん強い!』

「ありがとう! それじゃ、私、猛士になれるよう頑張るから、みんなも応援してねー!」

『おう!—!』

それを聞いていた祭午はすでに顔色を失っていた。

「遵ちゃん、あの子……」

彼女は、誰に言うでもなく、言葉にならない言葉で言った。

「ああ、誰でもいいから答えてくれないかしらん? 遵ちゃん、あの子、いったい、何になるつもりなのよ! お兄さん、困っちゃうよ! いったい、どうしたらいいのよお!？」

「じつして、潁陽の日は過ぎていくのであった。

\*

祭遵さいじゆん、字は弟孫ていそん、  
穎川穎陽の人なり。 (後漢書祭遵伝  
より)

\*

柔らかな外見で、どんな女性よりも美しく、そして見かけによらない強き「美人」、祭遵。「彼女」が本格的に世に出るのは、もう少し後のことである……。



## 祭遵外伝 其の一（後書き）

恋姫紹介

・祭遵さいじゆん

字は弟孫ていそん。豫州潁川郡潁陽県の人。董色の長い髪をサイドテールにした「美少女」。柔和な外見で、歌や遊びも好きだが、読書も大好きである。なぜかいつも、裾の短い服を着ている。外見に似合わず、怒りやすい性格で、喧嘩にも強い。

・祭午たごひ

祭遵の兄。祭家の現当主。腕よし、頭よしの男だが、なぜかオカマ口調である。誰よりも祭遵のことを心配している。

今回のお話は、かなりふざけていました。  
本当にすみません。

ちなみに、正史と照らし合わせますと、祭遵が柔和な外見の人物だったことは史実ですが、実はかなりの筋肉マッチョだったという話もあり、大きな謎となっています。

分かってしていることは、光武帝・劉秀が祭遵を外見だけで気に入ったことだけです。

なお、祭遵が役人をぼこぼこにした件ですが、これは正史では地元  
の役人に対して行い、しかも、殺してしまっています。そのため、  
町の人々は祭遵のイメージを覆されて、混乱したといえます。

ちなみに、ネタのため、祭午をオカマ口調にしましたが、もちろん、  
彼は普通の男でした。うのみにしないでください。

ちなみに、祭遵をここであんなキャラにしたのは、作者の趣味半分です。  
すみませんでした。

さて、次回は、本編に話を戻します。  
それでは、お楽しみに。

## 馬援外伝 其の一（前書き）

今回は、恋姫原作のあの子たちの「ご先祖様」の物語を、勝手ながら、作らせていただきました。

正史をもとに、できるだけ「恋姫」らしく書いてみたつもりですが、みなさんの気にかどうかはわかりません。

今回、文字数だけなら、一万六千字を超えています。

読みにくいかもしれませんが、どうか、ご了承ください。

つつこみどころ満載かもしれませんが、よろしくお願いします。

なお、今回は冒頭で、初めて「恋姫原作」のキャラクターを登場させましたので、お楽しみください。

それから、その冒頭部において、今回は山の上の人さまの御作品、「真・恋姫十無双」西涼に落ちた天の御遣い」キャラクターをお借りしています。

山の上の人さま、ご協力していただき、本当に大感謝の限りです！  
ありがとうございます！

それでは、みなさん。今回もじっくりとお楽しみください！

## 馬援外伝 其の一

後漢末期

ここは、涼州武威郡。

後世、「三国志」と呼ばれる物語が始まる、まだ十年も前の話。

その晩、武威の太守・馬騰は、その日の政務を終えて、一人の母親としての時間を過ごしていた。まだ幼い我が娘・馬超と、その従妹で、我が子同然に育てている馬岱の二人を、寝かしつけていたのである。

「かあさま」

子守唄を歌ってあげていたとき、不意に、まだ幼き馬超が聞いた。

「なあに、翠？」

「あのね、わたしのごせんぞさまって、どんなひとだったの？」

「あら、突然ね。どうしたの？」

「あのね、きいてよ。きょう、きんじょの『劉』おばあさんのがきんちよがね、『おれのごせんぞさまは、こうていへいかだったんだぞ！ だから、おれはえらいんだぞ！』なんていったんだよ。わたし、どうしてかわからないけど、すっごくくやしくて……」

「あらあら。おもしろい子がいるものね」

「ぜんっぜんおもしろくないよ!」

「落ち着きなさい、翠」

馬騰はそう言って我が子をなだめると、優しく撫でてあげながら、話を続けた。

「ご先祖様がどんなに偉くても、それで威張っているようなのは、よくないことなの」

「でも……」

「いいから聞きなさい。まあ、ちょうどいいわね。せっかくだから、今夜は、翠に、『私たちの立派なご先祖様』のお話を聞かせてあげようかしら」

「わたしのごせんぞさま?」

「そう。だから、静かに聞いてくれる?」

「はい、かあさま」

「あ、たんぼぼも!」

「あら、蒲公英も起きちゃった。仕方ないわね。それじゃ、お母さん、今夜は二人に、『ご先祖様』のお話を、たくさん聞かせてあげるわ。だから、静かに聞いていてね」

『うん！』

こうしてその晩、馬騰は寢床で、愛する娘と姪の二人に向かって、ご先祖様のお話を始めたのであった。

「むかしむかしのお話です。あるところに、一人の女の子が住んでいました。その女の子は、姓は馬、名は援、字は文淵といい、明るくてきれいな髪の毛をした、とても可愛い女の子でした」

\*

時をさかのぼること、およそ二百年前の前漢末期。まだ王莽が漢の「安漢公」だった頃。

ここは司隸右扶風茂陵。

大漢帝国の黄金時代の皇帝であった、武帝・劉徹の陵墓がおかれているこの地に、その少女は暮らしていた。

「況兄さま〜！」

天下の富豪が大勢住む茂陵の、とある邸の中で、一人の幼い女の子が、おそらくは彼女の兄であろう、若い男に向かって、トコトコと走ってきた。純粹無垢な笑顔を振りまきながら。

「なんだい、珠寿？」

「きてきて〜！」

そう言つと、珠寿と呼ばれた、まだ五歳くらいの小さな女の子は、その小さな手で、自分よりもずっと大きな兄の手を掴むと、そのまま中庭の方へと案内した。

(いったい、なんだろう?)

妹に手を引かれつつ、ふと疑問を思い浮かべる兄の況。もっとも、疑問と呼ぶには、取るに足らないほど小さなものであった。

なにしろ、中庭に辿り着けば、すべてわかることであるし、その中庭は、本当にすぐそばなのである。

かくして、妹・珠寿に手を引かれているうちに、あっという間に中庭に辿り着いた況は、そこで己の妹が、どうして自分を案内したかをすぐに理解した。

「みてみて〜！」

中庭にある「ソレ」を指差しながら、珠寿がはしゃいだ。

「これ、しゅじゅがね、しゅじゅがつくつたんだよ〜！　すごいでしょう〜！」

そう言つて目をキラキラとさせる珠寿。そんな彼女が指差すものを見て、況は息を呑んだ。

妹の指差す先には、中庭一面に広がる、「芸術」であった。

あちらこちらに砂や土を盛って、小さな「丘」を作り、その「丘」や「谷間」の広がる一帯には、粘土で作られたのである。小さな丸いものがたくさん群がっており、そして、その「野原」の外側には、「柵」を模したのか、たくさん枯れ枝が、「野原」一帯をぐるりと取り囲むかのように、地面に均等に差し込まれていた。

「珠寿。これはなんだい？」

況は優しい表情で、目の前の「野原」を作った張本人に聞いた。

「これ？ これは、『ぼくじょう』だよ」

そう言うと、珠寿は中庭に降りて、解説を始めた。

「『おやま』とか、『のはら』とか、ぜんぶ、しゅじゅがつくったんだよ？ そして、これは、『さく』だよ。おうまさんとか、ひつじさんとか、うしさんとか、にげないようにしたの」

「へえ〜。ところで、そのいっぱいいる、小さいのは何かな？」

妹の解説を聞きつつ、況はあちこちに群がる粘土の塊を指差した。

すると、珠寿は胸を張って答えた。

「これは、おうまさんや、おうしさんや、ひつじさんだよ。いちばんおおきなのが、『おうしさん』で、ちゅうぐらいのが、『おうまさん』。いちばんちいさいのが、『ひつじさん』だよ〜！」



そう言つて、粘土の塊を指差しながら、一つ一つ説明する珠寿。

なるほど、確かに彼女の言う通りであつた。所詮、五歳児が作ったものの変わりはなく、粘土の塊は、どれもこれも、ただの塊でしかない。「家畜」の形をしたものなど、どこにもなかった。その代わり、彼女の言う「馬・牛・羊」ごとに、大きさを変えていたのである。

珠寿の言つとおり、「牛」は大きく、「馬」は中くらいで、「羊」は小さく作られていた。その大きさの差は、わかりやすいほど歴然としていた。このあたり、珠寿という女の子は、五歳という年齢にしては、かなり手先が器用なようであつた。

「すごいなあ、珠寿は。賢い子だね」

そう言つて兄・況は中庭に降りると、珠寿の近くに寄つた。そして、彼女の綺麗な栗色の長い髪の上から、頭を優しく撫でてあげた。

「わーい、ほめられちゃった!」

そう言つて喜ぶ珠寿。その笑みは、本当に子どもらしい、無邪気なものであつた。

だが、そんな彼女の喜ぶ姿をみて、兄・況は微笑みつつも、内心、次のようなことを考えていた。

(ああ。珠寿はせっかくいい子なのに……。ご先祖様のやったことのせいで、こんないい子が世に出られないとは……………)

彼は内心、そう思って憂えていたのである。

それはいったい何であるかを話す前に、まずはこの少女・珠寿と、その家系のことについて語らなければならぬ。

「珠寿」というのは、むろん、「真名」であり、この少女の姓は「馬」、名は「援」、字は「文淵」という。

そして、この少女・馬援や、兄の馬況たちの家である「馬家」は、富豪揃いの茂陵においても、名門中の名門と言っていていい家であった。単なる金持ちではなく、その先祖をたどっていくと、さかのぼること五百年以上昔の戦国時代に登場した、「馬服君」の称号を持つ、趙の名将・趙奢に行きつく。

趙奢はもともと徴税官の出でありながら、軍を率いる將軍として数々の戦いを勝利して名を馳せた名將で、「勿頸の交わり」で有名な蘭相如や廉頗と共に、趙国の英雄として、司馬遷の「太史公書（史記）」に名を残している人物である。

彼が「馬服君」に封じられた由来から、珠寿こと馬援たちの一家は「馬姓」を名乗っていたのである。

それほどの人物を先祖にいただいているにも関わらず、馬況がそのことを憂えているのはなぜか。それは、この「趙奢の家系」が名門中の名門であると同時に、とんでもない「いわくつき」の家系でもあったからである。

それは、名將・趙奢の死後、その息子の趙括の代の時に早くも始まった。

趙奢の息子である趙括は幼少時より兵法に通じており、ときには父親を論破するほどであったが、それは典型的な「机上の兵法」に過ぎないものだったのである。

そのため、生前の父親からも、「あれが將軍に任命された暁には、我が趙軍の敗北は必至であろう」と危惧されていたのである。

はたして、父親の言うとおり、趙括は初陣である「長平の戦い」において総大将として指揮を執ったところ、秦の名将・白起はくきに大敗してしまい、戦死。降伏した趙軍四十万人あまりが白起の命令によって坑殺くわく（生き埋め）されるといふ、大惨事を招いてしまったのである。

それだけでも十分、不名誉なのだが、姓を「馬」に変えた「趙奢の末裔」には、さらなる不運が付き添った。

それは、馬援の曾祖父・馬通うしゆの代。すなわち、漢の武帝・劉徹の治世の末期に起こった。

武帝の長男にして、後年、戾太子れいたいしと諡された、ときの皇太子・劉拋が都・長安で反乱を起こしたため、侍郎職にあった馬通は官軍の一將校として、反乱討伐に加わったのである。

高祖・劉邦が漢王朝を建国して以来、初めて都・長安で市街戦が行われ、官軍・反乱軍・市民など併せて数万人もの死者を出したあげく、皇太子は敗走。一ヶ月後に潜伏先を見つかって包囲されて自殺し、この反乱は幕を閉じた。

そして、馬通は反乱鎮圧に功があったため、「重合侯」に封じら

れた。

さらに同じ年には、馬通は四万騎を率いて酒泉から天山にいたり、西域の一国、車師国しやしこくを降すという戦功をあげたのである。

ところが、都・長安に凱旋した馬通を待っていたのは、一家を恐怖のどん底に陥れる凶報であった。

先年に馬通が討伐に一役買った、皇太子・劉拠の反乱は、実は、江充かうじゆうという、自己顕示欲の塊のような性格異常者によって、仕立て上げられたものだったことが判明したのだ。

武帝の寵臣であった江充は、かつて、皇太子・劉拠との間に因縁があつた。そのため、武帝亡き後に皇太子が皇帝の位に就けば、自分の立場は危うくなるであろうと考え、皇太子を陥れて亡き者にしようと同策したのである。

そんな江充が目をつけたのは、巫蠱ふごと呼ばれていた呪術まじないであつた。

迷信深い当時、人形と絹の文書を使った呪いで人を殺すことができると思はれており、それを行った者は極刑に処せられていた。

ことに、晩年の武帝は被害妄想が激しく、自身が病気になるたびに、「誰かが呪術まじないで朕を殺そうとしている」と、口走るほどになっていた。

そこに目を付けた江充は、都・長安のあちこちに呪いの人形と絹の文書を埋め、それに酒を注ぎ、呪いの儀式を偽装したのである。

下準備が済むと、江充は自らが巫蠱について調査すると武帝に進

言し、調査を命じられるや否や、あらかじめ仕組んでおいた人形を掘り起こし、無実の人間を次々と逮捕して、処刑していった。

そうこうしているうちに、ついに皇太子の住居の地下から大量の人形が出土したのだ。

ことは、初めから仕組まれていたのである。それに気付いた皇太子は、怒りに身を任せて挙兵すると、江充を逮捕して、その首を刎ねた。

だが、老いたる武帝には、皇太子は、武帝自身が病気で都を留守にしているときを狙って反乱を起こしたかのようにしか見えなかった。だから、我が子を「反逆者」として討伐するよう、てきぱきと命令を下したのだ。

だが、皇太子の死から一年が経ち、事件の真相が明らかになってくると、武帝は大いに後悔した。

無理もない。怒りに身を任せて、すでに還暦を迎えていた、皇太子の母親の皇后・衛子夫えいしふを自殺させ、さらには、武帝自身にとっては孫に当たる子どもたちをも処刑してしまったのだ。（余談だが、皇太子の長男には、まだ生まれただばかりの、男の赤ん坊がいて、この赤ん坊のみが、獄吏の情けで生き残ったのである。この武帝の曾孫にあたる赤ん坊こそ、この事件から十八年後に前漢第九代皇帝となった宣帝・劉詢りゅうしゆんである）

自らの手で我が子を殺してしまった武帝は、皇太子が死んだ場所に宮殿を建てて、その霊を弔ったが、その一方で、自分を騙した江充のことを激しく憎んだ。

それから始まったのは、血で血を洗う肅清劇であった。

大激怒の武帝は、皇太子を陥れた張本人である、江充の遺族を「三族皆殺し」にし、さらには江充と組んで皇太子を陥れた宦官を捕え、渭水いすいにかかる橋の上で焼き殺した。

さらには江充の徒党とみなされたものが次々と殺され、そしてついには、皇太子を追い詰めて自殺させた役人たちまでもが、恩賞を剥奪されたばかりか、一族皆殺しにされたのである。

もつとも、一番悪いのは、江充に騙された武帝本人にほかならないのだが。

さて、そうなると困ったのは、馬通たちであった。

昨年、皇太子が「謀反人」だから討てと言われたので、詔を奉じて討つたのに、一年後にはこの有り様なので、馬通の立場は極めて微妙なものになった。しかも、運の悪いことに、馬通の兄で、侍中じちゆう僕射うはくしゃ（侍従官）の職にあつた馬何羅ばからは、江充の親友だったのである。

このことが武帝に知れ渡れば、いつ殺されるかわからない。

そう思った馬何羅・馬通兄弟は、「巫蠱の獄」の三年後に、弟の馬安成と共に、武帝暗殺計画を実行に移した。

馬通と馬安成が宮殿の外で兵を集め、馬何羅は夜間に単身、白刃を懐にして宮殿に忍び込んだ。計画では、馬何羅が武帝を暗殺し、その後、馬通たちが兵を動員して宮殿を占拠。それによって、「連座」を免れることができるであろうというものであったが、誰がどこから見ても、浅はかな計画以外の何物でもなかった。

案の定、計画は失敗した。

武帝の寵臣に、もと、匈奴の休屠部の太子だった、侍中？馬都尉の金日？という者がいて、宮中に忍び込んだ馬何羅は武帝の寢室の前で、その金日？と出くわしてしまった。

その結果、逃げようとした馬何羅は背後から金日？に抱きつかれてしまい、もみ合いの末、髪の毛を掴まれて投げ飛ばされてしまい、あまりにも呆気なく捕まったのである。

こうして、あまりにもお粗末な「武帝暗殺未遂事件」は幕を閉じ、大逆罪で、馬兄弟は仲良く死刑となった。

不幸中の幸い、その子どもたちは死を免じられたが、それ以来、馬家は漢王朝から遠ざけられ、「出世できない家」となってしまったのである。

馬況が妹を見て憂えていたのは、まさにそのことだったのだ。

（この子が大人になるころには、世の中が変わっていたらいいのだけどな……）

馬況は、妹の馬援こと珠寿の小さな体、を両腕で抱き抱えてあげながら、秘かにそう思っていた。

七年後。

十二歳になつた馬援こと珠寿は、地元、茂陵にある「学校」で「詩経」を習っていた。

着慣れない「女性用儒服」に身を包み、老師せんせいが読むのに従つて、竹簡に書かれている詩経を何度も読んで覚えようとしていたのである。

だが、いくら竹簡を読んでも、老師の教えることを何遍聞いても、珠寿はあまり多くの詩経を暗記することができなかつた。

念のために言っておくが、彼女は決して脳筋ではないし、勉強嫌いでもないのだ。

文字の読み書きなど、単純な知識水準だけを見れば、名門出身だけあつて、その辺の庶民よりは、はるかに秀でていたのである。

それなのに、どうして勉強が身に入らないのかというと、それにはいくつかの理由があつた。

当時、まだ「紙」らしい紙は発明されておらず、「学校」に通う学生は、竹簡に書かれていた文章を丸暗記しなければならなかつたし、また、当時の詩経が政治的な暗号を含んでいたこともあつて、回りくどかつたのである。珠寿はそういう回りくどいものは苦手であつた。



だが、彼女の場合、もつと複雑な事情があった。

（あーあ。勉強なんかしたって、どうせ、あたしの家は、出世できないんだ……）

彼女はまだ十二歳の幼さで、早くも「出世」を諦めていたのである。

無理もない。「ご先祖様の失態」のせいで、彼女の家は、祖父の代から下級役人止まりだったからだ。実際、ついこの間に亡くなった彼女の父親もそうだったのである。

祖父の代から、「どうせ勉強しても出世できない」という意識が刷り込まれてしまっているのだから、どうしようもなかったのである。

もつとも、馬家を「反逆者扱い」していた漢王朝は既になく、王莽なる人間が立ち上げた「新」王朝の時代となっており、馬況を始め、珠寿の三人の兄はいずれも「二千石」という、高い位に出世していたのだが、幼少の頃から、彼女自身意識せずに抱いていた悲観論は、そう簡単に打ち消せるものではなかった。

それだけではない。珠寿がやる気を無くしてしまった最大の原因は、この教室にいる、一人の少女の存在だった。

「それでは、朱叔陽しゆしやくさん。昨日教えたところを、暗唱して御覧なさい」

「はい！」

老師に呼ばれたのは、珠寿の隣に座っている、彼女より少し年下くらいの、薄紫色の長い髪の毛、真面目そうな顔つきの少女であった。その少女は、姓を朱、名を勃、字を叔陽といい、珠寿の近所に住んでいる、貧しい庶民の子どもであった。

近所と言っても、家からあまり外に出歩いたことがない珠寿には、もともと面識がなかったのだが、父親の葬式の際に、その手伝いに来て、珠寿の長兄・馬況と話していたので、珠寿はよく覚えていたのである。

珠寿が着慣れない「女性用儒服」をきちんと着こなし、また、利発そうな子であったこともあって、馬況は、

（これは利口な子だな。珠寿の勉強の競争相手にちょうどいいだろう）

と、考えていた。ところが、実際にはそうはいかなかったのである。

馬況は朱勃のことを、「庶民育ちの、普通に利口な女の子」と考えていたし、珠寿もそう思っていた。

ところが、朱勃はそこらの子どもたちとは違い、大がつくほどの天才だったのである。

現に今、珠寿の隣に立っているその少女は、昨日習った所を、一字一句、余さずに、全て暗唱してのけたのである。

十歳の子どもで、まして貧しい庶民育ちであるはずの朱勃の才能

の前に、珠寿は呆然自失してしまった。

その結果、ますます強い劣等感を持つてしまったのである。

(あーあ。こんな秀才がいるんじゃ、あたしの出番なんか、どこにもないな。どうせ、あたしは役人なんて勤まらないし)

行きついたのは、そんな考えであった。

(ああ。この子は、名門なのにちっとも勉強ができないあたしのことを、白い目で見るだろうな……)

珠寿は隣に座る朱勃を見て、そう思っていたのである。

ところが、朱勃はそのようなことなど、ちっとも考えていなかった。

それどころか、「史記」に名を連ねる英雄・趙奢の子孫である馬援こと珠寿のことを、尊敬の眼差しで見っていたのである。

(あの英雄、趙奢の子孫で、しかも、やろうと思えば、何でも出来そうな人なのに、才能を鼻に掛けず、全く驕らないなんて、文淵さんは、本当に凄いお方ですね)

朱勃は珠寿のことを、そんな風に見ていたのであった。

この辺りを見ると、どうもこの両者の間には、訳のわからない空気が流れていたようである。

もっとも、その当事者である本人たちにさえ、それが何かはわか

らなかったが。

ともあれ、もともと悲観的で、その上に朱勃の才能を見せつけられて劣等感を抱いてしまった珠寿は、ある日の夜、思い切って、長兄・馬況に自身の胸の内を打ち明けた。

「況兄様。あたし、勉強とか全然できないよ。おまけに、あの子、朱勃が、すっごく頭がいいんだ。あたしが頑張らなくなっただって、あの子、きつといいお役人になって、あたしの分まで活躍してくれるよ」

「ははは」

妹が涙ながらに話すのをよそに、馬況は右手で杯を手にしながら、優しげに笑った。そして言った。

「珠寿。そんなに気にすることはないよ。いいかい。人には『大器晩成』の器の持ち主と、『小器速成』の器の持ち主とがいるんだ。兄さんが見るに、朱勃ちゃんは、『小器速成』の器だと思うな。たしかに今は、すっごく頭がいいだろうけど、多分その程度。せいぜい、県令止まりだと思うよ。逆に珠寿は、兄さんが見るに、『大器晩成』の器だと思う。珠寿なら、将来、きつと大物になって、歴史に名前を残すと思うよ。そのうち、朱勃ちゃんの方から、珠寿にいろいろと教えを請いに来るはずだと思うよ」

「そつ……、かな……?」

「ははは。兄さんとしたことが、ちょっと難しい話をしてしまったね」

そつ言っただけを励ますと、空いている左手で、そつと頭を撫でて

あげる馬況。だが、珠寿はまだ納得できていないようであった。

「だけど、況兄様。あたし、勉強とかよりも、ここから遠い田舎で、牛とか馬とか、羊とかを飼って暮らした方が、似合っていると思うんだよ。どうかな？」

「ははは。なるほど。珠寿は、牧場経営がしたいのか。たしかに似合っているかもね。でも、きつと大変だよ？」

「大丈夫だよ。あたし、頑張るから」

「そうか。なら、珠寿はやりたいことをやりなさい。兄さんは、全力で応援するよ。だから、もう少しだけ、勉強も頑張ってくれるかい？」

「うん！」

こうして珠寿は、将来、牧童になることを決意すると同時に、あと一息勉強を頑張ることを、兄に誓った。

だが、残念ながら、馬況は珠寿の成長ぶりを、ついに見届けることはなかった。

なぜならば、数カ月後、馬況は流行り病のために、この世を去ったからだ。

珠寿は悲しみをこらえながら、喪に服し、それが済むと再び、あまり好きではない勉強生活に戻らなければならなかった。

\*

## 五年後

ときに珠寿は十七歳。そして、例の秀才児・朱勃は十五歳になっていた。

あれから、二人の間柄はちつとも変わっておらず、「同じ学舎で学んだ者同士」以外の何者でもなかった。

そんなある日のこと、例の朱勃に、右扶風の役所から声がかかったのである。

聖人氣取りの皇帝・王莽は、天下に賢人を求めており、茂陵一の秀才として名高い朱勃が、右扶風の長官の目に留まったのである。

こうして右扶風の役所に呼ばれた朱勃は、さっそく役職を頂いて帰ってきた。

なんと、彼女は都・長安近郊の渭城いじょう県の「仮県宰（仮県令）」に任命されたのである。

念願の官職を頂き、有頂天になって茂陵に帰ってきた朱勃は、このことを、今までお世話になった人たちに報告して回った。

そうして一通り回り終えたのだが、家へ帰る途中、朱勃は一人だけ、まだ会えていない人がいることに気付いた。

そう、馬援のことである。

「文淵さん……」

朱勃は、この五年間、ほとんど話もしなかった憧れの人の字を呟いた。

「もしかして、私が先に仕官しちゃったから、怒っているのかな……?」

そんな独り言を口にしながら、とぼとぼと歩いていたときであった。

「怒っているだつて? 誰が?」

不意に、後ろから声をかけられた。

「え?」

朱勃は咄嗟に後ろを振り返った。そして見た。

「よっ!」

朱勃の瞳に映ったのは、夕陽を背にして立っている、一人の年長の少女。言うまでもなく、馬文淵その人だったのである。

「文淵さん!」

「おいおい、もつと肩の力抜けよ」

慌てて律儀に挨拶する朱勃に対し、馬援こと珠寿は、微笑みながらゆっくりと歩み寄った。そして、祝辞を口にした。

「おめでとう、叔陽。お前、やっぱ、すげえんだな」

「い、いや、その。それほどでもない、ですよ!？」

そう言って、朱勃は顔を夕焼け並みに赤くして、そっぽを向いた。そんな彼女の姿がおもしろかったのか、珠寿は大いに笑った。

「ははは！ 緊張しすぎだぞ！ これから役所勤めする者が、恥ずかしがってどうすんだ」

「そ、そうですね!」

珠寿が笑うのを見ているうちに、つい可笑しくなってしまう、朱勃も一緒になって笑った。夕焼けの中、声をそろえて笑う二人の少女。それは、出会って以来、今まで一度もなかった光景であった。

「さてと」

満足するまで笑い続けた後、珠寿は懐に手を突っ込むと、そこから木でできた、何か小さな物を取り出した。そして、それを右手に乗せると、朱勃の方に向けて突き出したのである。

「なんですか?」



「これをお前にやるよ。これ、お前の仕官祝いな」

そう言つと、おそろおそろ出された朱勃の両手の上に、それを乗せた。

「うわあ……!?!」

朱勃は息を呑んだ。珠寿から手渡されたものは、「馬の木製模型」だったのである。足の蹄ひづめの形といい、頭から広がる鬃たてがみといい、まるで本当に生きて動きそうなほど、精巧に作られた模型だった。

「あたしが作つたんだ」

珠寿が得意気に話した。

「あたし、お前みたいに頭良くないけど、小さい頃から、手先だけは器用なんだ。ま、あたしの出来ることは、こんなものくらいだけ」  
「ど」

「すごいです!」

朱勃は感激して叫んだ。

「文淵さん、ありがとうございます! これ、ずっと、ずっと大切にしますね!」

「よせよ。照れるじゃないか」

そう言つて笑つ珠寿。それにつられて、朱勃も再び笑った。

「いやー、しかし、思えば、お前とこうやって話したのは、初めてだったな」

ふと、珠寿がこんなことを口走った。

「あ、はい。言われてみれば、そうですね」

朱勃が相槌を打った。たしかにその通りであった。二人とも、出会ってすでに、五年目になるのに、面と向かって話したことは、今、この場が初めてだったのである。

「いやー、お前が赴任する前に、こうして話せてよかったよ」

珠寿は微笑みを浮かべながらそう言った。

「そうですか？」

「ああ。なんとなくだが、あたしはもう二度と、お前とは、じっくりと話などできないような気がするんだ。だから、お前がここに来るのを待ってたんだよ」

「二度と……？」

朱勃は疑問に思いかけたが、すぐに口をつぐんだ。

珠寿が「赴任したら二度とじっくり話ができない」と言ったのは、この広大な大陸では、決して過言ではないからである。

「ま、機会が会ったら、また会おうとするか。とりあえず、長生きしとけば、また会えるだろうし。それじゃ、仕事頑張れよ！ 叔陽！」

そう言つと、珠寿は、そろそろ時間だと言わんばかりに、踵を返して歩き始めた。後ろに向かつて手を振りながら。

朱勃はそんな珠寿の背中を見送り続けていたが、突然、何を思ったのか、大声で珠寿を呼びとめた。

「文淵さん！」

「ん？」

いぶかしげに振り向く、珠寿に向かって、朱勃は叫んだ。

「……せんです……！」

「ん？」

「英泉えいせんです！ 私の真名は、『英泉』です！」

そう言つて、自分でもわからないうちに、涙を流しながら、自身の大切な「真名」を名乗る朱勃こと、英泉。

呼び止められた珠寿は、しばらく足を止めていたが、やがて、くると英泉の方に振り向いた。そして微笑みながら言った。

「英泉か……。いい名前だな。しっかり覚えておくよ」

そう言つと彼女は、また帰路の方へと振り向いたが、ふと、足を止めた。

そして、今度は振り向かずに行った。

「珠寿だ。それが、あたしの真名だ。お前なら、もう、覚えてたろ？」

「……はい！」

こうして真名を交換し合った二人は、夕陽が沈む中で別れたのである。

馬援（珠寿）と朱勃（英泉）。友情と呼ぶには微妙な関係だった二人が、真正面から初めて語り合った瞬間であった。そして、同時に、これが真正面から語り合う、最後の会話となった。

\*

それから一年後

十八歳になった珠寿は、ついに役人として仕官することができた。

もつとも、彼女が就いたのは、地方を巡察する役職である、「督郵<sup>ゆゆう</sup>」という、あまり位の高くないものであった。

来る日も来る日も、地方の囚人を、郡の「司命府」まで護送する

仕事ばかりをやらされるのである。

そんなある日のこと、珠寿はその日も一人の囚人を司命府まで送り届けるよう、命令された。そして、その日の囚人は、白髪で、よぼよぼの老人であった。

なんでも、人を傷つけたという理由で捕まったらしい。

しかし珠寿には、その老いたる囚人が、そのような罪を犯したような人間には到底見えなかった。

（こんなよぼよぼの年寄りが、どうやってたら他人にげがなどさせられるんだ？）

疑問に思った彼女は、思い切って、囚人に聞いてみた。

「よお、じいさん。アンタ、どうしてまた、捕まっただんだ？」

普通にそう聞いたのである。すると、聞かれた瞬間、老人はボロボロと涙を流し始めた。そして、よぼよぼの年寄りのそれとは思えない、はっきりした声で言った。

「お、お役人様。私は、本当に何もしていないのに、捕まっただんです」

「な、なに!？」

どういつことだと、説明を求める珠寿に向かって、老人は語り続けた。

その後、老人は長々と語り続けてくれたのだが、その話を要約すると、次のようなものであった。

老人の家は貧しく、そのために一人娘をとある大地主のもとに奉公に出していたのだが、数日前、その娘が死んだという話を聞き、急いでその亡骸を引き取りに行った。

ところが、地主の方では、老人が引き取りに来るより前に、娘の亡骸を勝手に葬ってしまったのだ。

何かがおかしいと、不審に思った老人は、そのことを地主に問い詰めたのだが、地主は怒って逆上し、老人を追いかけてまわした。

その際、地主は何かに躓いて勝手に転び、邸の二階の階段から転げ落ちて大怪我をした。

その怪我が、なぜか老人の仕業だということになり、地主の使用人たちに取り押さえられた老人は、そのまま役人に引き渡され、囚人にされてしまった、というのだ。

「なるほど、そりゃあ、災難だな」

珠寿は気の毒そうに言った。

「はい。悪いのは全て、向こうの方だといいますが、誰も、私の言うことを信じてくれません」

老人は相変わらず泣き続けたままであった。

しばらくの間、珠寿は黙ってそれを眺めていたが、ふと、口を開

いた。

「おい」

「は、はい？」

「じいさん。アンタの顔を見せてくれないか？」

そう言うや否や、珠寿は相手の返答も待たずに、老人の顔を覗き込んだのである。

どれくらいの時が経ったであろうか。もう、十分すぎるほど覗き込んだ後、珠寿は顔を上げた。そして、驚くべき行動に出た。

「どうやら、じいさん。アンタは嘘ついていないみたいだな。よし、解放してやるよ」

そう言っつて、懐から鍵を取り出すと、老人の手枷の鍵穴に差し込んで回したのである。手枷が外れ、地面に落ちて音を立てたのを見て、両手が自由になったばかりの老人本人でさえも、何が起こったのか、わからなかった。

だが、自分自身が自由になったことを理解すると、老人は今まで以上に涙を流しながら叫んだ。

「お、お役人様！ いいのですか!？」

「いいんだよ。アンタには罪は無いんだろう？ なら、無罪放免つてことだよ」

「あ、ありがとうございます！　で、ですが、お役人様！　お役人様はどんなされるのです！？」

老人は感謝しつつも、珠寿のことを心配した。当然である。囚人を護送中に、勝手に釈放すれば、督郵である珠寿が罪に問われることは必至だからである。

だが、珠寿はしれっとした顔で言った。

「別にいいんだよ。どうせ、督郵なんてつまらない仕事、ちよつど飽き飽きしていた所だ。こんな仕事、もう辞めてやるよ！」

言うや否や、珠寿は首から吊り下げていた、督郵の印綬を外すと、

「こんなもの、ばーいだ！」

と言って、道端に投げ捨ててしまった。

「ははは！　あー、いいことすれば、清々するなー！　それじゃ、どこかいい所で、健気に生きるよ！」

あんぐりと口を開けている老人を後目に、その場を去ろうとする珠寿。しかし、またしても老人が呼び止めた。

「お待ち下せえ！」

「なんだよ？」

「その、私はもう歳で、足腰が弱くて、あまり遠くまで歩けないのです……」



「なんだ、そういうことか」

珠寿は頷いた。確かに、老人はあまり遠くまで歩けそうにない。ましてや、逃亡生活など、できそうにないようだった。

しばらく考えた後、珠寿はそのまま老人の方に歩み寄ると、老人に背を向け、その場でしゃがみこんだ。

「ほら、来いよ、じいさん」

「は、はい？」

「アンタ、足腰弱いんだろう？　なら、アタシがおぶって行ってやるよ」

「い、いいのですか！？　そこまでして頂いて！」

「なにやってるんだよ！　さっさと乗れ！　でないと、他の役人に見つかっちゃうぞ！」

「は、はい！　では、遠慮なく……」

こうして、珠寿は老人を背負ったまま、やや北の方へと向けて出発した。

「あーあ。まさか、このあたしが、『お尋ね者』になるとは思わなかったな。こんな話を聞いたら、朱勃……、英泉のヤツ、きつと呆れるだろうな……」

歩きながら彼女は、一年前に別れた英泉のことを思い浮かべていた。

「おわつと!？」

「× !？」

「あ、お役人様。すみません。手が滑ってしまいました。いやー、しかし、お役人様はあまり大きくないみたいですね。私の亡き娘の方がずっと……」

「おい、じいさん。やっぱり役所に連れて行ってやるのか……?」

「ひつ、そ、それだけのご勘弁を！」

「わかったら、じっとしてやがれ！」

「は、はい!」

(畜生! どいつもこいつも、小さい小さい言いやがって! あたしは『大器晩成』なんだよ!)

道中、こんなやりとりがあつたことは、別の話である。

なお、督郵が囚人を逃がし、自分も一緒に逃走したという話は、当然ながら、司隸中の役人たちの間に広まつた。

当然ながら、そんな話を聞いた役人の中に、涪城県の仮県宰である朱勃こと、英泉も含まれていた。

だが、彼女は珠寿が考えていたように、呆れてなどいなかった。

それどころか、

「さすが、珠寿さん！ 思い切ったことをする人ですね。おまけに、囚人が可哀そうだから逃がすなんて、本当に慈悲深くて優しい人だなあ」

と、以前にもらった「馬の模型」を前に、感心して目を輝かせていたのであった。

\*

それから六年後

ここは涼州北地郡。せいしゅうほくちぐん

司隸と涼州の境界付近にある平原地帯にて、二十四歳になった珠寿は念願の牧畜を営んでいた。

六年前に囚人と一緒にこの地に逃げ込んだ彼女は、いい機会だと言わんばかりに、そこで生活をすることにしたのである。

珠寿の罪状自体は、聖人氣取りの王莽が頻繁に出した恩赦令のた

めに、とつくに帳消しとなっていたが、彼女は故郷である右扶風に帰ろうとは思わず、北地に留まることにした。

もともと余所者の亡命者であったため、最初は大変苦労したものであったが、彼女はそれを耐え抜き、今では馬・牛・羊を併せて数千頭も所有する、「牧畜王」となっていた。

「やっぱりあたしは、役人なんかより、こっちの方が向いていたんだ。もっと早く、こういう仕事があったな」

二十代にしては、まだ十代後半くらいの顔立ちのままの彼女はそう言つて、日々、馬にまたがっては家畜を追いかけて管理し、牧歌生活を楽しんでいたのである。

おまけに彼女は家畜を丁寧扱ったので、年が経つごとに、家畜の数は増え、それに従つて、収益も鰻登りに増えた。

しかし、彼女は純粹に牧畜を楽しんでいたため、全く贅沢をしなかつたのである。それどころか、どうやら彼女の頭からは、「欲望」の二文字が欠如していたようだった。

せつかく収益が増えて儲かつて、彼女はそれを必要以上には使わず、余つた分を、家の使用人や近所の貧しい者、訪ねてきた友人・知人たちに分け与えたのである。

そのため、とある友人が、彼女にどうして銭を貯めないのかと聞いたことがあった。

すると、珠寿は、きりつとした表情で、こう答えたのだ。

「どうして金を貯めないって？ 決まっているだろ。儲けた金は、人にやることができるから、いいんじゃないか。それができないやつは、単なる『守銭奴』だ」

そんな話が伝わるや否や、それを聞きつけた人間が次々と集まってきた。珠寿の牧場で働きたいと頼み込んできたのである。

珠寿はそういった人たちをどんどん受け入れたので、牧場はますます大きいものになっていった。しかし、珠寿は、

「どうしてあたしの所にばかり、こんなに大勢集まるんだ？ 他にも牧場はあるのに」

と、喜びつつも首をかしげていた。どうやら彼女には、自分自身がどれだけ他人から人気があるのかということが、わかっていないようであった。

それはともかく、そのようにして、珠寿は自覚せずして、大勢の賓客を養う一大侠となった。

そんなある日のことである。

「ふー、今日もよく働いたな」

その日の仕事を終え、夕陽が沈む中、珠寿は自分が住む邸へと帰ってきた。

「お帰りなさいませ！ ご主人様！」

邸の玄関から中に入るや否や、数人の「侍女」が、暖かく出迎え

た。

「ああ、ただいま」

珠寿はそう言つて挨拶を返すと、被つていた帽子を脱いで、侍女の一人に手渡した。牧場で働くようになって以来、珠寿は従来の「漢服」を脱ぎ、代わりに羊の毛皮で作られた上着と帽子、それから「胡服」(現代で言うところの乗馬ズボン)といった服装を愛用するようになっていた。関中や中原では「胡族(遊牧民)」の恰好であると忌み嫌われている服装ではあるが、実際に着てみると、軽くて動きやすく、寒暖の差が激しいこの土地では過ごしやすい恰好だったし、帽子は強い日差しから顔の肌を守ってくれるし、なによりも、胡服は馬に乗る時、絶対に欠かせないものであった。(珠寿いわく、「変なところが痛くならないとのこと」)

それはともかく、侍女に帽子を渡した珠寿は、ふと、何気ない一言を言った。

「いやー。こいつは本当に役に立つよ。なにしろ、強い日差しから頭を守ってくれるからな」

「そうですね。おかげで、ご主人様は、今日もほっぺたつるつるですからね」

侍女の一人が、上手にお世辞を言った。

「ははは。あたしは全然若いから、まだまだ気にする歳じゃないよ。ま、どのみち、何十年もすれば、あたしも、お前たちもみんな、ばあさんだからな」

そう言つて、珠寿は冗談交じりに笑い、つられて侍女たちも笑つた。気の済むまで笑つた後、珠寿は笑顔を絶やさないうまま、言葉を繋げた。

「ま、あたしは歳を取らうと、取るまいと、気にしないよ。いいか。若かろうと、歳を取らうと、富豪であろうと、貧民であろうと、人つていうのは、志を強く持たなくちゃ、生きていけないからな。『丈夫の志を為すや、窮しては当に益々まさ（ますます）堅かるべく、老いては当に益々まさ（ますます）盛んなるべし』だ。お前たちも覚えておけ」

「はい！」

「さてと、今夜のご飯はなにな」

そう言つて食卓のある部屋へと行こうとしたときであつた。

「あの、ご主人様」

侍女の一人が、そつと口を聞いた。

「ん？ なんだ？」

「つかぬことをお聞きいたしますが、ご主人様の『志』とは何か、よろしければ、私たちにお話し願えませぬか？」

「なんだ、そついついことか」

照れくさそうに、わざとらしく髪をかくと、珠寿は語り始めた。

「別に、『志』と呼べるような立派なものじゃない。あたしがやりたいと思うことは、ただ一つ。あたしの家の『汚名』を晴らすことだ」

「『汚名』、ですか」

「ああ、そうだ」

きよとんとする侍女たちをよそに、珠寿は語り続けた。

「昔、あたしのひいお爺さんが、とんでもなく悪いことをして、家名を傷つけてしまったからな。それ以来、あたしの実家は、落ちつぶれてしまっているんだ。でも、それも、あたしの代で終わらせるもつと小さい時、あたしはそう決めたんだ。どうやって、とかは聞くなよ。正直、今でもその方法がわかっていない。ま、役人勤めは向いていないし、そんなことで、この汚名が晴らされるとは思えないし」

「それなら、『この国一の牧畜王』になることを目指されてはいかがですか？」

「ははは。お前、おもしろいことを言うな。たしかに、それもいいかもしれないな。だけど、ちょっと違う気もするんだ。まあ、いいか。あたしが年老いて死ぬまでにやればいいだけの話だしな。さてと、それよりご飯食うぞ」

「は、はい！」

こうして、北地の夜は更けていったのである。



\*

馬援ばえん、字は文淵ぶんえん、扶風茂陵の人なり。其の先の趙奢ちやうしやは趙の將と為り、号して馬服君と曰う。子孫因つて氏と為す。

\*

北地の牧畜王・馬援が、本格的に、歴史の表舞台に姿を見せることとなるのは、もう少し先の話である。

## 馬援外伝 其の一（後書き）

### 恋姫紹介

#### ・馬援ばえん

字は文淵ぶんえん。真名は珠寿しゅじう。司隸右扶風茂陵の人。現在、二十四歳。長くて綺麗な栗色の髪が特徴の女性。本編で修や秀児が新野に行っている現在、珠寿は涼州北地郡にて牧畜王となっている。先祖は趙の名將の馬服君・趙奢。幼いころは、強烈な劣等感の持ち主で勉強が全く身に付かなかつたが、反面、手先が大変器用であり、模型作りなどが得意である。恐ろしいほどの無欲だが、反面、近くの空気が読めないなどの欠点がある。曾祖父の時代以来、落ちつづぶれてしまった家を建て直すことを、生涯の夢にしている。幼馴染の朱勃とは、「同じ老師のもとで学んだだけ」の関係。後に、歴史の表舞台に登場する。言うまでもなく、「三国志」に登場する、馬騰、馬超親子や、馬岱の「御先祖様」。（恋姫世界では、翠や蒲公英の御先祖様）

#### ・朱勃しゅぼく

字は叔陽しゆくやう。真名は英泉えいせん。司隸右扶風茂陵の人。馬援より二歳年下である。薄紫色の長い髪が特徴。貧しい庶民の生まれだが、十歳にして「詩経」を丸暗記するなど、滅多にいない秀才であり、それが馬援に変な劣等感を与えてしまったが、朱勃本人は、「史記」にも登場する英雄を先祖にいただいた馬援のことを、大変尊敬していた。だが、それが皮肉にも、二人を「友情」と呼ぶには微妙な関係に仕上がっている。現在、新王朝に仕え、渭城県の県宰（県令）を勤めているが……。

正史では、朱勃が堂々と登場するのは、馬援の幼き時と、馬援の死後のみである。

(登場人物紹介)

・馬況ばききょう

馬援の長兄。前漢時代は仕官できなかつたが、王莽が漢から皇帝の位を篡奪した後、二千石の高官となっていた。昔から優しい性格で、妹である珠寿の成長を見守り、時には相談にも乗っていたが、残念ながら、彼女の成長を見届けることなく世を去る。

いかかでしたでしょうか？

今回は、本当に難しかったです。

馬援の世に出る前の話を書くために、わざわざ時代を数百年もさかのぼらなければならなかつたので、ものすごく苦労しました。

しかも、単なる知識ではなく、「小説」にするのは、本当に骨が折れます。

それでも、これを読んで、楽しんでくださる読者の方がおられる限り、僕はこれからも、しっかりと書いてまいります！

なお、この物語は、「恋姫設定」にしたらどうなるかというお話なので、本物の馬援のお話を知りたい方は、別の本を読んでいただくことをお勧めいたします。

僕にとってうれしいのは、これを機に、みなさんが、この時代のことと、興味を持っていただけることです。

それでは、次回こそ、新野を舞台に、本編を描いてまいります！

それでは、次回をお楽しみに！

追伸

最後にもう一言。

山の上の人さま、本当にありがとうございました！

間章其の三 姉妹さまさま（前書き）

新年明けまして、おめでと〜ございます！  
今年も、よろしくお願いします。

投稿が遅れ、ご迷惑をおかけしました。

本当に申し訳ございません。

これからも、「光武帝紀」をよろしくお願いします！

### 間章其の三 姉妹さまさま

南陽郡某所

春陵郷から言うほど離れていない所にある、小さな木こり小屋の中に、一人の男が大の字になって眠りこけていた。

その男の身なりは、お世辞にも立派とは言えない。頭髪は乱れていて、顎には無精髭を生やし、着ている服も、泥と汗で汚れ、異臭さえ漂わせていた。

だが当の男、劉伯升は、そんなことも気にする様子はなく、大いびきをかいて寝ていた。すでに日は高く昇っており、小屋の窓からは木漏れ日が差し込んでいたのだが、まったく気にしている様子はない。今の彼は、誰が見ても、ただのだらしない男にしか見えない。

この男こそ、まさに現在、「国家転覆」の企てと、「漢王朝再興」の壮志とを胸の内に描いている「夢想家」であると言われて、誰が信じることができようか。

それはさておき、そんなだらしない姿を隠そうともせず爆睡している劉伯升であったが、そんな彼の「睡眠時間」は、間もなく終焉が訪れた。

「この！ 人さまの苦勞も知らないで、幸せそうに眠りこけやがって！ とつとつと起きやがれ、なのです！！」

小屋の中に入ってきた、一人の少女によって、何の前触れもなく、顔面に足を乗せられたからである。

「いてえ!？」

寝耳に水と言わんばかりの不意討ちに、伯升は跳び起きると、すぐに自分を無理やり起こした相手の顔を見た。

「やっと、お目覚めなのですか？　兄様<sup>えん</sup>」

伯升の視線の先にいたのは、妹の劉秀こと秀児と同じ蒼い髪の、十三、四歳くらいの少女だった。まだ幼さを残した童顔で、彼女自身の長い髪の毛を、一本の三つ編みにしたその少女は、ちょっと見ただけならば、伯升の親戚にあたる劉嘉こと春萌を小さくしたようにも見える。

だが、その少女の口調は、春萌のような優しい感じではなく、明らかに「上から目線」な雰囲気か漂っていた。

もともと、目の前のだらしない男相手なら、まったく問題にはならないであろうが。

「さんざんに迷惑をかけておいて、自分は夜が明けても、ぐーすか眠りやがるのですか？　いい加減にしゃがれ、なのです!」

「まあ、待て。そうカツカするな、<sup>しゅうわ</sup>絲児華」

頭から火が噴き出すごとく、顔を真っ赤にして怒鳴り散らす少女を嗜めようと、伯升は少女の名を呼んだ。だが、それは火に油を注ぐ行為に等しかった。

「お前みたいな、『親不孝者』に、『真名』で呼ばれる筋合いがない、なのです！」

「どうやら、『絲児華』というのは「真名」だったらしく、呼ばれた瞬間に、少女はますます怒ったのだった。それでも、劉伯升自身は反省する兆しさえ見せず、あたかも気の抜けたような声で返した。

「へいへい、わかった、わかった。なら、伯姫はくきと呼ばばいいんだろ、伯姫と呼ばば」

「返事は一回でいいのです！」

「へいへい……」

こんな有り様なので、少女・絲児華しごゑこと、劉伯姫りゅうはくきはますます苛立ちを覚えたが、彼女自身、すでに伯升に遊ばれていることに気が付いたのか、このままではキリがないと思い、いったん口をつぐんだ。そして、こんどは嫌味を乗せた声で、伯升に向かって言った。

「まったく、お前の『可愛い妹』さまが、せつかく心配して、面倒見に来てやったというのに、？兄様は、いつも私のことをいじめやがるのです。お前なんか、とつととくたばってしまえ、なのです！」

「『可愛い妹』なあ？ お前みたいなガキが、冗談もほどほどにしろってんだ、まったく……」

伯升は嫌味に対して嫌味で返した。この男は、本当に人で遊ぶのが好きなようである。



そんな「兄」を前に、「妹」である伯姫こと絲児華は、積もりにも積もった苛立ちをぶつけるがごとく、両手に持っていた包みを、どんと床に置いた。それはそれは、威勢のいい音だった。

「黙りやがれ、なのです！」

兄である伯升に向かって出せる限りの大声を浴びせ、一息ついた後、絲児華は打って変って、やや小さめの声で語りかけた。もっとも、上から目線な口調は、全く変わっていなかったが。

「まったく、？兄様を相手にしていたら、本当に命がいくつあっても足りないのです。だから、私は用を済ませたら、さっさと帰るのです」

「おう。終わったらさっさと帰れ。で、その用とはなんだ？」

「まったく、こいつは……。まあ、いいのです。用は三つ。一つは、お前みたいな『親不孝者』の薄汚いゴロツキでも、私の実の兄なのです。だから、ここに食事を置いて行くのです」

そう言っただけで、先程床に置いた包みを、兄のすぐ目の前に置いた。些細な事件が原因で、官憲から追われている兄を気遣って、彼女はわざわざ差し入れに来たのである。だが、彼女は兄から感謝の言葉を言われることなど、期待していなかった。

「おう。ありがとよ。そこに置いて行ってくれ」

実際、そつけない返事だった。だが、いつものことなので、絲児華は無視して話を進めた。

「二つ目は、秀姉様のことなのです」

「おう、秀児か。あいつは無事か？」

「はい。つい先日、新野の？家から、秀姉様直筆の書簡が送られて来たのです。『僕も修くんも、雪しん（劉元）姉様たちと一緒に、元気にやっているよ』とか言っていてやがりましたが」

「ああ、なんだ。二人とも無事に姉上の所に辿り着けたんか。まったく、心配掛けさせやがって……」

（そんな状況に秀姉様を追い込みやがったのは、どこのどいつなのですか！？）

「糸児華はそう思ったが、あえて言わない。時と場合によっては、『沈黙は金』である。そういうわけで彼女は、そんなくだらない突っ込みよりも、用件の方を優先することにした。

「それから、三つ目。秀姉様からの書簡には、『あのことについて、どうすればいいか、聞いてきてくれないかな』、と書かれていたのです。『あのこと』って、なんなのですか？ また、何か変なことを考えていやがるようなのですが」

「お前は知らなくていいことだ。そうだな……」

そう言っつて伯升は珍しく口をつぐんだ。秀児の言う、「あのこと」とは、「打倒王莽」「漢王朝再興」の反乱計画以外のなにものでもない。そして、伯升は秀児と姉の劉元以外の家族には、そのことは話していなかった。同じ妹でも、口の固い秀児と違い、目の前の糸児華に向かつて、そんな恐ろしいことを話せば、取り乱して、たち

まち家族の人間に言いふらしてしまうことくらい、目に見えたことである。そうになると、秀児への伝言は、絲児華にその意味を悟られないようにしなければならぬ。

幸いなことに、絲児華は秀児と違い、歴史の話などには詳しくない。

それを思いついた伯升は、「過去のお話」を引用して、簡単な「暗号」を作ることにした。

「よし。秀児には、こう返事を送っとけ。『俺も近いうちに、農の家に飲みに行く。それまで、陳勝・呉広（\*）の昔話でもして待ってる』とな」

「どういう意味なのですか？」

「なんでもいい。俺の言った通りに、送り返せ。それから、このことは、母上や叔父上、それから仲のヤツには言つなよ。ほら、忘れないうちに、さっさと行けや」

そう言うと、伯升はごろんと床に寝転がると、もう興味が失せたとわんばかりに、絲児華に向かって後手に手を振った。

「はい、さっさと帰らせていただくのです。ご飯は残さずに、きちんと食べやがれ、なのです」

彼女はそのまま小屋の外へと出て行こうとしたが、何を思い出したのか、ふと立ち止まると、だらしのない兄の方を見もせず、そのまま口を開いた。

「いい忘れるところでしたが、玉と芙の二人は、先日、茶柳さんと一緒に雪姉様の所に行きやがったのです。これで伝えたいことは全部、言わせてもらったのです」

そう言つと絲児華は、今度こそ小屋を後にした。

（まったく、？兄様は、いつつもああなのですから。私や母様、仲兄様や良叔父様の苦勞も、ちよつとは考えやがれ、なのです）

道中、絲児華はそんなことを考えていた。たしかに彼女の言つとおりである。ろくに働きもせず、ゴロツキ連中を困い、家も顧みない。果てにはいらん騒動まで起こす。そんな親不孝者が、この世のいったいどこにいるのか。悩みの種は尽きないものである。

（まあ、いいのです。あの野郎は、今日は私の『最高の料理』を、しっかり食いやがるのですから。それにしても……）

なにやら、不敵な笑みを浮かべつつも、ふと、疑問に思ったことを、頭に描く。

（『陳勝・呉広の昔話』って、なんなのですか？ 私には、さつぱりなのです。？兄様も、秀姉様も、いったい、何を考えてやがるのですか？）

そう疑問に思ったのだが、悲しいかな、尊敬する姉の秀児と違い、彼女は歴史については無学である。

（まあ、今度秀姉様に会つたときに、聞き出してやるのです）

結局、意味のわからないまま、絲児華は叔父の劉良の家へと帰つて

行った。

「う、うえっ!? な、なんだ、これ!? かつれええええー!?!? 肉も野菜も、全部塩まみれじゃねえか!? くそ、あの糞餓鬼め、覚えてやがれ!」

　　絲児華が帰って間もなく、森中に、このような声が響き渡ったのは、また別の話である。

\*

一方、こちらは新野の? 農邸。

　　住み慣れた春陵の地を後にして、なんとか無事に? 農・劉元夫妻の元へと逃れることができた修と秀児の二人は、そこで何気ない日常を満喫していた。

　　? 農・劉元夫妻は、数日間にも及ぶ逃避行の末に辿り着いた二人を労ってくれたばかりか、家族同然に面倒を見てくれるとまで言うてくれたのである。

　　いくら劉元の実の妹と、その友人であるとはいえ、これは破格の待遇と言わねばならない。「お尋ね者扱い」されている人間など、匿う、匿わないの前に、縁を切るのが普通のはずなのだ。

だが、人のいい姉夫婦は、そんなことなど気にもせず、特に劉元に至っては、

「困った時はお互い様よ、秀ちゃん。むしろ、また一緒に暮らせて、とても嬉しいわ」

と、言つて、暖かく出迎えてくれたのだつた。

そんな経緯があつて、秀児と修の二人は、？農邸で居候生活を始める運びとなつた。

それからの数日間は、本当に何気ない日常生活の繰り返しであつた。

流石にただ飯を食わせてもらうわけにはいかないのです、？農が所有する莊園の一角を借りて、農作業をすることにした二人は、そこで懸命に働いた。

そして時間を見つけては、劉伯升直伝の武術の鍛錬も怠らなかつた。

その一方で、修は秀児以外の人間と付き合えるよう、いろいろと行動した。

農作業の合間に、周辺で働いている人たちには元氣よく、丁寧に挨拶し、見よう見まねで、近所の悪餓鬼たちの遊び相手にもなつてやつた。その際、毎度、悪餓鬼の掘つた落とし穴にはまって、毎日泥だらけで帰ってくるのは別の話である。

そんな彼の努力が実つたのか、居候生活三日目にして、さっそく同世代の友人ができた。

？ 晨・劉元夫妻の間には？ 汎とつはんという少年がいた。秀児にとっては「甥っ子」に当たる少年だが、これがちょうど十五歳で、修や秀児より一歳年下なだけである。

あまり年齢が離れていないことに加え、？ 汎は母親に似て温厚な性格の少年だったので、修がちよっと話すと、すぐに打ち解け合うことができた。

この世界に来て以来、どちらかと言うと、年上の人間ばかり相手にしてきた修にとっては、秀児などの例外を除くと、久しぶりの同世代の友人である。修が小躍りして喜んだことは、言うまでもない。

しかも、？ 家には「癒し要員」ともいえる、三人の小さな女の子たちがいた。

いずれも？ 晨と劉元の間に生まれた女の子たちで、？ 汎の妹たちであり、秀児にとっては「姪っ子」に当たる子どもたちだ。

その幼い三姉妹の全員が、大変人懐っこくて、新参者である修を全く恐れる様子もなく、「遊んで」と言わんばかりにせがんでくるのである。

基本、女の子が苦手な修ではあったが、自分よりもずっと年下の幼女相手に遊ぶことを拒否するほど腐ってはいない。

むしろ、？ 汎や秀児たちと一緒にあって、喜んで遊び相手になつてあげたものだった。

そんなこんなで、平和な日常は過ぎて行くのであったが、流石の

修も、そして秀児や？一家の人々も、この後、さらに「家族」が増えることになるなど、まったく予想していなかった。

\*

修と秀児が、？一家の「家族入り」を果たして十日目の昼過ぎ。居間で一家全員そろって、談笑していたときだった。

「こんにちは、？晨様！」

突如として、邸の門の方から、一人の少女の声があがった。

（ん、お客さんかな？）

修には一瞬、誰の声かわからなかったが、なんとなく聞き覚えのある声だった。

（いったい、誰だろう？）

だが、修がそう思うよりも早く、彼の隣に座っていた秀児が、素早く立ち上がった。

「この声、茶柳だ！」



「え、仲先さん？」

呆氣にとられる修を他所に、秀児は、よほど親友と会うことが楽しみなのである。彼女は邸の門の方に向かって、ぱたぱたと駆けて行った。その日の彼女は、自慢の蒼い髪を、いつものように後頭部で一纏めにはせず、頭の両側で、左右一対ずつのお団子にしていたため、その仕草がいつも以上に女の子らしく見えたことは、別の話である。

「あらあら、秀ちゃんつたら」

劉元が微笑みながら、ゆっくりとした足取りで、妹の後に続く。それを見て、修も？一家の面々と共に門へと急いだ。

門の所まで行ってみると、果たしてそこにいたのは、秀児の親友の茶柳こと、朱？その人だった。もっとも、修たちが以前、長安で会った時のような「儒服」姿ではなく、その辺の農民の女性が着ているのと変わらない普段着姿ではあったが。

「やあ、茶柳。しばらくだったね」

「秀ちゃん！」

久しぶりの再会に、互いに面と向き合って、手をつなぎ合う二人。特に、茶柳の方はわずかながらに、涙まで流していた。

「よかった。秀ちゃんが無事で、本当によかった……」

「あはは。茶柳は本当に大げさだなあ」

「当り前だよ!? だって、秀ちゃんも、伯升さんも、『お尋ね者』  
になったって、聞いたんだよ? また捕まったんじゃないかって、  
ずっと、心配だったのだから!」

「大丈夫だって! どうせ捕まっても大した罪じゃないし……」

「もう、またそんなこと言って!」

「あははは!」

そのようなやりとりを交わす二人を、修と? 農一家は、後ろから  
暖かく見守った。

(ん? 『また捕まった』って、どういうことだ?)

ふと、修がそのような疑問を思い浮かべたときだった。

「それより茶柳。早く農義兄様たちに挨拶しなくちゃ」

秀児がそう言って、後ろにいた? 農一家の方を示した。

「あ、そうだったね」

忘れていた、と言わんばかりに、茶柳は右手を思わず口前まで持  
ってくる、すぐに律儀に挨拶した。

「お久しぶりです、? 農様に、劉元様。それから、えっと、ああ、  
この間の伯昇さんに、みんな……」

「いらっしやい、茶柳ちゃん」

「よお、久しぶりだな」

「久しぶりだね、仲先さん」

『こんにちは！』

あせあせと挨拶する茶柳に、次々と挨拶を返す修と？一家たち。ちなみに、最後に声をそろえて挨拶したのは、幼き？三姉妹である。（余談だが、？汎は用事で外出しており、留守であった）

「ところで、茶柳」

挨拶を終えた所で、秀児が口を開いた。

「今日はどうして、また急に、晨義兄様の邸まで来てくれたのかな？」

「あつ、うん。今からそのことを、皆さんに話したかったの」

茶柳はそう言うと、いましがた、彼女自身がくぐった邸の門の方に目を向けた。そして、優しい声で呼びかけた。

「玉ちゃん、芙ちゃん。こっちに来ていいよ！」

「了解であります！」

「はいですよー！」

それはそれは、可愛らしい声だった。特に、一人っ子であった修

にとつては、

「こんな声の妹が欲しい！」

と、思わず思ってしまうほど、両方とも可愛い声だったのである。

「秀お姉ちゃん！」

「秀姉さま〜！」

そんな声の持ち主たちはと言えば、とつくに茶柳の横を素通りして、秀児の薄い胸元へと飛び込んで行った所だった。

「うわっ、誰かと思ったら！」

一瞬驚きつつも、秀児は彼女の背よりずっと低い二人の幼女を、まるで我が子を可愛がるかのように、ギュッと抱きしめてやった。

「玉ちゃんに、芙ちゃんまで！ わあ、よく来たね！ 元気だったかい？」

「うん。玉は元気だよ」

「芙も元気ですよ〜！」

嘘偽りのない笑みと言葉で答える二人。本当に見ている微笑ましいものである。

「あらあら、いらっしやい」

そんな二人に向けて、劉元が微笑みながら歩み寄ると、秀児に代わって、二人を優しく介抱した。それに、彼女の娘たちも続く。

だが、邸の主である？ 農だけが、微笑みつつも、冷や汗を浮かべていた。その表情は、

「まあた、面倒くさそうな事になった」

とでも言わんばかりだ。

「それで、？ 農様。話というのは……」

ふと、茶柳が話の続きをしようとしたが、？ 農が遮った。

「『俺の家で、その子たちの面倒を見る』ってことだろ？ まったく、伯升のやつ……」

「うっ……」

言わんとしていたことを先に言われて、言葉に詰まる茶柳。どうやら、凶星だったらしい。

「そうですね、はい。この子たちが、秀ちゃんや劉元様と一緒に過ごしたい、と言ったので……」

もしかしたら、追い出されるのではないかと心配したのか、茶柳が慌てて声を絞り出した。だが、その心配は杞憂だった。

「別にかまわねえよ」

？晨は仏頂面で、そう言った。

「この？家は、土地だけは無駄に広いんだ。まあ、近くの陰家には及ばないけどよ。それでも、今更、ガキの一人や二人増えたって、どうってことねえよ」

そう言つと、？晨は、後は女どもに任せると言わんばかりに、欠伸をしながら邸の中へと戻り始めた。

「ありがとうございます！ 伯升さんに代わつて、お礼を申し上げます」

そう言つて頭を下げる茶柳。だが、？晨は、

「別に礼を言われる筋合いはねえよ。ま、伯升のヤツだったら、死んでも礼は言わねえだろうがな」

とだけ言つて、そのまま邸の奥へと姿を消したのだった。

そんな二人のやりとりを、修は黙って聞いていたが、ふと、疑問に思った。

( ippitai, doui iu koto da? sore ni..... )

彼は、秀児や劉元たちと一緒に戯れている、九歳くらいの黒髪の幼女と、七歳くらいの赤紫の髪の幼女の方をじっと見つめながら考えた。

( この子たち、ippitai nandarou? )

気になった修は、茶柳に質問した。

「あの、仲先さん」

「え、ひゃい！？ あ、すみません。なんでしょうが、伯昇さん？」

話しかけられると思ってなかったのか、舌を噛んでしまう茶柳。それがつぼにはまってしまったらしく、修は嘖き出しそんな笑いをこらえながら、続きを述べた。

「えっと……、俺のことは、『修』でいいよ。それより、あの子たちは……っ？」

「ああ、玉ちゃんゆーちゃんと芙ちゃんふーちゃんのことかな？」

彼女はそう言つと、急いで説明した。

「えーと、まず、お姉さんの『玉ちゃん』というのが、黒い髪の方の子で、本当の名前は、『劉章りゅうしょう』ちゃんだよ。そして、妹の『芙ちゃん』は赤紫の髪の方の子の方で、本名は『劉興りゅうけい』ちゃんって言うんだよ。あっ、言い忘れる所だったけど、『玉ちゃん』『芙ちゃん』というのは、二人の真名の頭文字をとって言ってるだけだから、修さんは二人を呼ぶ時は、気を付けてね」

「ふーん……」

修は説明を聞きながら、二人の幼女こと、劉章と劉興の方を、ぼうつと見ていた。

茶柳の説明は、あくまでも名前を述べただけに過ぎない。それ以

外のことは、何一つ、わからなかったのだ。

それだけでは、どうしてあの姉妹が、秀児や劉元にすごく懐いているかが、まったく説明がつかない。

（『劉』だつて？　じゃあ、秀児の妹、いや、たしかあいつ、妹は一人しかいないと言ってたし。だとすれば、従妹か何かか？）

考えた末に、修は再度、茶柳に聞いてみることにした。

「あの、仲先さん？」

「あ、私のことは別に『茶柳』でかまいませんよ？　えっと、修くん、でいいかな？　修くんは、秀ちゃんのお友達だし？」

「あ、ありがとう。それで、茶柳さん？」

「はい？」

「その、あの二人。劉章ちゃんと劉興ちゃんのことなんだけど、あの子たち、秀児の従妹か何か？」

そう聞いた時であつた。突然、茶柳が、きよとんとした、なんとなく間の抜けたような表情になつたのは。

「あれ、修くん。知らなかったの、かな？」

「え、何を？」

「ええ！？」



訳が分からなくなる修をよそに、茶柳は驚きの表情を見せた。

「えっと、修くん。今までずっと、伯升さんの所でお世話になってたのだよね？」

「え、ああ、うん。そうだけど？」

「もしかして、伯升さんや、秀ちゃんから、何も聞いてない、のかな？」

「え、何も聞いてないけど？」

「えええ！？ 伯升さん、まさか、そんな大事なことも教えて無かったなんて……」

混乱する修を置いて、一人驚き、果てにはため息までつく茶柳。やがて、意を決したのか、ずいっと修の面前まで顔を近づけると、  
「修の知らない真相」を語り始めた。

「修くん。これは大事なことから、しっかり覚えておいてね？」

「は、はい！！」

思わずたじろぐ修。だが彼は、この後、さらなる衝撃に遭うことなど、思ってもいなかった。

「あのね。玉ちゃんと芙ちゃん、つまり、劉章ちゃんと劉興ちゃんは、劉元様や、秀ちゃんにとっては『姪』子さんに当たるの。そして……」

一息さえつがずに、茶柳は一気に衝撃の事実を言い放った。

「あの子たちは、『伯升さんの、実の娘さんたち』なの！」

「…………はい…………？」

修は、一時的に凍りついた。何を言われたかが、理解できなかつたからだ。

だが、どんな貧弱な脳みそでも、その言葉の意味を完全に理解するのには、そんなに長い時間はかからなかった。

「えええええ！？」

その日、新野一帯を揺るがさんばかりに、一人の少年の、驚愕の聲が響き渡った。

なお、その驚愕の声の主である少年、柳修が、その後、「あの父親」とは全く似ても似つかない、二人の幼女に懐かれたことは、また別の話。

\*

ここは？州泰山郡式県

泰山の麓に位置する、わずか三百戸の小さな県である。

この小さな県はかつて、高祖・劉邦が長子・斉悼恵王・劉肥、及びその息子の城陽景王・劉章を祖とする、式侯・劉萌の領地であった。

かつてというのは、すでに、かの王莽が国を乗っ取ったため、劉萌は式侯の爵位と領地とを没収されて、庶民に落とされていたからである。

そして、その劉萌はすでに故人となっていたが、彼には三人の娘たちがいた。

上から、恭、茂、盆子という名前である。

そして、その三遺児たちは、父の残した邸と財産を頼りに、この小さな式の村で、健気に生きていた。

「みてみて、敬姉さま！」

机に向かって儒教の科目の一つ、「尚書」の勉強していた長女・劉恭の元に、数え歳、十歳くらいの少女が、とことこと走り寄って来た。

「なーに、雫々ちゃん？」

姉は勉強の手を止めて、妹の方を振り向いた。

「みてみて〜！」

そう言つて、盆子こと雫々は、彼女自身の、赤みがかつた茶髪の頭を指差す。そこには、名前はわからないが、黄色くて小さな、可愛らしい花で作られた、天然の花冠が乗っかつていた。

「わあ、綺麗ね。似合つてるわよ」

劉恭こと、敬恩<sup>けいおん</sup>は、思わず息を呑んだ。花そのものが可愛らしくて美しい上に、その花冠は、子どもが作ったとは思えないほど、綺麗だったからだ。いや、むしろ、汚れ無き子どもが作ったからこそ、綺麗なのかもしれない。

「あのね、これ、お姉様にあげる〜」

雫々はそう言つと、自身の頭から花冠を外し、それをそのまま姉の頭に乘せた。

「え、いいの？ わあ、お姉ちゃん、嬉しいよ！」

「えへへ、ありがとう〜！」

姉への贈り物を済ませると、雫々はぱたぱたとした足取りで、そのまま庭の方へと出て行つた。

「本当にいい子……。ねえ、そう思わない静ちゃん<sup>せい</sup>」

妹を見送つた後、敬恩は、後ろの方で、竹簡を読んでいる、眼鏡をかけた少女の方を見て言つた。

だが、眼鏡をかけた少女・劉茂りゅうぼうこと、静は、よほど書簡に夢中なのか、姉の言うことには答えなかった。

(相変わらずね。ま、いいか……)

ため息をつくと、敬恩は再び勉強に集中した。

(静や雫々のために。そして、この式侯家のために、私がしっかりと勉強しなきゃ。勉強して、朝廷にお仕えして、そして、この式侯家の名を、再び取り戻す……)

彼女はそう考えながら、熱心に勉強していた。

お家再興を願う長女・劉恭。

読書にしか興味のない次女・劉茂。

そして、無邪気に遊び続ける三女・劉盆子。

一見、その辺にゴマンといそうな、没落貴族の遺児たちである。

だが、彼女たちは知らなかった。間もなく、彼女たちに、過酷な運命が襲いかかることになることなど。

## 間章其の三 姉妹さまさま（後書き）

### 恋姫紹介

#### （劉秀一家）

##### ・劉伯姫

真名は絲兎華。現在、十四歳。

劉伯升・劉秀兄妹の妹で、劉六兄弟の末っ子。

蒼い髪を一本の三つ編みにし、春萌を小さくしたような感じだが、いつも上から目線な口調と態度を取る。それでも、なぜか、「く」なのです」と締めくくる。

現在、叔父の劉良の家に居候中。料理は得意だが、気に入らない相手に嫌がらせすることも……。

c v i m e e j i : 櫻井浩美

##### ・劉章

真名は玉鈴。愛称は「玉ちゃん」

劉伯升の長女で、現在九歳。

人懐っこい性格である。

黒髪で、お団子頭。

c v i m e e j i : 長谷優里奈（落合祐里香）

##### ・劉興

真名は芙蓉。愛称は「芙ちゃん」

劉伯升の次女で、現在七歳。

姉同様、人懐っこい。

赤紫の髪で、お団子頭。

実際の劉興は、wikiでは、劉備と意外な関係があるというが

……。

CVイメージ：門脇舞以

(式侯家)

・劉恭リウキョウ

真名は敬恩ケイオン。

式侯・劉萌の三遺児の長女。十八歳。

式侯家の再興のため、一生懸命勉強している。

正史では、この時代の人物で、もっとも悲劇な人物と言っべきであろつ。

CVイメージ：桑島法子

・劉茂リウモウ

真名は静セイ。十五歳。

式侯家の次女。

あまり物事に興味を示さず、いつも本ばかり読んでいる。

正史でも、あまりエピソードがない。

ちなみに、劉秀の従兄弟に、同姓同名の人物がいるが、無関係。

・劉盆子リウペンシ

真名は雫々シヅ。十歳。

式侯家の三女で、まだまだ幼い。

勉強はあまり得意ではなく、なにか他のことをするのが好きな女の子。

後に、とんでもない事態に巻き込まれる。

CVイメージ：名塚佳織

注釈、ならびに後書きは、後日改めて投稿します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0036u/>

---

恋姫†先史 光武帝紀

2012年1月2日02時46分発行